

第6回 全国女性史研究交流のつどい'94やまがた

報告書

●時間/平成6年9月3日(土)
9:30~17:00

4日(日)
9:00~11:30

●場所/山形市・ホテルキャッスル

第6回 全国女性史研究交流のつどい'94やまがた実行委員会

表紙 鎌田涼子
カット 寒河江勝子

CONTENTS

オープニング

語り“おしんの里の女のくらし”	吉田コト子・石川 精一	1
あいさつ	実行委員長 三宅 高子	2
会場風景		3
記念講演「女性史とフェミニズム」	上野千鶴子	7

分科会『おんなも創る うつくしい街、ゆたかな暮らし』

☆第1分科会 「女性の過去・現在・未来」		18
☆第2分科会 「働く女性」		31
☆第3分科会 「家族と地域」		38
☆第4分科会 「暮らしと環境」		45
助言者のことばから	米田佐代子・柴田 洋雄	
	寒河江志郎・阿部 康子	52

第6回の“つどい”のまとめ

「現実を深くとらえた女性史を求めて」	伊藤 康子	53
反響（速報、こえ、新聞記事、etc.）		55
会場風景		64

今後の課題と展望

「女性史のつどい、その歴史と期待」	伊藤 康子	65
「山形の熱い二日間」	米田佐代子	67
「“つどい”をふりかえって」	編集委員会	69
編集後記		70

オープニング

語り “おしんの里の女のくらし”

◆ナレーション◆

ふるさと「やまがた」に生きた女の歴史は、一面に花咲き乱れる春、暑い暑い夏、実りの秋、厳しく長い冬、蔵王、月山、鳥海の美しい山並み、そして母なる川、最上の流れ、これらの豊かな自然にはぐくまれ、紡がれてきました。

生命を生み、はぐくむ女の役割を重ね合わせて、物言うことなく、時に時代の流れに翻弄されながら、辛抱よく、たくましく、やさしく、一途に生きてきた山形の女の姿、「おしんの姿」がありました。

そして今、女たちは、「より人間らしく」「よりわたしらしく」生きようとしています。生涯を通して働き続ける女性、学ぶ意欲を持ち続ける女性、ペンを取る女性、連帯する女性、確実に女（ひと）と男（ひと）のネットワークの輪を広げています。

山形の花、紅花の染めは、回を重ねるたびに光とつやを増し色鮮やかに染め上がっていきます。

「紅花の里」の女の歴史は、遥かな時を経て、光沢を増し、いまをしなやかに生きる、明るい未来へ引き継がれようとしています。



語り手 吉田コト子
聞き手 石川 精一

◆対 談

石川 一家心中を考えるほどの貧しい生活を乗り越えて、自分探しの旅を続けている吉田さんは山形で生まれ、昭和13年に上京し15年に結婚。その3年後、ご主人は、怪我がもとで両足がきかなくなりました。昭和18年、山形市に戻り、小白川町にある天満神社の片すみで小さな一銭店を始めておられます。

そうした中で「貧乏貴族」という本を出されましたが、きっかけは何だったのですか。

吉田 末っ子が社会に旅立つ時「おふくろ、寝たきりのおやじに47年間仕え、子どもを育てただけでの一生でくやしくないのか！ 自分史を書いて、俺達子どもに残してくれよ」とすすめられ、働きながらちょっぴりちょっぴり書きためました。1冊の本にするのに10年かかりました。

石川 あのように大変な窮乏を乗り越えられたのは、何だったのですか。

吉田 3人の子どもの信頼しきった6つの目ですね。それから地域です。隣組の人達からは本当に良くしていただき、町内の人達からも多くの支えがあって、乗り越えられました。

石川 75歳という年齢で東北芸術工科大学の聴講生になりましたが、そのわけを聞かせて下さい。

吉田 私は47年間主人の看病ばかりで世の中を知りませんでした。主人が亡くなって1年間、何をしたら良いのかわからなくなっていました。そんな時に、友人に誘われて聴講生となりました。楽しいですよ。半日行くと、ものすごく緊張しますが、学ぶことの楽しさを知りました。

石川 さあ、それではおしんの里の吉田さんと共に、女性の生き方をめぐって考えてみましょう。

実行委員長 三宅高子

みなさま、ようこそおいでくださいました。心から歓迎申し上げます。

今年の夏は、全国的に異常な暑さで、ここ山形も、連続真夏日が38日と観測史上第1位を記録しましたが、9月の声を聞いて朝夕は、めっきり涼しさを感じるようになりました。

このたび、全国の女性たちにより、紡がれ、引き継がれてきました『女性史研究交流のつどい』第6回大会をここ山形で開催させていただくことになり、本日大勢の皆様をお迎えできましたことを、主催者として、大変うれしく思いますと同時に感謝申し上げます。

山形での開催につきましては、一昨年9月、沖縄県で、全国女性史のつどいが開催された際に、次の大会は「やまがたで」とお声かけをいただいてから、口々に伝えられ、その輪が大きくなって「ぜひやってみよう」となり、実行委員会を組織しました。文字どおり、手づくり、手探りのボランティア活動を続けること一年、多くの方々のご協力によって、今日のこのつどいの開催となりました。

振り返ってみますと、今から17年前の1977年、愛知女性史研究会の呼びかけで始まった第1回のつどいから、第2回目の北海道、第3回目の神奈川、次いで愛媛、沖縄と回を重ねるごとに、地域的にも、年齢的にも幅広く、女性史への関心の深まりと広がりを見せ、参加者も多くなったと聞いております。

そして今回、第6回女性史のつどいは、『おんなも創る うつくしい街、ゆたかな暮らし』をテーマに、先輩女性たちが歩んでこられた姿を検証し、多くを学びとりながら、未来を拓く女性史の創造に寄与しようと、そしてその生き方、暮らし、環境など、よりよい生活を創りだし、新しい歴史を紡いでいこうと、このつどいを企画しました。

おしんの里山形は、先ほどの『語り』でもご覧いただいたように、美しい自然と豊かな資源に恵まれたところです。県土を貫く母なる川、最上川、蔵王・月山等の霊峰、緑豊かにひろがる田園と四季折り折りに姿を変えております。

これら自然とのかかわりの中で、郷土色豊かな文化を育み、産業の花を咲かせてきました。

そのようななかで、最近では、社会の各分野で活躍する女性が、増え続けております。趣味の分野や芸術、学問と活動の領域は、広がりつつあり、働く女性の数も、全国平均を上回るなど、生き生きと家族と共生している姿が目立ってきております。

この2日間、北は北海道から南は沖縄まで全国22都道府県から、そして県内各地から、ご参集いただきました皆様方には、ともに話し合いを深め、交流を広められ、実り多く楽しいつどいとなりますよう、ご期待申し上げますとともに、この女性史研究がさらに充実し、その輪が広がっていきますよう、ご祈念申し上げます。

最後になりましたが、山形県、山形市並びに関係各位の多大なご協力、ご指導等いただきましたことを心からお礼申し上げます。





◇ 開会式



◇ 開会を前に



◇ 和気あいあいと受付風景



◇ はなしがはずむ“おしゃべりサロン”（つどい前夜）



⊆ 講演する上野千鶴子さん



⊆ 活発な質問があった



⊆ 熱心にメモを取る参加者も見られた



◇ 第1分科会
問題提起と話し合い

第2分科会 ◇
問題提起と話し合い



◇ 第3分科会
パネルディスカッションと話し合い

第4分科会 ◇
スライドによる
問題提起と話し合い





◇ つどい開催を心から祝って 高橋洋子知事夫人



◇ にっこりわらって…… ごあいさつ



◇ ごちそうを前に



◇ 花笠踊りで盛り上がる

女性史とフェミニズム

東京大学助教授 上野 千鶴子

1 はじめに

本日はお招きいただきまして、本当にありがとうございます。皆様方との出会いをととても楽しみにしてきました。

私は、歴史学者ではありません。社会学者ですが、このところ、私は、女性史になみなみならぬ関心をもっております。

今日は私の関心を皆様方と共有してぜひいろんな反応をいただきたいと思います。

2 日本女性史と女性学の不幸な関係

今日のタイトルは「女性史とフェミニズム」となっておりますが、女性史とフェミニズムとは「と」のつくような関係ではなくて、切っても切れない関係にあるはずなのですが、なぜこういう言い方をしなければいけないのかといいますと、日本の女性史と日本のフェミニズムの間には、不幸な出会いがあったからです。日本の女性史は、昨日、今日できあがった学問ではなくて、歴史の長い学問です。日本の女性史は、70年代にリブが成立し、その後、フェミニズムの影響下に女性学が成立するもっと前から存在した学問でした。フェミニズムの前には、皆様ご存じのように、長い間、唯物史観の影響下にありました。

本日この会場には、女性史の大先輩である米田佐代子さん、伊藤康子さんたちがいらっしゃると思います。この方たちをさしおいて、私のような後から来た者が「女性史とフェミニズム」という題でお話しをするのは、心苦しいのですが、米田さんご自身が、91年にこういう文章を書かれております。

「80年代以降、女性解放の理念をめぐる、フェミニズムにかかわる論争が展開されてきたが、女性史解放の課題とかみ合う議論は少なく、特に女性史研究者側からの発言は、極めて少ないといってもよいだろう。

特に、75年の国際婦人年以降、日本社会に起こった女性をめぐるさまざまな現象を歴史の所産として

とらえる発言は、率直に言って女性史研究者側からは、微々たるものである」(1)

この発言に対して、フェミニズムの側から、例えば荻野美穂さんは、こう答えています。「日本のフェミニズムは、70年代から80年代にかけて、画期的な展開を示しました。その80年代のフェミニズムの影響は、女性史にあまり関係しているようには思われません。なぜかと言いますと、70年代初期にみられたフェミニズムに対する不信感が、女性史の側にあったのです」と彼女は指摘しております。

「そのフェミニズムに対する不信感や距離感が、ほぼそのまま持ち越されてしまったということは、80年代には、理論面ではもっとも活発で多産な分野の一つであっただけにそれが（女性学）不幸であったというほかなかった」と、荻野さんは指摘しています。(2)



女性史とフェミニズムは、必ずしも幸福な出会いをしなかったわけですが、その「出会い」の前から、日本女性史は成立しておりました。70年代までの女性史といえば、井上清さんの「井上女性史」(3)あるいは高群逸枝さんの「高群女性史」(4)でした。

井上清さんは、もちろん唯物史観論者でしたが、高群さんは、必ずしも唯物史観のもち主ではありません。史観の違うこの両者が共有したのは、戦争に負けて進駐軍という名の解放軍がやってきて、いまこそ日本女性の解放の幕開けだという「解放史観」でした。「解放史観」の影響がどんなに強かったかは、例えば、唯物史観をもとに下層民の研究に携わっ

た赤松啓介さんという在野の民俗学者が、1950年「結婚と恋愛の歴史」という論文のなかで、こう書いていることから伺われます。「日本の女性も、また世界的な苦難の歴史をたどっているいま、新しい解放を目にしている。特にアジア的な古い家父長制の残存によって、個性を奪われていた日本の女性が、心にもない貞淑と犠牲の古い絆から解放されようとしていることは、すべての働く者にとって、また楽しい喜びであろう」(5) 下半身の民俗学者として知られる赤松さんが当時このように言っているということは、今から思うと夢にも信じられないような出来事です。例えば、井上清さんは、その当時「労働者の家庭というのは、男女の不平等を知らない」といっておりますが、労働者の家庭でも妻を殴る夫はたくさんおります。そういうことを考えますと、この人たちが、社会主義とか、性の解放とかに関してどんなにナイーブな信頼をもっていたのかわかるのですけれども、こういう解放史観というものが、日本女性史では長い間影響力をもっていました。

しかしながら、この当時、既に米田佐代子さんたち、女性史の研究者は、井上女性史を「日本の女性の解放を階級の歴史に従属させるものである」と批判しています。この唯物史観の影響については、日本の特殊性を考えなければなりません。

私は、80年代に入ってから、マルクス主義フェミニズムの著作をあらわしましたが、日本ではヨーロッパ諸国に比して、思いのほか、マルクス主義フェミニズムは広がりませんでした。なぜかといいますと、マルクス主義の側の抵抗が非常に強かったからでしたが、その抵抗の背後には、日本は世界でもまれにみるマルクス理論の超先進国であったという事情があります。

日本のマルクス研究者たちは、ドイツ語版や英語版の資本論を一版、一版克明に点検し、一字一句の違いまで検討するという仕事をやり遂げました。

そのくらい国際水準の上をいくマルクス研究超先進国だったのですが、それが逆にユーロ・コミュニズムのようなマルクスの柔軟な解決を阻み、またマルクス主義の保守本流の牙城が、フェミニズムによって揺るがされるということをこんなにも遅らせてしまったのではないかと思います。

フェミニズムの洗礼を浴びて、70年代から80年代にかけて新しい「女性史」が登場しました。これは、

女性史本来の研究者の間からではなく、むしろ女性史の隣接領域からでてきました。

例えば、小山静子さんの『良妻賢母という規範』(勁草書房、1991年)というすぐれた著作があります。彼女は、教育学者であって歴史学者ではありません。また牟田和恵さんの「戦略としての女」とか荻野美穂さんの「身体史の射程」(『日本史研究』366、1993年)なども欠かすことはできません。牟田さんは、社会学者ですし、荻野さんは、もともと英文学の出身です。それに坪内玲子さんの『日本の家族一家の連続性と不連続性』(アカデミア出版会、1992年)という優れた仕事もあります。この方は、人類学者です。このように教育学、社会学、文学、人類学、民俗学という領域の人々が女性史の分野で、非常に多産なおもしろい仕事をしておられます。

こういう仕事に対して、歴史学の分野の人たちから、批判がありました。例えば、理論が先走って、実証がないとか、資料の扱い方がなっていないとか、歴史学の初歩にはずれているといった批判です。もちろん、歴史学の中でも、フェミニズムの洗礼を浴びた若手の研究者の間から、ユニークな研究を手がける人々が次々と出てまいりました。

70年代、フェミニズムの波の中で、各地で女のルーツを探る様々な勉強会が広がっていきました。そこでのテキストは、「井上女性史」「高群女性史」しかなかったという現実の中から出発したのです。

3 女性史論争

70年代に、皆様よくご存じの「女性史論争」が occurred。この論争は女性史家の村上信彦さんが、井上清著『日本女性史』を例にあげ、女性史は井上の作品のような解放運動史ではなく「無数のハンディキャップを背負った女の生活史」でなければならないと主張したのに対し、米田佐代子さんや伊藤康子さんたちが解放運動史の立場を擁護し、さらに村上さんが反批判を行なったという論争です。

70年というのは、日本でリブが誕生した年です。その少し前に、1969年から72年にかけて村上信彦さんの『明治女性史』全4巻(理論社)が刊行されています。同じ時期に『高群逸枝全集』全10巻が理論社からでております。68年には、山本茂美さんの『あゝ野麦峠』(朝日新聞社、1968年)72年に山崎朋子さんの『サンダカン八番娼館』(筑摩書房、1972年)

と次々に、生活史、民衆史、底辺女性史の刊行が相次ぎ、解放史に対して問題提起をしました。

この論争は、実はそんなに生産性のあるものとはいえなかったのですが、そのなかで第1にリブ対解放史と民衆史との対立、第2に解放史対女性史の対立が表にでてまいりました。70年代の女性史論争というのは、この間の対立を一層深める役割を結果的に果たしてしまいました。

71年の女性史論争のとき、伊藤康子さんは「日本の既製の婦人運動とは断絶したところから始められたウーマンリブ」という発言をされております。リブは「女の怨念と恨みを吐き出す歪んだ噴火にすぎず、現実へのあせりと爆発であり、婦人解放への道筋も明確でないし、展望もない」(6) というように、解放史の担い手は、当時登場したばかりのリブに対して冷淡な反応を示しました。これに対して、フェミニズムの担い手として登場しつつあった水田珠枝さんのような人は、女性史をあくまで階級運動史に従属させようとする唯物史観に対して、反発しています。(7) この対立を萩野さんは、「かつては女性解放のための最先端の理論であったはずの社会主義婦人解放論が、女性史に性による利害の対立や性支配の究明という新しい問題意識が生じてきた際に、そうした方向に女性史が自立していこうとすることにブレーキをかける役割を果たした」とまとめています。(8) これが解放史対フェミニズムの間の対立でした。

ところが、その後で底辺民衆史や生活史派とフェミニズムや女性学との間にもやはり対立がおきました。例えば89年に鹿野政直さんは、『婦人・女性・おんな』(岩波新書)と言う本のなかで、女性史には2つの問題があると指摘しておられます。第1は、急激に成長したために「女性史は率直に言って、足腰が弱い」という点です。「実証力や理論構成の弱さ、聴き取りの流行によるお手軽さ、円筒型女性史ともいべき視野の狭さ、要するに高群や平塚らいてうの研究をやっている一種のエリート女性史になっている」という批判です。

70年代の女性史論争の大きな成果は、地方女性史と個人史が全国に広がったことでした。リブの中には、CR運動(コンシャスネス・レージング consciousness raising) 少人数の女性の話し合いで、女であることを問い直す運動―意識覚醒運動と

いうのがありました。

女性史がもった大きな意味は、「私はこんな思いをしてきた」とか「私はこんなことを生まれて初めて表現している」といった女の経験、これまでことばにされたこともなく、聞く耳もなかった女の経験を聞くに値するもの、言葉にしてもよいものというふうにお互いに伝えあったことでした。そういう意味で、70年代の女性史論争が成果がなかったとはいえないと思います。にもかかわらず民間女性史は、アカデミズムの歴史学のなかには、はいりこむことができませんでした。そこには唯物史観と実証史学の牙城があったからです。

私は、女性史の研究者の方たちの集まりをみていつも思うのですが、定職をもっている人達が非常に少ないのです。女性史研究をしても、研究職につくのは大変難しいと言えます。地方女性史や個人史、聞き書きを支えてきたのは、それぞれ自分のエネルギーや時間をそそぎながら研究を続けてきた在野の研究者の方たちが、全国にいらしたからこそです。ただし、そういう積み重ねがあっても、女性史が講壇や歴史学にははいりこむことは、なかなか難しいことでした。歴史学は、学問の老舗であり、早くから確立された権威をもっています。これに比べれば、社会学や人類学などは、新参ものの学問で、こういう学問には、女が参入しやすいし、事実、他の学問分野にくらべて相対的に女性の研究者が多いのです。

地方や底辺で、在野の女性研究者が積み重ねた研究が、なかなかアカデミズムに逆流しないということについては、実証史学側からの手続き的な訓練が足りないという批判が鹿野さんの論点の第1点でした。

第2は、逆に、80年代によりやく成立しつつあった女性史が、アカデミズムのなかへ参入することによっておきた現象です。アカデミズムへの参入は、その学問を精緻化する機会を与えます。総合女性史研究会が、東京大学出版会から出した『日本女性史』全5冊と『日本女性史研究文献目録』2冊は、そういう意味での代表的な作品でした。それに対しても鹿野さんは、「女性史の分野に多くの杭を打ち込むと同時に、熱い所信が目立ちがちだった女性史を「冷たい」科学に変え、これまでの女性史に息づいていた「痛覚」が消滅した」と批判しています。これに対して、女性史研究会の脇田晴子さんたちが怒っ

たのは当然でした。このあと鹿野・脇田論争というのが起きました。(9)

なぜ民衆史と女性史が不幸な出会いしかできなかったのか、対立せざるを得なかったのかというと、つまり女性というのは即ち弱者である、あるいは弱者であってほしい、弱者でなければならないという見方からではなかったのでしょうか。民衆史家の男性たちは、中産階級嫌い、インテリ女嫌いだったようです。

同じ時期に、女性学では、従来の女性のとらえかたを根本的に転換するという見方の変化—「パラダイム転換」といっております—が起きています。第1は、理論が変わったということ、第2は、現実そのものが変わったことが女性の見方を根本から変えました。

女性学が成立したのは、70年代後半ですが、それ以前から、「婦人問題論」という学問領域があり、「婦人問題論」を研究している先輩の女性研究者たちがおりました。この方たちは「婦人問題論」という分野があるのに、なぜことさら「女性学」というものをつくらなければいけないのかと反論しました。しかしながら「婦人問題論」から「女性学」への変化には、大きなパラダイム転換が伴っていました。

「婦人問題論」というのは、文字どおり「婦人が問題をもっている」、つまりひっくりかえせば「問題婦人」の研究をやってきた分野です。問題婦人とは、例えば労働婦人であるとか、底辺女性であるとか、あるいは更生中のもと売春婦であるとか、母子家庭の母とか、普通の女のコースからはずれた、「問題を抱えた女たち」の研究のことでした。すなわち、「社会問題論」の一分野、社会病理学だったのです。

主婦と言われ、女のマジョリティつまり、妻になり、母になって「幸せな人生」を送っているはずの女たちは、研究の対象にもならず、解放の対象にもならなかったわけです。

女性史研究のなかで、女のマジョリティを占めるはずの主婦史というものが欠落しているのは奇妙なことです。底辺女性史が扱ったのは、例えば森崎和江さんの『まっくら』(現代思潮社、1970年)と言う本、この本は女坑夫の聞き書きでした。山崎朋子さんの『サンダカン八番娼館』は「からゆきさん」の研究でした。これらは普通の女のライフコースから

はずれた女性の研究でした。底辺の女性を生み出すのは社会病理であり、彼女たちは歴史の闇の中から救済されるべき対象でした。

それに対して、中産階級の女たち、妻、母になって幸せのただ中にいるはずの女たちの人生を疑う研究は、それまでなかったのです。研究者が自分自身を解放しない学問とか、自分自身の出自を問わない学問とは何でしょうか。「婦人問題論」から「女性学」へのパラダイム転換に伴って、研究の対象が、普通の女の規格からはずれた社会病理としての「問題婦人」からあたりまえとされる女の人生そのものを疑う構造学へと全面的に転換いたしました。ちょうどこの時期は、60年代の高度成長期を通して、日本の現実そのものが急速に変わった時期でもあります。

60年代の高度成長期というのは、例えば、柳田国男のいう「常民」の概念を根本的に変えました。「常民」というのは、柳田にとっては農民のことをさしました。いまどき常民を農民とするなら、国民の10%未満しかいない状況です。いまや民俗学でさえ「都市常民」ということばをつくらざるをえなくなっています。「常民」とは誰かといえば、私やあなたたちのことにほかなりません。女性史が「底辺女性」や「問題婦人」にばかり目を向け、中産階級の女、あるいは日本の女のマジョリティとなった主婦を対象にしないということは、「私とは誰か」という学問の一番の出発点をはずれているのではないのかと思います。その研究対象を主婦という女性常民の研究へと変えたのが女性学でした。70年代から80年代にかけて、主婦研究の多産な成果が生まれました。例えば民俗学の瀬川清子さんは、1978年の第1回国際女性学会で「日本の女性の100年—主婦の呼称をめぐって」という歴史に残る記念講演を行っています。(10)

私のデビュー作は、82年の『セクシーギャルの大研究』(光文社)ですが、同じ年に『主婦論争を読む』(勤草書房)という本を出しています。私は、実は「主婦研究者」として出発いたしました。主婦をしながら研究者でもあるという意味ではなく「主婦」を研究対象にする研究者という意味です。それ以前には、「主婦」が研究対象になるなどとは、誰も思ってもみませんでした。

そういう現実の変化と理論の変化と両方の変化を

通して、女性史が変わってまいりました。

しかし、それに対して、89年に、鹿野さんは「痛覚の消滅」ということを言っておられます。あたかも中産階級の女には、痛みがないようにですね。この発言に対して、女性史家が、反発したのも無理はありません。むしろこの変化をつうじて、女性史は、初めて「ふつうの女の歴史」になってきたと言えると思います。

このように女性史の研究者たちは、70年代から80年代にかけて、次々に多産な成果を積み上げてまいりましたが、次に大きな問題に直面することになります。女性の研究者は、これまで誰も研究したことのない領域を手がけてきましたが、例えば、いまから20年前に卒論のテーマに主婦をとりあげたいと言えば、主任教授から、もちろん男性ですが、「君そんなものが学問の対象になると思うのかね」と鼻で笑われるのがオチでした。ところがいまや主婦論でドクター論文を書こうという男性研究者がおります。女性にかかわるありとあらゆる領域、中絶、避妊、産育などが、研究の対象となってきました。ところが研究を積み重ねていけばいくほどフラストレーションがたまってきます。女がどれだけ研究をしても、男の学問はびくとも揺るがなかったからです。女性学というのは、社会科学のあらゆる分野における男性のつくりあげた知識に対する批判でした。その批判に、男が耳を傾けてくれなかったのです。「女は女性史をやっていればよい」「女だから、女の領域をやっていればよい」「女性史？ 僕、関係ないよ」という反応が男性から返ってきます。女性史は、「僕たちが見落とした落ち穂拾いを君たちがやっているのだね」というので、「落ち穂拾いの歴史」と称されます。アメリカのケリーという歴史家は、これをコンプリメンタリーヒストリーすなわち「補足史」「補完史」と呼びました。⁽¹⁾これが私が名付けた「つけた史」であって「つけた史」をいくらやっても、男性は痛くも痒くもありません。「あ、ごめん、僕たち見落としたことを君たちがひろってくれたんだね」ということになります。いくら論文を書いても、批判を向けた当事者が読んでくれない。こういう女性史の集まりをしても、男性は数えるほどしかこないというのが実態です。いくら女性史の研究をしても、保守本流は痛くも痒くもありません。それどころか時々寛大さを示してくれさえします。「ま

あ一人くらい女性史の研究者をうちの学部に入れてやろうか」という。こういうのをトークニズム、「おしるし」といいます。私は、東京大学の「おしるし」です。「ショーケースのなかの女」です。



アメリカでは、フェミニストは、「うるさいから一人は入れておこう、でも一人でたくさんだ」という言い方があります。せめて一人でも入れてくれることはありがたいには違いありませんが、これをゲッター化(囲い込み)といいます。

それに対して、非常にいらだちを示した研究者の一人にジョン・W・スコットという『ジェンダーと歴史学』を書いた著者がいます。その一部を引用してみましょう。

「女に関係ある事柄の研究は、歴史研究の新しい部門ではあるが、既存の歴史のパラダイムに立ち向かい、それを変えるだけの力をもたなかった。それゆえ、政治や権力の問題に関心のあるこれまでの歴史家の考え方とは、没交渉のままである」⁽²⁾「女には、男とは別の歴史があったそうだから、女性史をやってもらおう。我々には関係なさそうだ。女性史とは、性や家族の研究とかいうものだから、政治史や経済史の歴史とは、別のものだろう」⁽³⁾というのが男性の反応です。確かに女性史の積み重ねによって研究職に、女性のポストも増えました。今回の女性史のつどいでも、これだけ多くの人が全国から集まり、行政も協力してくれるところまで、裾野も広がってまいりましたが、これだけ業績が積み重なっても、保守本流はびくともしないし、女性が論文を書いても、男は読んでくれない。男に刃を突き付けているのに、その相手が、そう感じとってくれないという問題がおきてきました。

4 新しい女性史の動向

女性史のゲッター化に対する不満がこうじて、女性史は、いま次のステップにはいろいろとしております。

ミシェル・ペローは「女性史という新しい分野をつくるのが、問題なのではない。もしそのような女性史なら、波風のたたぬ譲歩にすぎないであろう。歴史を見るまなざしの方向を変えるということのほうが、もっと重要であろう。そういうことがなされないなら、女性史はあり得ない」⁽⁴⁰⁾ と言っております。いま私たちは、困難な課題の前に立たされているのです。そのようななかで、つい最近フランスのミシェル・ペローとジョルジュ・デュビー編による『ヨーロッパにおける女の歴史』という本の日本語訳が刊行されました。『女性史は可能か』⁽⁴¹⁾ という本の著者、ペローは、1984年に「女の歴史は可能か」というテーマでシンポジウムを開いております。そこでペローは、「歴史の中に女の居場所がない。だから私たち女は、歴史をもたない存在である」と発言しています。

その7年後、1991年にペローは他の研究者とともに、『西洋における女の歴史』を刊行しています。7年の間に、ペローは「女性史は可能か」という問いに対して、「イエス」という答えを自ら出したのです。

ペローは『西洋女性史』の編纂にあたって、何が困難であったかという問いに答えて、こう語っています。「女について語ったり、書いたりしているのが、もっぱら男ばかりであるということが、一番の困難であった。女が、自分の言葉でものを語っている、その記録が残っていない。従って女の歴史を語るには、男の言葉に耳を傾けるしかなかった」(注8) それでは女性史は、従来、男たちがやってきた歴史と、どう違うのでしょうか。男が残した記録は、おびただしくあって、歴史の対象になってきました。

そこで問題なのは、「新たな史料を探すことよりも、むしろ目の前にある史料を、女の視点で読み直すことである」とペローは言っています。男の書いた史料は、女について語っているのだけれども、実は、女を語っているのではなくて、男が女とはこうあるべきだ、こうあってほしいということを語っているのです。私たちは、男の目というフィルターを

とおして女を見ることになるのです。ペローは「女の歴史」というが、女性を対象とした男がつくりあげた表象の歴史であり、それは女と男の関係としての歴史であって、男自身の歴史なのです⁽⁴²⁾ と言っています。女についての男の観念がどう変わってきたのかということをも史料から読み直すことができます。中世の女について書かれたテキストから、女性史を生み出すためには、フェミニズムを通過することが不可欠でした。ヨーロッパでは女が言葉をもたなかった時代が、中世までつづきました。日本では、女が早い時期から、言葉をもってきた世界に誇るべき歴史があります。『西洋における女の歴史』では西洋、すなわちオクシデントという言葉を使っております。オクシデントというのは、オリエントの反対語です。彼らがオクシデントということばを使ったのは、ヨーロッパは世界の一部にすぎない、ヨーロッパの内について、我々は語るができるけれども、ヨーロッパの外についてはわからない。西洋における女の歴史を書くことをとおして、我々は、アジア、アフリカ、アメリカの女たちが、自分自身の歴史を自分の手で書くことを期待しているという意図からです。日本でも『日本における女の歴史』が日本の女性たちの手によってなされつつあります。

ここで史料の不在について、お話ししておきたいと思います。女の歴史をつくるうえで、どうしても必要なのは、そこに存在していない史料を生み出すという仕事でした。歴史学の中では、古文書や文書史料を対象とする文献実証史学が影響力をもっていますが、この文書史料中心主義という歴史学の保守本流の方法論を、女性史は批判しております。

文書史料について考えるときには、いくつかの検討課題があります。まず第1に、そこに何かあるかではなくて、何が欠けているか、何がないかを問わなければいけません。第2に、その史料を残したのは一体誰か、誰が史料を残し、誰が残さなかったのかという書き手の問題です。第3に、恐らくあまたあったに違いない歴史的な史料のなかで、何が現在までに残され、何が抹殺されたのかを問う必要があります。そのなかでは、文書史料を絶対的な事実と考える文書史料中心主義そのものを、女性史は、批判してきました。何が書かれたのか、誰が残したのか、何が抹殺されずに残ったのかを考えてみますと、現在ある文書史料というものは、長い間、書き手や

読み手の検閲と操作のもとに、今日の姿を迎えているということがわかるからです。文書史料は、それを伝えてきた人達の利益に合致するように残されてきたと考えなければいけません。そうすると女性史の大きな課題の一つは、存在しない史料を立ち上げらせる、生成することでした。

社会学や人類学は、長い間「現実とは何か」という問いをたててきました。現実とは、経験する当事者によってみんな違いますし、経験する当事者によって作り上げられるものです。それを記録に残すときには、語り手と聞き手の両方が必要です。

女性史は長い間、聴き取りという方法によってオーラルヒストリー(口承の歴史)の積み重ねをやってきました。ペローの本のなかに「聴き取りの歴史」についての一章がありますが、そこから引用しましょう。「女性たちの大部分は、これまで抑圧されてきたが、その話を耳を傾ければ歴史のなかに女を蘇らすことができる。声をあげずに柔順であった女たちが、突然姿を現すだろう。そのときに聴き取りによる歴史は、男の目によって歪められた社会のなかで、一つの報復の手段となる」⁽¹⁷⁾

聴き取りの歴史は、2つの問題をもっております。問題というよりは、特徴であると思うのですが、第1は、聴き取りから得られる資料は、それ以前は存在しなかった「知」、聞き手がそこにいることによって初めて現れた「知」であります。第2は、対話のなかで作りに上げられる「知」であるということです。それは、語り手と聞き手の合作による作品です。ただし、その合作は、容易に聞き手による語り手の搾取に転化いたします。例えば、有名な民俗学の研究者によって柳田国男の『遠野物語』の成り立ちについて、あれは語り部の佐々木喜善さんが話したものとばつものだという暴露が行われています。

聴き取りの歴史は、必ず対話のなかで合作として行われておりますが、語り部が、誰に対しても、同じことを、100%テープレコーダーのように繰り返すということはありません。聞き手によって語り手の語る内容が違うという事態が生じます。こういうものを私たちは「臨床の知」clinical knowledgeと呼んでいます。即ちベッドの傍らで、医者と患者がやりとりする相互交渉から初めて出てくるような「知」です。現場から立ち上がる「知」です。そういう意味で聴き取り資料は大きな意義をもっていま

す。

80年代にかけて、歴史学に、文芸批評の新しい理論がとりこまれていくようになりました。その文芸批評とは、フェミニズム批評のことです。

これには、2つの要素があります。その一つは、男性テキストの女性視点からの読み直しです。例えば私が、富岡多恵子さん、小倉千加子さんと共著で出した『男流文学論』(筑摩書房 1992年)という本がその例です。もう一つは、女性のテキストの再発見、生成、創造です。ないものを作り出すという仕事です。この2つの仕事は、女性史のなかで必要であり、かつ行われてきました。女性史の課題は、歴史を読み直す仕事だけではなく、歴史を産み出す仕事でもあります。

そういうなかで、女性史がどうやってゲッターを乗り越えていくかという問題意識が煮詰まってきました。その動きを予感させる新しい動向をいくつか、ご紹介しながら、女性史がどうやってゲッターをぬけだし、次のステップで男性知を組み替えるような仕事ができるだろうかを、考えてみたいと思います。

その1つが反省的女性史です。これは80年代の日本女性史の大きな成果の一つです。日本の女性の過去の歴史を探っていくとき、解放史の見方では、女性を被害者や犠牲者として、とらえがちです。底辺女性史もそういう傾向をもっています。

反省的女性史は、被害の歴史だけでなく、女の中にあつた加害の歴史をも問題にします。これは自分自身を加害者として受け容れるゆとりのできた一つの現れでもあります。これは、80年代に、例えば鈴木裕子さんの『フェミニズムと戦争』(マルジュ社 1986年)のような仕事とか、加納実紀代さんの女たちの「銃後」、西川裕子さんの『高群逸枝』や「戦争への傾斜と翼賛の婦人たち」⁽¹⁸⁾ という形で実りました。反省的女性史の課題の1つは、「エリートの歴史」例えば高群逸枝、市川房枝のような戦前の婦人解放運動の指導層が、大政翼賛会に涉々ながら、あるいは自ら進んで、巻き込まれていった加害責任の歴史を明らかにしました。最近では、あの平塚らいてうでさえ、批判の対象になっています。若手の研究者の中には、らいてうの母性主義を再検討して、らいてうにおける優生思想を問題にする人がいます。⁽¹⁹⁾ りいてうは、「女がいい子どもを産むことで、国家に貢献すべきである」とはっきりいっています。

これを裏返せば、母になる資格のない女は、子どもを産むべきではないということになります。らいてうの母性主義は、「国家的母性」の観念からめとられていく傾向をもっていました。

反省的女性史のもう一つの課題は、エリート的女性たちの中にある加害性だけでなく、庶民の女たちの、戦争協力の過程をも明らかにすることでした。「銃後史」研究は、たすきがけに割烹着で嬉々として旗を振って兵士を送り出した国防婦人会の女たちの加害性を明らかにする仕事でした。

戦争中の女の加害性を最も早い時期に指摘したのは、私の知る限り、村上信彦さんの「日本の婦人問題」（岩波新書 1978年）だったと思います。その中で彼は、戦争は庶民の女にとって抑圧だけではなく、解放の側面があった、何しろ、戦争中は嫁が大手を振って外を出歩けたと書いています。

女性史にも、こういう視点を受け入れる余裕が出てきました。

そういうなかで、フェミニズムとナショナリズム、国民国家の関係を改めて問い直す動きもおきてきました。80年代は、東欧の激動やソビエトの崩壊にみられるように、国家というものが、目の前で次々と崩壊していった時代です。盤石に見えた国家が、こんなにもろいものかということが分かった時代でもありました。

つい最近、ユーゴスラビアのクロアチアからフェミニストの研究者が日本にきて、講演いたしました。そのなかでもフェミニズムとナショナリズムの関わりは、きわめて今日的な問いであることがわかります。ユーゴがクロアチアとセルビア・ボスニアヘルツゴビナに分裂していったとき、私はクロアチア人で隣人がボスニア人だということがおきます。そのとき彼女たちが共に活動してきたフェミニストの仲間の女たちがこういって、彼女はショックを受けたそうです。「私は、まず第1にボスニア人である。そして次にフェミニストである」と。フェミニズムが国籍、国境、国家を越えるということは、抗戦状態にある国家同士の間では、至難の業です。いまでも発展途上国におけるフェミニズムは、国家に対する女性の貢献を盾にとって、女の権利を主張せざるを得ないところがあります。

女性史にとっても、国家という問いが、非常に大きな問題となってきました。フェミニストにとって、

国家というものは、避けて通れない重要な課題となってきたわけです。これまでは、国家というのは、男の独断場で、国家や戦争や軍隊というのは男の領域でした。その男性の聖域を女性の視点で見直す必要に迫られてきたのです。

新しい女性史の第2は「身体史」という分野です。これまで、からだ、特に下半身というのは記録にさえ残らないし、タブー視されてきました。身体や性は、歴史の対象とは考えられてきませんでした。このところ意欲的な女性の研究者によって、身体史が次々と研究の領域を広げてまいりました。例えば「産育の歴史」の吉村典子さんや松岡悦子さん、落合恵美子さん、「中絶の歴史」の田間泰子さん、「避妊の歴史」の荻野美穂さん「月経用品の歴史」の天野正子さんなどです。

身体史には、若手の男性研究者も参入しています。成田隆一さんはもともと、都市史の専門ですが「衛生意識の定着と美のくさり一女のエステーについて」（『日本史研究』366.1993年）という論文の中で、大正期の女性雑誌や啓蒙的な刊行物を対象に美容や衛生意識の分析を行っています。川村邦光さんは、昨年、一昨年と紀伊国屋書店から『オトメの祈り』と『オトメの身体』という魅力的な2部作を刊行しました。明治から大正期、昭和初期にかけて、女性雑誌の記事を扱いながら、女性が自分の身体をどう扱い、どう認識していったのか、処女性や貞操という観念をどう受け入れていったのかということを克明に研究しています。

身体史についても、男性のバイヤスがあります。荻野美穂さんは、次のように指摘しています。「身体史というと、身体イコール女の身体となるのはどうしてなのか、どうして女の研究者も男の研究者も、身体史というと女の身体についてのみ扱うのだろうか。出産、中絶、生理、化粧、美意識など女の身体にかかわることばかりを扱うのだろうか。男の身体はなぜ対象にされないのだろうか」と。^⑩

これはちょうど近代が「精神は男に、肉体は女に」性別配当したことの反映です。男性の研究者たちでさえ、まるで自分の身体をどこかにおきざりにしたかのように、女の身体をねめまわし、切り刻んで研究対象にする傾向があります。そしていったん、女の身体が研究対象になると、あっという間に男性の研究者が参入し、目の覚めるような研究業績を上げ

ていきます。「なぜいつも身体というと、あるいは私領域というと、女ばかりが、対象になるのか、男に身体がないのだろうか、男は、自分の身体をいったいどう受け止めているのだろうか」と荻野さんは問います。彼ら男性の研究者が、自分自身の身体を研究の俎上にのせることはあるのでしょうか。

ちなみに、私の東京大学での今年のゼミのテーマは、「セクシュアリティの社会学」というものです。国立大学の社会学で、こういうテーマを取り上げるのは、珍しいと思います。「セクシュアリティの歴史」が可能になるためには大きなパラダイムの転換が必要でした。そのためには、セックスが、自然でも本能でもなく、歴史と社会の構築物であるという前提が成立しなければなりません。セックスが、もし自然と本能に属するなら、これは未来永劫、古今東西変わるものではなく、歴史学の対象にはならないからです。

セクシュアリティ研究の中でパラダイム転換が支えきた1つの具体例を申し上げますと、売春や強姦の見方が大きく変わったことです。

現在、「従軍慰安婦」の問題が関心を集めていますが、今から3年前、もと被害者の方が初めて自分から名乗りを上げたことは、私たちにとって本当に衝撃的でした。こういう歴史の生成、今まで見えなかったもの、ないと思われていたものを立ち上げさせるということは、歴史学にとって非常に大切な仕事です。例えば「従軍慰安婦」の被害者の方々からの経験の聞き取りによって、失われてしまうかもしれない歴史の証言を手遅れにならないうちに手に入れることは、とても大切なことです。これによって得られるのは、被害者の記録です。私が、いつも不思議に思うのは、売春や強姦は、被害者の側の出来事なのか、加害者の側の出来事なのかということです。不思議なことに、売春や強姦については、これまで、どういう女が強姦の被害者になったのか、強姦にあうときに、女はどういう状況にいたのかという研究ばかりが積み重ねられてきました。実証研究の成果からみますと、強姦というのは、女が性的魅力を持っていようが、いまいが、若かろうが、年老いていようが、挑発的に振る舞おうが、そうでなかろうが、関係なく被害を受けるということが分かっています。したがって強姦や売春について、被害者を一方的に研究の対象とするのは、大変一面的で本

当は加害者の研究が欠かせないのです。その加害男性の研究がこれまで乏しかったのは「男の性欲」の自然だと思われてきたからです。従軍慰安婦についても、あのような歴史的な犯罪を引き起こした当事者の研究、日本の軍隊と国家と兵士たちの研究は欠かせません。加害者から加害体験を聞き取るというのは、心理的な抵抗を克服しながらの困難な仕事に違いありません。が、従軍慰安婦の方から、その証言を聞きとるということも、本当に困難な仕事であるに違いありません。その困難にうちかって被害者から証言を引き出す努力を惜しまないならば、加害者から証言を求める努力も払うべきではないでしょうか。

社会党の国会議員である清水澄子さんは、従軍慰安婦問題に最も熱意をもって取り組んでおられる方の一人ですが、この方が、男性研究者を含めた研究グループと協力して、国会図書館にある元兵士たちの戦記や回想録の読み直しの作業をしておられます。従軍慰安婦をめぐる加害の記録は、わざわざ聞き出すまでもなく、少しも抹殺されておられません。それどころか、経験者たちは罪の意識もなく平然と、いつ、どこで、どうやったか、などという記録を残しているのです。読み直しのための素材は目の前にあるのです。ただこれまで「男の性欲」が自然視されてきたために、問題にする視点がなかったということが分かります。清水さんのお話では、国会図書館にある兵士の記録は、自費出版やら何やらで合計1万冊もあるそうです。それをいま読み直す作業をやっているということでした。このようにそこにある資料を読み直すことで歴史をつくり変えることが可能です。

こういうことこそ、女性史が担って欲しい課題ではないでしょうか。その時には、もう「女性史」という言葉を使う必要もないでしょう。「男性史」と呼んでもいいかも知れません。この男性史はかつての保守本流の正史とは全く違います。これはフェミニズムを通過した後の男性性の研究です。男性が研究対象になれば、女が売春の研究や従軍慰安婦の研究をしているときには、知らんふりをしていた男たちも、恐らく耳を傾けざるを得ないでしょう。そこで論じられているのは、女という「他者」ではなくて、自分たち自身や、自分たちの父親なのですから。男たちはこういう研究をみれば、恐らく震え上るで

しょう。国家や軍隊が、「男らしさ」の名において行ってきたことが、一体何だったのか、それをこそ女性史の対象とすることが可能になってきました。

5 「私」領域から「公」領域へ

いま、国家はゆらぎの時代にあります。一体国家にこのような犯罪を犯す権利があるのでしょうか。国家の殺人は、正義になっていますが、国家は、自国人であれ、外国人であれ、人間を殺す権利があるのかということが改めて問われています。国家はいつから暴力を独占するようになったのか、「男らしさ」の名において、暴力をどのように正統化し、組織していったかを問い直さなければなりません。こういうものを「男性史」と呼んでいいと思いますが、男性史には、1つの盲点があります。女性史の対応物としての「男性史」といえば、女に関係する男の領域、つまり私生活、家族、性生活に登場する男だけを扱う領域と考えられてきました。したがって、男だけの領域、男だけの活動、すなわち、政治、経済、戦争のような領域は、男性史の対象には入らないと考えられる傾向があります。男が、「男らしさ」の名において行う活動の領域、例えば「滅私奉公」とか、「男子一生の仕事」とかの言葉で、女を排除してきた領域のゆがみを女性史は問題化することができるようになったのです。この男性領域は、いままでは「公領域」と呼ばれてきました。私は、男が公領域を独占することで、女を排除している、その構造のゆがみそのものが女性史の対象になり得るし、なるべきであると思います。

それに対して、それはもう「女性史」と呼ぶべきではないとか、それは男と女の関係であるから、「関係史」と呼ぼうとか、関係史と呼べば呼んだで、女領域に関係しているときだけの男を対象とするように聞こえるから、むしろ男性史、女性史を含めて「ジェンダー史」と呼ぼうとか、さまざまな呼び方がでてまいりました。こういう動きに対しても、「女性史」が「関係史」となり、「ジェンダー史」となるにつれ、ますますアカデミックな、「痛覚を忘れた冷たい歴史」になるという批判があります。私は、そうは思いません。むしろ、女性史や関係史が、女領域や女領域に関係する男だけを取り扱うと考えられていたのにたいして、「ジェンダー史」は歴史のすべての領域をジェンダーの視点で見るとい

う挑戦を意味します。その意味で「ジェンダー史」が扱えない領域はどこにもありません。

私領域、公領域を含めて人間の生活のあらゆる領域を、ジェンダー史は扱うことができます。

女性史というのは、裏返せば、男性史なのです。男性史のなかでこれまでジェンダー抜きに扱われてきた、政治史や経済史を、もう一度、男性史として読み直すという仕事が、私たちに課せられております。

こういう領域の中で、最近出た優れた仕事を紹介してみたいと思います。

93年、経済学の研究者で大沢真理さんが『企業中心社会を超えて—現代日本を〈ジェンダー〉で読む』という本を時事通信社から出しました。

この本のタイトルには、「女」という言葉も「家族」という言葉も使われておりません。まさに企業中心社会、「男らしい」領域を問題の焦点に据えて、そのジェンダー、バイアスを彼女は分析しています。この本の中で、彼女は、これまでの経済研究のすべてが、労働者すなわち男性労働者と無条件に前提としたために、その男性労働者が、「家庭責任を背負わない特殊な労働者」であるというバイアスを抱え込んだと痛烈に批判しています。その特殊な労働者にあわせて労働組織が編制されていることから、長時間労働や企業丸抱え、パート差別のようなゆがみがでてきているのです。

「男らしさ」や「滅私奉公」の価値観を奉じる点では、経営者だけでなく労働組合の活動家や男性社会主義者も例外ではありません。私は労働組合活動家の妻という方から、夫の不満をぶちまけられたことがあります。「うちの亭主は、猛烈社員よりもっと悪い、生活をなげうって邁進し、しかも猛烈社員なら一言「あんたにとって会社って一体何なのよ。会社が何をあんたに返してくれるというの」ということができるのだが、相手は会社のためではなく労働運動という「大義」のために滅私奉公しているのだからなおさら始末が悪い」というものでした。

こういう「政治」や「運動」や「労働」というものが、「男らしさ」の言葉で、定義されてきたことが、いかにそこから組織的に女を排除し、そのことからどのようなゆがみをもたらしたのかを考えてみる必要があります。例えば政治の場に、女が出るといふことになれば、託児付き議会やアフターファイ

ブのパートタイム議会というようなやりかたも必要になるでしょう。

大沢さんが問題にしているのは、「家庭責任を伴わない特殊な労働者」による日本経済の成り立ちと労働組織のありかたのゆがみ、すなわち男社会そのものです。彼女は、男社会を女の視点から論じているのであって、女のゲッターのなかで女の領域を論じているわけではありません。ジェンダー研究の成果は、具体的に、いまの男の社会、男の組織、男の政治のありかたのつくりかえを次々に、要求しております。例えば、その提案には、組織の偏制の仕方を変えることも含まれています。具体的には、例えば新卒一括採用をやめてくれるだけで、女にとってどれだけ助かるかわかりません。採用の年齢制限を撤廃してくれるだけでどんなに大きな変化になるかわかりません。日本の組織の年功序列、終身雇用、企業内組合という日本型経営の3点セットがどれほど女の敵であるかがわかります。

政治の在り方を変えることも必要です。金権政治のプロにすぎない職業政治家には退陣してもらって、仕事をもっている人や家庭をもっている人に、アフターファイブでパート議員をやらしてもらおうということだって可能なのです。それから生産優先の価値観やライフスタイルを変えなければなりません。女性学やフェミニズムが、女領域から出発しながら、問題をつきつけていた相手は実は、男領域そのものであったということがはっきりしてきました。そのメッセージが男たちに届いているかどうかは、これからわたちがどういう努力を積み重ねていくにかかっています。

女性史が「つけた史」「とりこぼ史」「落ち穂拾いの歴史」から脱け出して、男が変化せざるを得ないような歴史、男の歴史を書き直すような歴史をつくっていただくよう、期待してやみません。

これで私の話を終わらせていただきます。

参考文献

- (1) 米田佐代子、1991「現代日本の女性状況と女性史の課題」歴史科学研究会編『女性史研究入門』三省堂、239頁。
- (2) 荻野美穂、1993「日本における女性史研究とフェミニズム」『日本の科学者』28巻12号、7頁。
- (3) 井上清、1948『日本女性史』三一書房。
- (4) 高群逸枝、1954-58『女性の歴史』理論社（『高群逸枝全集』4・5巻、所収）。
- (5) 赤松啓介、1993『女の歴史と民俗』明石書店、17頁。
- (6) 伊藤康子、1971「最近の女性史研究」『歴史学研究』1971年9月。
- (7) 水田珠枝、1979「女性史におけるウーマン・リップ」『あごら』20号。
- (8) 荻野、前提論文、7頁。
- (9) 西川祐子、1993「比較史の可能性と問題点」『女性史学』3、女性史総合研究会。
- (10) 瀬川清子、1979「日本女性の百年—主婦の呼称をめぐる—」原ひろ子・岩男寿美子篇『女性学ことはじめ』講談社現代新書。
- (11) Kelly, J. G., 1976, The social relation of the sexes: methodological implications of women's history, Signs 4, University of Chicago Press.
- (12) Scott, Joan, 1988, Gender and the Politics of History, Columbia University Press. 1992、荻野美穂訳『ジェンダーの歴史学』平凡社、60頁。
- (13) 前掲書、56頁。
- (14) Duby, George, & Perrot, Michelle, eds., Histoire des femmes en Occident, 1991-92, Paris, Plon, II, Le Moyen Age. 1994、杉村和子・志賀亮一監訳『女の歴史』「中世2」藤原書店。
- (15) Perrot, Michelle, ed., 1984, Une histoire des femmes est-elle possible? Edition Rivages. 1992、杉村他訳『女性史は可能か』藤原書店。
- (16) Duby & Perrot, eds., 1984. 前掲書、1頁。
- (17) 前掲書、97頁。
- (18) 女性史総合研究会編、1982『日本女性史』5「近代」、東京大学出版会、所収。
- (19) 古久保さくら、1991「らいてうの『母性主義』を読む」『女性学年報』12号、日本女性学研究会
- (20) 荻野美穂、1993「身体史の射程」『日本史研究』366号、58頁。

第 1 分科会

テーマ 「女性の過去・現在・未来」



谷川 進行係の谷川です。

本日のコーディネーターは工水戸富士子さんです。よろしくをお願いします。

工水戸 「第4回の“つどい”」を主催した松山の女性史サークルに所属しています。本日は、出席人数も多く、大役ですが、一生懸命やりますので、ご協力ぜひお願いします。

まず、コメンテーターのお二人をご紹介します。大友先生・米田先生です。会の進めかたですが、最初に、コメンテーターのお二人にご挨拶をいただき次に、問題提起者四人のうち、初めに、高井さん・早川さんに提起していただき質問をお受けする。その後、倉元さん・五十嵐さんの問題提起・質問をお受けし、コメンテーターのご意見をいただく。一人約15分の問題提起となります。そこで、10分の休憩をしたいと思います。

それから、問題提起者の話に基づいて、フロアの皆さんとの意見交換をやり、コメンテーターの意見を聞いて、全体のまとめをしたい、と考えています。大友先生・米田先生、順番によろしくをお願いします。

大友 私は、女性史の専門家ではございませんが、昭和34年から今日まで、山形市で、毎年発行している「婦人生活文集」の編集をひきついで10年になります。一般の女性たちの生活記録です。

4年前、30冊を記念して、1,600編の中から100編程選びまして、女の記録『山形に生きる』のタイト

コーディネーター	工水戸 富士子
助言者	米田 佐代子
	大友 俊
問題提起者	早川 紀代
	高井 正子
	倉元 正子
	五十嵐 フミ

ルで単行本にしました。教育委員会が継続してやっているというのは、全国でも珍しいと思います。

米田 いままでこの女性史のつどいには、いろいろな形で関わってきました。今回も、よろしく申し上げます。

工水戸 高井さん・早川さん、問題提起をお願いします。

高井 今日は女性問題を担当している自治体の職員として、何を考え何をやってきたかを話しながら問題提起します。

最近、市民事業の女性史、自治体事業の女性史等相い次いで出版されていますが、どのような地域女性史でも、編む市民の主体性が確立していなければならないと考えます。また、行政にとっては、女性史から投げかけられるさまざまな指摘に対して、行政としてどう考えていくのか、これからの大きな課題です。

足立区の女性史研究会は、第1期あだち女性大学(夜・23回)の参加者によって結成され、4年かけて、ドメス出版から『葦笛のうた—足立女の歴史』を出版しました。1989年、女性総合センターのオープン記念に出したものです。女性史研究会に対して私どもは、場所の提供とか資料の提供を中心とした支援をし、私も書き手の一人となるなど、時にむずかしい立場にあったなあと改めて思います。

そういうなかで、全国に点在する地域女性史に関

する方々と問題点を共有してみたい、もっと深めたいとの思いから、1989年3月、センターが主催し、研究会のメンバーが実行委員となって「地域女性史交流研究集会」を開きました。

テーマの一つとして、行政が関わることのプラス・マイナスが議論になりました。市民の主体性をどこまで保証できるのかが問われ続けたということは、そこに行政自身の自己変革の契機があったのではないかと考えます。

シンポジストの鈴木裕子さんは「人権・自立・平和の視点がないものは、地域女性史ではない」と言い切りました。改めて、この視点から、いろいろな女性史を見直す必要があると考えます。

研究会と私との10年の関わりのキッカケとなった「女性大学」は、私の女性問題学習のスタートでした。研究会の会員は、そこへの参加者だったのです。1991年のセンターとの共催による「つくられた歴史から、創る歴史へ」と題した女性史講座(10回)の企画・運営は、研究会が担いました。1993年、都の女性財団の助成金を受けての研究会主催「戦後の女性史」は、企画・運営はもちろん記録集まで、すべて独自に行ったものでした。このように、次第に自立していく女性史研究会があるということは、私の職員としてのアイデンティティの確立に不可欠という意味でたいへんありがたく思っています。地方分権・地方自治を支えるのは市民であると思います。

女性史を編むということが自治体にとって意味があるか。女性史を編みながら、足立というまちは何が問題なのか。研究会の方々は私達職員よりはるかにご存じです。女性行動計画の策定をはじめ各種審議会委員となって区の政策に提言をなさっています。ということは、地方自治体が自治体としてなりたつために必要な市民がたくさん登場し、市民意識を自ら形成していくことに繋がることに、地域女性史の大きな意味があると言えます。

一方的な支援ではなく、それに応える活動があって、初めて自治体と市民との緊張関係が生まれるのではないのでしょうか。1989年の集会の後、シンポジストの別府大学の古庄ゆき子先生から、「地域女性史と自治体で働く職員の役割を、はっきり位置づけるべきでした」とのお手紙を頂きました。自治体に関わる女性史が増えていくと予測されるなかで、皆さんと共に考えていきたい課題だと思えます。

工水戸 それでは早川さん。

早川 地域女性史研究は、深めなくてはいけない課題が山積みしていますが、今日は、私が現在携わっているアジア女性史研究シンポジウムについて、報告いたします。

アジア女性史研究シンポジウムは、1996年3月15、16日に東京で開く予定ですが、私が所属している総合女性史研究会、中国女性史研究会(日本)とアジア女性史に関心をもつさまざまな女性たちが集まって昨年9月に実行委員会をつくりました。

ずっとアジア諸国の女性史その他の研究動向を調査してきまして、シンポジウムでは、

- 家父長制と女性
- 性と歴史と買春
- 近代化・開発と女性の生活の変容
- 宗教・思想と女性

4つのテーマをとり上げることにしました。

私たちが、アジア女性史のシンポジウムを開きたいと思ったのは、次のような2つの理由からです。

1つは、現在アジア地域全体でたいへん問題になっていることの1つは、女性の問題で、このアジアの女性問題に日本が深くかかわっているからです。私たちの身近にアジア諸国の女性たちが、留学生、出稼ぎ労働者として、あるいは結婚のために生活しています。彼女たちは、アパート、保育所、学校、仕事、医療など日本の法が整備されていなかったり、偏見や差別意識などによって不自由な生活をおくっています。

とくにタイから事実上売買されてきた女性たちは、日本の各地のバーやキャバレーに転売されて売春を強要され、人身を拘束されています。アジアの女性の性と人格が日本のなかで粗末に扱われ、基本的な人権が守られていません。

一方アジア諸国における日本はどうだろうか。現在では特に東南アジア諸国において、日本や韓国、台湾等の進出企業によって低賃金やセクハラに脅かされて、また組合活動も許されずに女性たちは働いています。環境が破壊された地域もある。日本の男性は現地女性に生ませた子に、親としての責任を果たさない。少女はおろか、幼い子どもたちを性の慰みものとして弄んでいます。こうしてみると、日本におけるアジアの問題、アジア諸国における日本

の問題、この二重の関係において女性とりわけ性の問題がかかわっていることがわかります。

こうした問題を解決するために、「国連婦人の十年」以降アジアの女性たちの連帯運動がさかんになりました。女性史研究者もまた必要だと考えました。

第2の理由は、韓国、中国、台湾、インド、日本を中心に女性史研究が発展してきて、さきのテーマについては比較研究によってより明らかになるテーマがあるということです。例えば家父長制の成立や確立の時期などです。特に私が強調したいのは、近・現代史の日本の女性の歴史は、植民地や占領地の女性の歴史を無視しては真の像を描くことはできないということです。

それでは、アジア地域の女性史を年頭におきながら、現代のアジア女性問題を解決するために、日本の女性史研究をどのように進めていったらよいのだろうか。

この二、三年来いわゆる「従軍慰安婦」日韓共同研究会では「軍隊制奴隷制」と言いかえています。この問題を研究してきて、痛切に感じることは、15年戦争中に、日本軍将校、兵士が植民地、占領地の、ヨーロッパ人女性を含む女性たちに対して行った強姦と輪姦という暴力的性行為の土壤に、日本の近代の歴史がうみだし、育成してきた日本の女性の性と人格、人権に対する底深い蔑視があるということです。

そのもっともよい例は、敗戦後進駐する連合軍兵士によって日本の女性が犯されることを防ぐために連合軍兵士の性を相手とする女性を募集し、慰安所をつくったことはご存知だと思いますが、その際、ある役人が、日本の女性がみんな原爆で死んでくれたらこのような心配はいらないといっているのです。

アジア地域における日本の行為は、日本社会を拡大再生産している、この関係を捉えることが必要だと思います。

この認識は、日本の女性の加害の側面を免責するのではなく、日本の女性の人権の侵害の深さを自覚することによって、アジアの女性たちが受けた人権侵害の深さを知ることができると思うわけです。

次に、日本の社会や私たち日本人が、アジア諸国の人びとに対して持っている民族蔑視、戦前の蔑視に、戦後社会がつくり出してきた経済大国としての蔑視が現在は加わっていますが、また外国人一般に

対する排他的行動は、学校でいじめが出るような効率主義の教育の在り方と関係はないのだろうかと思うのです。

女性史研究は、いままで国家や社会が価値なきものと顧みなかった女たちの生活を掘りおこし、彼女たちと対話しながら、彼女たちの生活を歴史的に復元し、歴史の中に位置づけることをひとつの作業にしています。女たちの歴史的復元ができるか否か。そのひとつの力量は、価値なきものという通念をひっくり返すことができる私たちの人権と歴史の感覚ではないでしょうか。

アジアの女性たちの歴史像と、日本の女性の歴史像は、このような関係においてもつながっていると思います。

工水戸 お二人のお話についてご質問ありましたら承りたいと思います。

宮嶋(尾花沢) 女性史の観点からみたアジアと日本の関わりで、日本的な土壤の問題が指摘されましたが、改良し変革するには、先生は、どうお考えですか。

工水戸 ただいまの発言は、後半の論議に回したいと思います。

栗原(福島) 私は、福島大学で地域史を担当しております。県で昨年から、女性史の企画をしたのに関わりをもったので、大決意をし、取り組み始めたところです。市町村の方々を初め、女の問題について詳しいという人達が何人か集まって女性史をやりましょうということで話が始まるのですが、新しい視点でどうやって作るんだろうかと悩むんですね……。

工水戸 いままで女性史をやって来られたかたがた皆さんお持ちだと思うので、何人かにまとめてお話ししてもらおうと思います。

それでは倉元さん次に問題提起をお願いします。

倉元 私は、1973年に、新潟市の公民館主催事業の女性史講座をきっかけにできた「新潟女性史クラブ」に属しています。そこでの学習に触れながら、地域女性史について述べてみたいと思います。

新潟女性史クラブの目的は、一つは学習を通して、女性の生き方、自分自身の生き方を問い直していくこと。二つ目は新潟女性史の研究を進めていくことです。私が女性史を意識するようになったのは、母の歴史を書いた『寵のうた～娘がつづる母たちの歴史～』の出版がきっかけでした。明治・大正・昭和と生きた新潟の女性たち、母親や祖母の生きた歴史を、娘である私たちが、話を聞いて、調べて、書き、出版することは、当初、考えていた以上に苦しいことでした。しかし、母と向き合い、自分を飾らない書き手の姿がみえるものになったと思います。私は、そういう一連のなかで女性史に取り組む姿勢を教わり、大きな自己変革の機会となりました。

会員であった方のお母さんが亡くなる日まで、枕元に、「娘の友達が書いた本」といって「寵のうた」の本を置いていたのです。彼女は述懐していました。「娘として自分の気持ちを正直に書いた母親像があり、母が書かないでくれ、というものを書いたり、非常に苦しい思いをしました」と。

メンバーもそれぞれ自己変革をしていくわけですが、母と向き合う、自分と向き合う度合いの微妙な違いがその後の女性史への関わり方に影響しているようです。

女性史への向き合い方、取り組む姿勢の大切さを、まず提起したいと思います。

2番目に取り組んだのは、新潟の女の歴史を拓き、自立して生きた女性を『雪華の刻をきざむ～新潟近代の女たち』(1989年)という本に纏めました。聞き取り、資料調べをするなかで、対象の女性を客観的に書くことと、書き手である私達の気持ちを入れて書くこととの二つの考え方をめぐって、学習会のなかでも何回も話し合いました。

一人の女性の歴史を書くことのむずかしさ、時代のなかでどう位置づけていくのか、その人をどう理解し、その人の何を明らかにしたいのか。「地域女性史」というのはどういう女性史をめざすのか、なんのために女性史をするのか、と私自身の生きる姿勢を逆に、問い返してくる性格を持っていると強く感じました。

『雪華のときを刻む』と平行して、新潟女性史年表に取り組んでいました。地元新聞で1877年(明治10年)8月から1945年(昭和20年)8月までの、女性に関する記事を抜き書きし、テーマごとの分類、年

代ごとに記録した一覧表と、記事のカード化(約30,000枚)という二つの作業を同時に進めました。年表を整理していく段階で、専門的に細かく入っていき、逆に全体像が見えなくなったとき、参考にしたのが県史であり、市史であり、いわゆる行政史だったわけです。非常によく整理されているものですから、分かりやすいのですが、女性史クラブの目的である普通に暮らしてきた女の姿を明らかにしたいという願いが体制史的な女性史になってしまう、ということにハッと気が付いたわけです。新聞に描かれた素朴な女、小さな記事が消されて女の息づかいは感じられなくなってしまいました。年表にそこまで期待することは無理なのか、地域女性史の年表はどうあったらいいのか、私自身いま混迷しております。皆様から示唆願いたいと思います。

今年の2月にクラブ結成20周年の記念として、『写真記録・にいがたの女性史』を出版しました。各家庭400人から約3,200枚の写真を提供していただき、その中から350枚ほど選んだものです。新聞記事が具体的な形、人として見えてきました。しかし、私と写真を貸して下さった人と、1枚の写真に対する見方が違うんですね。例えば戦時中銃後を守る〇〇婦人会が、郷土の兵士に慰安袋や下着や毛布、たくあんなどを送る記事がたくさん出てき、銃後を支えた女として見えてきました。ところが、たくあんを漬けている割烹着の女の姿やうめぼしの樽がボンと見え、写真と一緒に当時の話も聞き、息子や夫のため、ふるさとの味を届けたいという女の思いも伝わり、戦時下の女の暮らしと思いが繋がってくるんですね。また実弾で射撃訓練をしている女学生や学校工場で必死にミシンを踏む写真と、屈託なく笑っている女学生、その隣に紙で作った防毒マスクの下の女学生の顔が写真を貸してくれた人とダブってくる、みんな同じ女学生なんです。女達が、夫や子供を思い、未来の幸せを願う素朴な暮らしが、戦争という大きな力にからめ取られていく地域の女の顔がみえてしまって、銃後を支えたときっぱりいいきれなくなってしまったわけです。

地域女性史とは何なのか。地域に生きている女たちを歴史の対象としてだけ考えていいのか、地域の女の思いと歴史をどう考えればいいのか、迷いながら、2年前沖縄の「つどい」で発表された「従軍慰安婦マップ」を思い出しました。地域のなかで批判

があろうと、明らかにしなければならないこと、しっかりと言わなければならないことはある、と励まされました。トゲのある地域女性史も必要である。事実と事実の羅列でなく、その中で何を真実と見るか、何を主張するのか。地域女性史の可能性を信じ、全国で女性史をやっている人の元気をもらって新潟へ帰りたいと思います。

工水戸 ありがとうございます。では、地元の五十嵐さん、よろしく。

五十嵐 山形には、物を書く女性がたくさんおられます。歴史は古く、昭和の初期小学生に生活のみつめる綴り方を書かせた村山俊太郎たちの綴り方運動に始まり、戦後皆さんご存知の「やまびこ学校」へと続いていくのです。山形の須藤克三、真壁仁の両先生が戦後の荒廃した農山村をつぶさに歩き回って農村の女や青年たちにエンピツを握ることをすすめ生活記録を書かせました。

私の家は兄が戦病死したので私が婿養子を迎えたのです。夫は農家の三男で軍隊に志願していった人です。その10年間の軍隊生活をそのまま家庭にもちこんできましたので、毎日のようにケンカばかりしていたのです。軍隊の悪しき風習は絶対服従・往復ビンタ・要領を本分とすべしなので、それに反発して鍛えに鍛えられました。子供は4人生まれました。ある日、私は、ケンカばかりしている両親を子供たちはどんな目でみているのかと深く反省して、自分の心のみつめるため一日のいき事を書きはじめました。450枚ぐらい書きましたが、全部夫の悪口ばかりなんです。夫は読みもしないが、一銭にもならぬことはするなと書いたものを蹴とばして怒りました。

ある年の稲上げのころ、公民館のこけらおとしの後、林美美子や平林たい子など女流作家7人がきて講演があると聞き、どうしてもいきたくて1週間も前から頼みこんで、その当日、早々に風呂も沸かしご飯も出して1本つけて機嫌をとって出かけようとすると、夫は、自分もでかけるから自転車は貸せないというのです。それでは講演会には遅れてしまい、第一小さい子をおいてでかけられません。くやしくってくやしくって、その夜は一晚中泣きました。1年のうちたった2時間のヒマもくれないのかと、31歳で亡くなった同じ年で死んだ母のことなど思い

涙が止まらなかったのです。女が死んで誰がしあわせになったというのでしょうか。祖父も父も決してしあわせではありませんでした。そして私は、男に殺された女が馬鹿なんだと気づき、「おらは、31から生きてみせるから、見てろや」と、祖父、父、夫と男3人を前にして大声を上げていたのです。でも「生きる」とはどういうことなのか。それからいろいろ考えて、まず身近なこと、自分にできることから始めようと、夜炬燵にあたりながら子供たちを相手にでたらめな童話をつくってワアワア話していたのです。

そんなことを朝日新聞のひとつき欄に「おかあさんの童話」として投稿しました。それが3月3日のひなまつりの日に掲載され、全国から100通以上の手紙をもらいました。そのほか絵本がどんどん送られてきたりで、子供が「なして、おら家さばかり送られてくんの」と、びっくりしていました。新聞社から1,500円もの原稿料が送られてきてまたびっくり、当時田植えの日当が200円のとときですからたいへんな金です。それで父ちゃんに一升買ってきて「飲め」といったら、これまで原稿を蹴とばしていた人が「もっと書け」だって。頭にきました。私もさもし根性を出して農村社会のどこを切っても血の出るような問題ごとをネタに投稿を続けました。と、ある人に「ずんぶん原稿料もらえるべ」と揶揄され、貧乏を売りものにして自分がかたがたしく、その後は頼まれたものきり書かないことにしたんです。

でも童話はその後も書き続け、子供達の遊びをテーマにした『きのうも、今日も、あさっても』というのが、山形の教育新聞社から本になって出ました。

それから山形に住む「ひとつき」の愛読者に呼びかけて、「やまがた草の実会」をつくったり、文学の勉強の場、「蔵王文学」をつくったりして勉強を続け、全国にたくさん友だちもでき、もう孤独ではありません。私がこんな話している、一日中しゃべっていることになりますから、あとは皆さんとの話し合いの中で問題を深めていきたいと思いますが、いかがでございましょうか。

工水戸 ほんとうにいつまでもお聞きしたいお話でした。お二人の問題提起にご質問ございませんか。なかったら、コメントの方から、コメントを

お願いします。

大友 五十嵐さんのいまのお話に補足したいと思います。幼少の頃から、本を読むのが大好きないわゆる文学少女だったんですね。1976年に「風鳴門」を出していますが、書いたのはもっと前からです。今回のサブタイトルが「おしんの里から」、ですが、五十嵐さんは、おしんなんてもんじゃない、おしん以上のものだ、ときどきお話をします。女性史というのは女の戦いの歴史だというふうに言っています。上野先生の話で、女性史は、女の復讐の歴史だと言っていました、そういう復讐心とか反抗心がなかったら作品は生まれてなかったと思います。『かげろう日記』の藤原道綱の母も、いまでいえば、総理大臣の奥さんですけど、現代でいえば、「書きますわよ」の一人だったと思いますし、女のやきもちから文を書いたんですね。日本の文学史上に残る名作と評価されています。

本日の会場に、五十嵐さんの作品が展示されています。『泥とおしろい』、『かげろうの詩(うた)』、この小説は、農民文学賞の候補になっているんですね。生きたいという力が大きな心の支えだと思います。本人は、ご自分のことを百姓のかあちゃんと言いますが、どこでも作家として通用している方です。



工水戸 ありがとうございます。米田先生、中間のコメントをお願いします。

米田 4人のかたそれぞれ個性的でまとめてコメントするのに困惑しています。今日、ごあいさついただいた方々は、県知事さん、市長さんはじめ皆さん男性のかたばかり、女性団体や女性のグループの来

賓の方々がどなたもいらっしゃらず、女性の収入役さんいらっしゃるそうですけど、みんな実行委員になられたのでしょうか。そういう型破りな“つどい”のなかで、「なにを議論すればいいのか」と改めて思いました。

第5回のつどいまでずっと問題にしてきた女性が生きてきた道、さきほど上野さんも言われました単に被害や抑圧された側だけでなく、侵略や差別に片棒かついだんじゃないか、というような問題をどうとらえるのか、松山でも沖縄でも壮絶な議論をやりました。今回は、参加者も多く議論ができにくいと思うんですが、こころの火種に残していただければと思います。昨年5月、永野茂門元法相が「南京事件というのはデッチ上げだ」という発言、二重に許せないわけです。フィリピンや東南アジアでの日本人の買春行為等を考えますと、戦争の片棒かついだのではないかと、そういうことを1回問い返さなければならないと思います。

上野さんのお話大変刺激的なお話とうかがったんですけど、日本は経済的な大国となり女性の学歴もすすみ、精神的なゆとりもできたので、被害から加害への考えもできるようになったということを確認するんですけど、日本の女性の権利は、国際的には、まだまだ小国です。女性の時代、女性の時代と鳴りもの入りに言われ、今日も知事さん、市長さん、そうおっしゃってください、たいへんありがたいことです。山形の女性は実際それを支えてやっています、女性というものが全く商品化され、暴力的に弄ばれているという現状もたくさんあります。

そういう状況のなかで、四人のかたが、行政の立場、アジアの女性との関わり、地域グループの立場、そして自分史をふりかえると、女性史に何が問われているかということの問題提起された。

もう一つは、この‘女性史のつどい’を支えてきた人達、自分たちの手弁当で女性史を学び、育て、創造してきたグループとかサークルの人たちがいま、倉元さんもおっしゃいましたように、いろんな問題につきあっている。沖縄でも議論二つになりましたが、家制度の問題・介護など地域のなかに、生活者のなかに矛盾が渦巻いています。

各地で女性史を作ろうという声がありますが、国

の施策の男女共同参画社会というスローガンがあり、その中でも女性史はあまり振り返られない、私のところにも、行政から「男女共同参画社会」というテーマで話してほしいときます。いろいろ聞いているうちに、「やっぱり女はあまりでしゃばらないほうがいいづらなあ、男をたててね、仲よくやりましょう」と言うんです。そういう人と対峙するのが「男女共同参画社会」なんです、地域に渦巻くいろんな矛盾があります。

どうい女性史を作っていこうかというときに、いままで男社会のなかで見過ごされてきた「介護するのは嫁さんが当然」を、どうやってひっくり返すか、沖縄の祖先祭祀・トートーメーをなぜ女性がしちゃいけないんだとか。意識だけでなく実際の生活上の問題を含めた日本の社会システムのなかでの女性史なんだ、だから、時代が何を求めているか。日本だけでなくアジアとか、世界へ、そして民族とか国家とは何か、そういうところまで考えていこうということ。地域とは何なのか、と、先程のご意見もそれに近い議論だと思います。あとで皆さん大いに議論をしていただきたいと思います。

工水戸 それぞれの問題提起者のご意見、お二人のコメンテーターのご意見ご自分の胸に、ああ、そういうことなんだな、と思われたことでしょうか。例えば、米田先生の地域の問題に関してですが、私も大変鋭く問われていると思います。

今回、行政機関から発言なさったし、また参加者のなかにも行政機関で女性の問題を考えていらっしゃる方もおられます。それがどういうスタンスで、自分の仕事としていくのか、地域住民とどう関わっていくのか、あるいは、地域住民が行政機関にどう関わっていけばいいのか、という問題も含んでいると思います。早川さんのご意見も、アジアから見れば、日本、朝鮮、中国だって一つだ、そういう中で、女性史はどうあるべきか、休憩の後、議論を深めたいと思います。

☕ コーヒーブレイク ☕



工水戸 休憩前に引き続き議論を進めます。

教員(氏名不詳) 組合離れも、またひどくなっていると聞きます。何とかそこを組合労働者として、組合員としても乗り切っていきたいものだなと思います。自分史を書いています。組合の一教員、組合員の戦後史として、一番忘れがたいことを書いてみました。

工水戸 ご自身が、やはり女教師の歴史をつくってきたというご発言だったと思います。

志自岐(足立区) 最初の頃はアカデミックな話が多かったんですけど、基本的には、この集いに集まっているのはアマチュアの女性史研究のグループが非常に多いと思います。それで、勿論報酬がないということは覚悟の上で、自分自身を知りたくて、どうして私がここにいるのかを知りたくて、女性史というものに取り組んできていると思います。最近、時々思うのは、アマチュアの場合、研究以外の何か外のものが多くなってしまって、もちろん市民として成長してくるんですが、そのことの為にやっているというでもなく、研究そのものの中に自分自身あまり出てくるのも何か、うっとおしい気持ちがあります。また情緒的に流れることが多いような気もして、もっとピュアな感じで研究をしたいと思う反面、自分自身がなぜここにいるのかということからも抜け出せなく、その辺で何をどう考えたらいいのかわからないという時もあります。そういう事はいかがですか。

工水戸 なかなか難しい問題だと思います。整理して考えてみましょう。女性史を学んでいく時、どう

いう風に学んでいくのか、自分自身のことだけでなく、自分史を書く中で、自分がどう成長し、それは地域を変えるという事にどうつながっていくのか。地域を変える為の仲間作りという事を、どう考えていくのかについて、ご意見いただきたいと思います。

中村(会津若松) 地方自治体に関わる女性史というものの考え方をお聞きしたいと思います。先程、福島県女性史の話が出ましたが、手伝ってくれと言われてメンバーを見たら、女性史をやっている人がほとんどいないわけです。書き手は男性が随分多く、会津の郷土史家と言われる方々ですが、自分の機関誌に会津藩の殿様の奥方を書きそれで女性史という名目をつけているような方がいます。私は県の女性史ですから、各地方でもって女性史を育て、女性史の書き手を育てて出来るものだとばかり思っていました。女性史をしている方が一人もいらっしゃらなくて、その一番中心になる方は、大学の歴史の先生で幕藩時代の商業、商家というようなことがご専門で、他のメンバーの方は、ほとんど女性史をしていません。私もメンバーに誘われましたが一体、女性史をどう考えているのかなと思っても一緒に出来ないのも多忙を理由にお断わりしました。その場合、自治体が考える女性史に対して、私達がどう関わっていったら良いのかお聞きしたいと思います。

工水戸 大変重要な問題提起がなされました。それは、女性史とは何かということ、中には自分の歴史を考えることから出発する人、先程のように、働いてきたこととその仲間の歴史を考えることから出発する人もいます。また一方で奥方の歴史が女性史だとか色々な考え方もあると思いますが、女性史とは何かを考えつつ、私はこう活動していますというようなご意見はありませんか。それでは上野先生をお願いします。

上野 この上しゃべり過ぎたら、何か申し訳ないですけど、議論が飛び飛びになっているようなので、少しつなげた話がしたいなと思います。福島県の方が大変切実におっしゃって、さあこれから私は女性史をやるぞというようなお覚悟は、本当に生かしていただきたいなと思います。足立区の方のお気持ち、一体私はピュアな歴史研究がしたいんだろうか、それ

とも自分が何者かを知りたいんだろうか、そこでゆれ動いているという切実さも非常に良くわかります。その辺の話をつなげてみたいと思います。私はプロですが、プロというのはやっている事でたまたま飯が食えているということで、それ以上のことを意味しません。ピュアな学問というのはどこにもありません。私がやっていることも、私が何者であるかということを知りたい一心でやっているわけで、その点においては出発点は何も変わらないだろうと思います。それがどんどん成熟して行って、いろんな意味で非常に細かいところに突っ込んで行くという部分があるのですが、私は先程の倉元さんの話に大変深い感銘を受けまして、女性史をやっている方達もうちちょっと自分の方法論を鍛え上げていただきたいなと思うんです。例えば、その年表を作っている時に、「体制史にとり込まれそうな危険を感じた。」と言われました。それで「結果としてすっきりしたけど面白くない年表になっちゃった。」とおっしゃった。私はその時、カード3万枚お作りになった中で、おもしろいこととおもしろくないものを見分ける目って何なんだろうかと思うんですね。「あっ、これはおもしろい。」と思うことを最後には取りこぼしてしまって、「おもしろくなくなっちゃった。」とおっしゃっていましたが、何をとおもしろいとお感じになったんだろうか。おそらくその何がおもしろくて、何がおもしろくないかという判断の中には、直感的な智慧があるだろうと思うんです。その判断基準を、方法にまで練り上げて体制史はつまらないんだと、はっきりおっしゃれる方法論を積み上げていくことは出来ないんだろうか。

例えば、福島の方のご発言だと、殿様の奥方のごことをお書きになったという方の紹介がありましたが、柳田国男氏は「明治・大正・昭和」の中で、自分は、固有名詞が一つも出ない歴史を書くとはっきりおっしゃったんですね。そうすると、私は歴史の書き方はここしばらくの間に随分、変わったと思うのですが、社会史とか、日常生活の歴史という中で、女にとっては、誰がいつ県令になったかというそんなことよりも、例えば、生理帯がいつからどのように変わったとか、かまどがいつガスに変わったとか、水道がいつひかれたかの方がもっともっと大きな変化なんですね。何がおもしろいかと言うご自分の直感を大事になさって、それで方法を変えるという所まで踏み込

んで行っていただくと、これまでの体制史を自分の仕事でまると判断できるようなものが出来るんじゃないかなって、非常に高い期待を持っていますが、いかがでございましょう。

早川 女性史の年表をどうやって作って行くのかという事と、聞き書きをどうやって深めて行ったらいいのかというのは、第1回の女性史の集いからの懸案事項で、ずっと話し続けて来たことなんですね。第5回の沖縄の時に、聞き書きの方法をめぐって、年表については問題にならなかったのですが、沖縄の報告者の方が、沖縄から内地に、本土に出稼ぎに行った女工さんに話を聞いて、「自分が家を支えるんだ、近代化の支えに自分になるんだ」と勇んで行ったということなのですね。繊維女工さん全体がその厳しい条件下で働いたのですが、その他に、沖縄出身ということで、いろんな差別が加わったと言われて来たが、そうではないと話されて大きな問題となり、全体会の時に論争点になったわけです。それは聞き書きをすれば、すぐでてくる問題で私もあの紡績工場で働いていた20人程の方からいろいろ10年ほど前に伺ったのですが、神奈川女性史研究会の皆さんと一緒にまとめました。それは女性達が置かれていた境遇と歴史の全体状況をつなげて行く作業がどうしても必要になってくるわけです。

私は、体制史であろうと何であろうとやはり歴史学の勉強をしっかりして、その中で女性史については、こういう風に考えるんだというように、上野さんが方法論に置き換えてとおっしゃったけれど、そういう自分なりの方法を見つけ出していくことが必要になってくる。具体的にはいろんな所で個々に皆さんで話し合い解決するより仕方がないと思いますけれど、今まで年表作りで問題になってきていることの一つに、いろんな新聞から事項を拾って、何枚ものカードを作りその中から大事だと思ったものだけ取り出していくのですが、その時に新聞記事の裏をとっているかどうか、これがずっと集いの中で問題になってきたわけです。私も以前、女性史ではないですが「労働運動社会運動大年表」を作った時、いくつもの新聞にあたって、そしてその新聞記事が矛盾しているということが沢山ありました。非常に偏見にみちた見方で、女、女性達を書いている、これを皆ひっくり返して矛盾をなくしていくというこ

とが、どうしても必要になって来ると思うんです。今までの歴史学、自治体史を勉強することが、体制的な歴史年表と変わらないものになってしまうということにはならないと思います。その時の見方、暮しだけではなく、労働や退職年齢差別の是正なども含めて組み替える力を作り出す必要があります。

倉元 年表・聞き書きは基礎になるもの。新潟では方法論の具体的なところで困っている現状です。地方の女性史を明らかにする時、地域の事実だけ並べるのではなく、中央と地方の関係、各地の女性史の違いと共通性を明確にして全体の女性史に影響を与えるという事になるのではないのでしょうか。体制史との関係、行政側から出される女性史との違いを検証しなければならぬと思います。

工水戸 方法論の話が出たけれど、松山の女性サークルで聞き書きをしばらく続けている中で文化活動に携わる女性が多くでできました。さらに演劇活動をして来た女性達をいくつかのテーマ、労働者の立場での演劇活動、住民運動とのかかわり等に分類し整理しています。

蔵本(北海道) 主婦18名で3年半かかって、岩見沢の女性史を作ったが350万円の経費がかかりました。高井先生のお話を聞いて行政の助成金などをどう活用したら良いのかお聞きしたいと思います。

工水戸 助成金ですか。

蔵本 資金援助というんでしょうか。

工水戸 行政との関わりについて、高井さんお願いします。

高井 色々な段階があると思うが、自主的な講座にはだしていません。「葦笛のうた」の出版に関しては、自主的なグループがつくられ、その団体で情報や資料の準備をしたり、編者への謝礼を用意したり、場所の提供などです。取材経費は自分達で出し、できた本をドメス出版から出すことで、若干買い上げる経費は予算に計上したが、そう多額の経費ではありません。書くのは研究会、編者は鈴木裕子さん、

教育委員会はその協力ということですが、本の内容の取り上げ方などで色々な問題が出ました。自治体で作る女性史と市民が主体的に作る女性史は違うものなのかどうか。女性史とは女性解放の視点が大切だと思えます。社会教育行政と女性行政との違いもあって、積極的な学習と自己教育などが少ないと行政にリードされてしまう心配があります。

宮崎(足立区) 高井さんの紹介にあった足立女性史研究会に所属、今日は10名参加しています。行政との関係は10年前からあって、「葦笛のうた」を5年前に出版した時、行政の足立区教育委員会と編者の鈴木裕子さんの仲互いが起き出版が危ぶまれました。足立区にあった遊郭の扱い、遊郭ばかりではなく商業都市としての一面もあった、その全体像で書かれるべきではないかということです。

先程、ピュアな学問としての女性史、自分自身が問われる女性史など発言がありましたが私はアマチュアのいい加減さと甘えに流されていて反省しています。

塩沢(新潟) 新潟女性史クラブに所属しています。行政とは全たく手を組まないで、自分達を追い込んでなおかつそれでもやりたい女性史って何だろうという形で取り組んでいます。出版費用も各人持ち寄りて積み立て、本が売れた残金を次の年表作りに使うということで、自分自身がより根底から変わるし、本当にやりたいことがやれると思っています。『竈のうた』を作った時、聞き書きをする中で自分の母親について、娘としてそっとしておきたい事と母が書いて欲しくないという中に本当の真実があるということです。隠したいことを暴露するのではなく、その時代に生きた女性達に共通のものにとらえ、一人の女性として母を見ることであえて書かせてもらいました。だからこそ読んだ方々に伝わるものがあつたと思えます。

写真記録では、貸して下さった方への遠慮があったり、年表を作る時に行政の資料を借りて、その快適さを経験してしまったが、行政との関係をきちんと整理しなければ危いと感じています。

高畑(帯広) 地方女性史の地方という言葉は私のあるいは私達のと置き換えたいと思えます。形は様々

であつていいという意味の個々です。私達の女性史は55年秋に発足、今の母たちの歩んできた道、事実を次世代へ正確に伝えようと始めました。全部手さぐりで自前です。言葉では表現のしようがないような思いで集まってきたのです。

聞き書きで一番大切なのは語り手と聞き手の心の通い合いだと思えます。ところで現在は17年程前の発足当時、27名くらいだった人数が5年経つと7名になり、ガッチリとスクラム組む中に新しい人が2人入って、このチームワークをどうするか悩んでいます。

工水戸 女性史を続ける為の集団の形成をどうするか、草の根の女性史運動というのは仲間とのつながりが大切ですが、その点についてはどうですか。

畑澤(奈良) 奈良県女性センターにおります。平成5年度からの3年計画で奈良の女性生活史編さんをしています。事前に女性史講座を開き、修了生が作るグループに協力を要請して調査員を委嘱して活動してもらいました。

女性行政、女性政策というのも女性の解放を目指して、制約のある中でひとつの方向を持ってやっていることをご理解いただきたいと思えます。調査員には年表の作成と聞き書き部分をまとめてもらい、本文については女性史研究家と県内の歴史家が執筆を担当します。

斉藤(松山) 松山女性史サークルに所属しています。行政との関わりの中で女性史をすると、行政の成果として、期待と制約が加わり、どういう内容にするかも拘束されます。

行政とは無関係で来た新潟女性史クラブと同じように、松山は30年、「ここに生き、住み、働き、学び、戦ってここへ帰る」というスローガンを唱えてやって来たように思えます。きちっと自分達の考えをぶつけていけない限り、解決しない問題じゃないかと思えます。

深瀬 山形のつどいについて、男女共存の社会をめざすためにも男性の参加がもっとあれば良かったと思えます。生活史の研究交流の方が変化に富んだ展開になったと思えますが。

工水戸 女性史という意味について、学ぶことすることの意味は何かお聞きしたいと思います。

神出(岐阜県) 飛驒高山の女性史学習会に所属しています。「女性史」というと年表作りと本を出すことが女性史であるかのようなお話しですが……。平成5年に写真記録「飛驒の女性史」を出版しましたが、新潟の倉元さんのところで出した本と酷似していて驚きました。女性史を学んできた結果が写真集の発行に結びついて行ったのです。女性史を掘りおこす中で地域の女性達や男性達がどう変わり、どう位置づけられるかということが大事だと思います。勉強会を始めて15年程、女達がどのように地域づくりに関わってきたかを学ぼうと会が発足したのです。女性の生活文化、食べ物、衣服など学び、伝統料理などの中に大変すばらしい伝承料理ができました。ちょうど行政で飛驒の伝承料理の本が出ることになり、私達の学習をすべてもっていかれたこともありました。今、問題になっているのは、まとまりにくい地域婦人会をどうするかということです。自分達の生き方を考え、これからの暮らしの中で、地域婦人会などに対してあり方を問いただすことができるような女性史でありたいと思っています。

藪下(千葉) 勉強するグループの作り方というお話しがありましたが、私達は、子供が中学、高校で歴史の勉強をした時に、母親の私達にも勉強を教えて欲しいという事でお出しました。

工水戸 千葉の宇野先生、今のことについてご発言をお願いします。

宇野(千葉) 高校の教育の中で近代史の勉強をしながら、歴史をきちんと学んだ上に女性像、男性像、特に戦争と女性のかかわりなど、女性史の資料を使いながらやっています。参加されているお母さん方の話を聞いて、家庭生活の中で学びを生き生きと生かしている姿をみて、私自身、大変刺激を受けました。館山にかいた婦人の村があります。基本的な学びの原点から日常生活で実行に移す。それが女性史の広がりへと発展すると思います。

沖縄へも山形のつどいへも積極的に参加していることも、貴重な学びと考えています。

工水戸 では問題提起者の先生方にごく簡単にひとことを補足していただきます。

早川 まず質問にお答えします。性の問題で男性達にどのように対したらいいのかということですが、戦前における男性の性の意識は、天皇制による影響をかなり受けていると思います。戦後は経済発展、金万能主義の社会の影響が大きいと思います。

私は女性の性、男性の性というよりもむしろ、人間の性はどうかあるべきか、私は今、セクシャリティの歴史という講座を持っていますが、人間の性は他の動物と違うのに、自らその動物と違った性をこわしていく。こういう男性の自分自身のみじめさをどう思うのかと、そんな問題意識をもって性の問題に対処しています。

高井 先ほど、地域女性史は、自己変革の契機だという話ができました。それで自治体自体の自己変革の契機もあるんじゃないかと言ったんですが、少なくとも職員にとっては、自分自身の生き方や意識が問われると思っています。ただ職員イコール行政か、というところ、そういうことではないという所もあって難しい面もあるわけです。皆さんの地域の職員の方と、どう皆さんが関係を作るのかというきまりはないので、皆さんとのかかわりの中で職員も力がついてくるのではないかと考えています。

女性史の場合、自治体事業で専門家に依頼して作るものもあるだろうし、そうでない例えば郷土史とか何かの先生という場合もあるでしょう。また女性史の専門の方と市民が共同して作る場合もあると思いますが、これからは、自治体と市民の関係を問うと同時に、研究者と共に作る市民との関係というものも、考えていきたいと思っています。

それから男性社会の問題が、随分ここでも問われているわけですが、構造として企業中心社会であるということも、皆さんに考えていただきたいと思います。足立区では、男性改造講座という授業を90年からやっています。昨年2月に、女性総合センター作成で『男達の男性改造講座』(1850円)という本をドメス出版から出しました。「男らしさの鑑」について考えていくということ、男達でやってみたいと思っています。そしていろんな意味で女性と男性のパートナーシップが生れてくるのではないかと

ています。

倉元 地域女性史を編むということは、私が地域で暮らしているということ、それから私と同じ地域で暮らしていらっしゃる方々を抜きにしては考えられないことだと思っております。でもその方々に妥協し迎合するような形の女性史にはしたくないと思っています。ですから事実と事実を取り出して、何を真実として女性史の視点で見たいのかが、問われるのだらうと思います。

最初に私が紹介した友人のお母さんが、最期まで大事にしてくれた『竈のうた』という本、それは何故なんだろうかと思いました。

するとそこには、やはり私達、書き手の母に向ける愛があったからと思うのです。正確に歴史を見るという中にも、愛や心というようなものを大事にした女性史を、やっていきたいと思っています。非常に危い女性史の現状ではあるけれど、また限りなく可能性をはらんだ地域女性史ではないかと思っています。

五十嵐 ケンカばかりしていた亭主は7年前に亡くなり、現在一人暮らしです。早逝した母と祖母に愛情を抱きながら、どんな人生、生き方だったのか、10年おきに昭和3年に100枚くらい、昭和9年に凶作のことなど100枚くらい、それから昭和20年に終戦のころを100枚くらいに私の地域をバックに書きました。

いろいろな問題と当時の風俗、また男の人の気持も出てきます。本当に難しいもんだと思いながらやると書き上げたのです。

書くことというのは、本当に客観的に自分を見つめることができます。すると亭主も兵隊ばかりが好きだったんじゃなくて、農家の三男として定められた生き方を抜け出したかったというようなことが分って来ます。

私は今、それを反省し夫に対する愛情を取り戻し思いを深めています。こうしてまぶたを閉じると彼岸へ、そして目を開けると現世と亭主のおかげで、あの世とこの世がひと続きになり私の世界はさらに広がっていると申し上げて終わります。

工水戸 時間が迫っています。コメンテーターの大

友先生のご意見を伺って、その後で米田先生にまとめていただきたいと思います。

大友 地方自治体、体制と女性史の関係者の話がありました。助成金や援助を受けると女性史がゆがめられるとありましたが、その功罪についてやはり考えて欲しいと思います。悪い面ばかりではなく、お金の援助があれば資金不足や情報不足で出せなかった本が出せることもあります。また自治体が関わったからといって自治体の職員だけで作るわけではないんです。

山形には『樹氷の郷の女たち～戦後の山形の女性の歩み』という本があります。市役所の女性職員の自主研究グループで仕事を終えた後に書きつづった本です。自分達のお金だけで出版したのですが、情報を地元紙からほとんど得ているのです。全国紙からの見方も大切ですね。

どこかで妥協点を見いだすのも必要と思います。五十嵐さんも、オープニングの吉田さんも、とにかく若々しい、お二人共、おしん以上の辛苦を生きてこられたのです。おしんの時代よりはるかに楽になった今日、女性史の皆さんの一層の活躍を期待します。

米田 山形で大変ご苦心下さって、立派な会を持ってくださったけれど、やはり第1分科会、ちょっと無理があつたなあと思います。

人数的にも、女性史に関するテーマがいろいろ出て、その一つずつに30人～40人位の人数でやると皆さん満足できるのではないかと残念に思います。結局この女性史のつどいというのは、沖繩の時も、松山の時もみんなこうしてここに残って「なんじゃ、これは」と言いながら帰るのです。それがいいのであって、全部解決することはできないのですから。大勢だったために問題がたくさんでて、みんながそれを聞くことができた解釈できます。

先ほどから地域の変革とか自己変革、男性も変わらなければいけないとか、女性史は自立した研究だとか出てました。

お金をもらおうとひもつきになるとか、いろいろ議論がありましたが、一つには結論を出すことができないですね。山形には山形の流儀があり、新潟には新潟の流儀があるので、私はいつもそういったのはケース by ケースと思っています。

女性達は随分、戦後強くなったと言われているけれど、個性を伸ばす、言いたい事をはっきり言う、自主性を持って生きるなどがだいじなのに、案外まだ女性の歴史の中で全体的な視野を持つということがなかなかできないような気がします。女性が長い間、置かれてきた、社会的訓練の場からの排除の影響は、今なお大きいように思っています。

その中で、上野さんも話されていたように、戦争のさ中に自由に新しい社会に向けて活動をしていた与謝野晶子や市川房枝でも、戦争の中にかめとられていったということ、なぜそうなったのかときちんとしないといけないと思います。

そういう状況の中で、従軍慰安婦に関わった男達に、ものを言って欲しいと言っても誰も言うわけないです。がこの間、731部隊の展覧会をやった時、その中で仕事をしていたという人が来て自分の体験談を話し、自分自身がやった事に対する痛烈な反省と何故そういうことが起こったかということ、国家や天皇制まで、当時はわからなかったことが、今、わかるようになったと話したのです。与謝野晶子は「君、死に給うことなかれ」で有名でしたが、戦時中は「満州事変萬歳」と言ったと言われています。大正デモクラシーの中で男女平等を叫び、個性の自由と何ものにも侵されない自立と理想を持って生きて来た彼女も、大正から昭和にかけて日本が軍国主義になだれ込んでいく中にひき込まれてしまう。

それは天皇の国家である日本を無条件に信じていたからです。

平塚らいてうも、昭和の初め頃には一切の国家支配を否定する、国家などというものは、人間を支配し抑圧して女性の自由をさまたげるものだと激しい文章を書いていたのです。彼女達が考えた理想社会と現実に進行して行く戦時体制との間のギャップをどう擱んでいたかが問われたわけです。

もう時間もありませんが、このつどいも6回目になりその間十数年たっているんですが、今日のように行政と女性史との関係などということがでてきたのはつい数年前からです。私達が女性史をやっても助成金はおろか会場さえ貸してくれなかったのに、行政の方も変わりました。

高井さんのように一生懸命な自治体職員の方がで

てきました。そういう方々の努力と共に総理府の男女共同参画室の設置や、各県下の女性行動計画に見られるように、地域の女性活動を推進すると書かれているんですね。

その中で女性行動計画をちゃんと読んでみると例えば「女性の、自由な多様な選択を可能にする生き方を保障する」というような主旨のことが書いてあります。けれども実際にはどうなっているかというところ、保育所の問題とか国際交流のこととか、またアジアのことがいっぱい問題になっているのに、あまりでてこないとかいろいろある訳です。

私達はそういったことをちゃんと見つめて、私達の立っている場所、私達のやる主体制、自立性をどうやって築いていくかなど、今日ここで出た問題のひとつひとつはバラバラに見えているけれど、これが女性史を学び、創造しようとしている、私達を取り巻く現実なのです。

私達は女性史学習、地域を掘りおこすと同時に、全体史を結びつけた学習が必要なだろうと改めて痛感しました。

今回は非常に不十分な議論でありましたけれども、第7回に皆さんが、又、実践を持ち寄ってやれるようになるといいなと思っています。ありがとうございました。

工水戸 取り上げられなかったテーマ、深められなかったテーマ、かみ合わなかった論議がいっぱいあって、皆さんご不満があったことと申しわけなく思っています。ただ米田先生から、宿題がいっぱいあったからこそ、次回も又やろうということにもなるという事。少なぐさめられた気持です。

谷川 ありがとうございました。

嬉しい誤算、事務局としては誤算ですけど非常にたくさんの方々にご出席いただき全体会のようなのですが、またレセプションの方でもさらに話し合いを深めていただけたなと思います。長時間にわたりますてご協力ありがとうございました。

記録 菅 澄子
結 城 陽子

テーマ 「働 く 女 性」

コーディネーター 島 森 路 子
助 言 者 藤 田 紀 子
寒河江 志 郎
問題提起者 高 橋 シ ン
井 上 栄 子
高 安 真 生

島森 みなさん、ここには全国から集まっていられしゃいますが、山形県で働いておられるみなさんの問題、農漁村で仕事をしていらっしゃる方達の問題などの御報告を受けながら、私も一緒に勉強させていただきたいと思っております。

私はとても小さな会社で好き勝手にやってきましたので、女性が抱えているたくさんの問題を考えるという時間的余裕もなく、逆に制度によって邪魔され痛めつけられる体験も少なかったかわりに守られてもこなかった、というような立場の人間だろうと思います。私自身が毎日の仕事の中でリアルに実感しなくとも何か具体的なことが起きた時には、そこにはなにかがしかの壁が立ちはだかっているわけです。

今の女性は、みんな働きたい、働くのは普通なんだという主張が強くなりました。そういう意味で平成2年の国勢調査による共働き率全国第1位の山形県というのは理想の県かも知れません。それでは、問題提起を高橋シンさんから順にお願いします。

高橋 私は農林業で働く女性の立場から問題提起をします。私の住む新庄市は、山形県の北に位置し雪が多く果樹・園芸・ハウスなどは不向きで、昔から水稻を主幹作物とした農業経営態の地域です。

過去、現在を繋ぐ女性史を辿れば、ドラマの中のおしんの生活は決して物語ではなく、生々しい現実のものとしてわたしたちに迫ってくるものがあります。昭和初期の農村恐慌では東北、北海道が2年続きの大凶作で夜逃げ、親子心中、娘の身売りなど悲惨な状態にあり、村役場に「娘の身売り相談所」が開設されていたといわれています。戦前の農業形態は地主と小作人で成り立っており、収穫の5～6割

にも及ぶ高額な小作料に苦しめられていました。小作料減額運動が各地に起こり、男性と共に農民組合婦人部が立ち上がりデモに参加し、3年間で小作料の3割減を勝ち取ったという記録が残っております。そして長い歳月を経て、ついに全国組織へと発展していったのです。

農村女性が長い間差別と忍従に耐え忍んでこなければならなかったのは、重労働をしてもその所得が自分の手で確認できなかったこと、それからその農業労働も、いつも補助的な役割に甘んじていたことによると考えられます。労働力としての女性の存在は大きく認められておりますが、農村社会や農家の経営に女性の顔が見えてこないのはどうしてなのか？老後の保障となる農業者年金制度・農業後継者の相続の問題など、まだまだ私たちの手の届かない厚い壁の層が立ちはだかっております。

平成4年6月に新しい食糧・農業・農村政策の方向が農水省より打ち出されましたが、その中には農村女性の役割や位置付けがはっきりと示されております。国の施策をしっかりと受けとめ、自己研鑽と自己主張に燃え一人ひとりが行動を起こしていくことが大事だと思います。それには家族の協力と男性の理解を得るための勇気が不可欠の条件と考えます。

素晴らしい自然の中で自分でデザインした夢の実現に向けて思う存分やっていけるのは、農業以外にはないのではないかと、とひそかに自負しているところではあります。

井上 山形市から車で40分ほど南西に行くと長井市というところがあり、その市のはずれにある農村地帯に住んでおります。夫と共に高校の教員です。現

在は三世同居でしかも共働きということで、山形の女性の三世同居率第1位、しかも共働き率全国第1位という、まさに典型のような暮らしをしています。働く女性たちが、仕事と子育てと地域というものから離れられないのは、地域の中には家という制度が根強くあるからです。嫁という立場は、経済力がついたから女性の地位向上となって大きく変わった……本当にそう言えるのかな？というのが地域社会の中にあるかと思います。子育てにしても、介護の問題にしても、我が家も地域全体と共に行動するしか他に方法はない。やはり、地域全体にかかわるところも考えていかなければならないのが特殊な点だと思います。

山形県青少年女性課の資料によると、「どうして働くか？」という質問に、20～30歳代の8割の方が経済的な理由で……、と食べるために、と答えています。また、おじいちゃんやおばあちゃんが子どもを見てくれているので子育てのために仕事をやめるという方は殆どなく、どうしてもやめなければならない人の理由は、30歳代では結婚・子育て、50歳代では孫育てと介護、また夫が退職したからやめなければならないという人もいました。

県高教組で昨年(平成5年)12月、100人程集まって働き続けるために、今、壁になっていることは何だろう、ということで学習会をやったのですが、その中に非常に印象に残る発言がありました。それは「いつも起きている間中、全力疾走させられているようだ」ということです。職場でも多忙で走り回り、家に帰ると子育てや介護などの1日のツケがあるからです。

法制度の面ではだいたい男女が平等になってきています。しかし、男女雇用機会均等法という法律があるけれど、今年高校求人票には不問求人というのが全体の3割りほどしかありませんでした。すでに10年にもなろうとしているのですが、均等法の実質的効力の強化をお願いしたいと思っています。

高安 私は会社でOHPを使って説明する機会が多いので、おなじスタイルで話をさせていただきます。NEC山形は、3000人ほどの従業員がおり、男性1700人、女性1300人の割合で勤務しております。この1300人のうち62%の方が既婚者で、NECグループの中でも既婚率の高い会社になっております。平均

勤続年数も女性は12.4年で、男性より女性の方が長く勤務し、更に平均年齢が男性並みに高くなっております。そのような状況を、この機会に調べましたら三世同居という事がありました。既婚者の80%くらいの方が、父母・養父母・祖父母と同居されているという家族構成です。このような状況だと、育児の問題などが発生したときに、継続勤務の障害になりにくい、ということで長く勤務できるのが、特徴ではないかと思っています。私共の会社では育児休業制度を育児休職制度と言っておりますが、その育児休職も毎年10人以上は利用しており、制度が定着し、職場の体制もできつつあるのかなと思っています。

女性が継続して勤務するために直面する問題は、2つあると考えています。1つは職場環境の整備など制度や施策の問題、2つ目は意識の問題です。一般的に言われているように女性で働いている人の意識は二極化していて、腰かけとえば語弊がありますが、軽い気持ちで仕事をしている人と本当に真剣に打ち込んでいる方とおります。色分けするのは、あまり良くないのですが、正直なところそう感じております。しかし女性自身にうまい具合に場を提供すれば、かなり意欲を発揮することが実例としてもあります。それを育成する方法、つまり人材育成に対する考え方の1つに「経験に勝る教育はない」というのがあります。これは、いろんな仕事を御本人に経験していただく中で、その人のキャリアや能力を広げようという考え方です。座学でいろいろな授業を受けるという形もありますが、やはり経験が何といっても一番の教育でないか、ということで私共の会社は、かなりひんぱんに人事異動をやっております。

島森 上司は男で部下は女という例が多いのですが、女の方で、そういうポジションの方はいないんですか？

高安 実態としては正直なところ、主任になっているのは1人です。

藤田 私は仙台で25年近く弁護士をやって、その中で女性の相談には、虐げられた性を本当に感じるものが多くあります。いつも不満を抱えて、今の法律

ではどうにもならない、意識ではどうにもならない、というような相談を多く受けているので、これからはひとつひとつの訴訟問題で解決するのではなくて、行政の方で施設を作るとか、あるいは色々なシンポジウムなどで男性の意識も変えなければと思いながら、事件とタイアップさせて3人のお話を聞きました。

ドイツで生活していた時に、ドイツ語学校の先生が「明日から僕は産休に入ります」とおっしゃった。ドイツは核家族が多く奥さんが2人目を産む時、上の子をみてくれる人がいないので、夫が産休を取って上の子をみている。それが20年前の話なんです。今の日本と20年前のドイツと比べても日本は、随分遅れていると感じています。

私は仙台の女子短大で非常勤講師をしており、若い女性の意識を聞く機会があります。男性に非常に尽くして、食べさせてもらって、お金がなければ仕方ないから働く、その夫に資力があれば自分はいつでもやめたい、という意識をもっている短大生が多い。けれども、そういう人達が、ひとたび社会に出て、色々な男女差別を受けたときにこれはおかしいと目覚める。女性というのは意識が体験によってどんどん変わるものだなあ……と期待している面もあります。

寒河江 私の勤めている新聞社に情報社会学研究所という組織があり、毎年テーマを設けて研究をしています。平成3年度、女性問題についての女性の意識に関する総合調査を山形市の女性700人を対象としてやりました。そしてアンケートの最後にも何でも良いから書いてくださいという欄を設けました。沢山寄せられた意見の中から2,3紹介いたします。企業社会のなかで男性は女性の仕事を腰かけと考へ一生の仕事と思っていないのではないかと。また、民間会社に34年間勤めて、男性と同じように仕事をやってきたが女性の賃金は男性の約85%ぐらい、男性は5年で主任、10年ぐらいで課長になるけれど、女性は20年でようやく主任になる。いつまでたっても民間の経営者の頭の中は、女・子供がという意識が残っている、というような事を書いてくださった方がおりました。

女性の自立とは、やはり経済的自立ではないか、そこが女性の自立の基礎ではないかなと強く考えま



す。経済的自立は人間としての生きざま、女性としての生きざまにつながっていくのではないかと私は思います。また、全世界におしんの女としての自立の姿が感動を呼んでいます、なぜそのように感動を呼んだのだろうか、と考えてみたら、経済的に豊かになったことだけが素晴らしいのではなく、女性の自律の姿、ここにみなさんが感動なさるんじゃないか。男女共生社会の中では自分を律する立場になってゆかなければならないのではないかと感じました。

☕ コーヒーブレイク ☕

島森 皆さん、御意見でも御質問でも結構ですから、御発言ください。

井戸(岐阜) ご主人が退職するので、自分も退職するというのはおかしい。奥様がまだ定年前でしたら仕事を続けた方が良いと思います。日頃から、不在にしても良いように、ちゃんと食事も自分でできるように趣味などで生きられるように、奥様の足を引っ張らないよう家庭を守っていただきたいぐらいだと思います。

井上 夫に会わせて退職する仲間は少なく、ほとんどの方達は定年まで勤めます。

渡辺(山形) 山形県の共働き率が非常に高いのは裏がえせば、賃金が安いということがあります。NE

C山形は男女の勤続年数がほぼ同じですが、賃金はどうなっているのか、男女の差はあるのか、教えてください。

高安 賃金についての基本的な考え方は、その仕事に対する報酬として賃金を支払うという形なものですからどのような仕事をしているか、ということで決めますので、そこには男女という発想はありません。あるのは事務と技術と現場で製造している方、その製造についても半導体というのは24時間製造なものですから、交体制勤務を取っております。どういところで、どんな勤務をしているのかで、差が出ます。当然、法的制約から女性は深夜勤務ができませんので、その分だけ男性より低くなります。基本的には男女の差は一切関係ないということです。

島森 全国的な企業の中でも、そこまで男女同じような条件でやっているのは珍しいですね。

藤田 企業の方のお話をうかがうと、「我が社は男女平等です」とおっしゃいます。その中身は住居手当や家族手当などは世帯主に支給している。男女差はないといいますが、世帯主の90%以上が男性なのです。ある銀行に勤める女性が、夫が病弱で休職中の時、銀行に家族手当と住居手当を付けて欲しいといったが、世帯主でないからという理由から断られました。結局、裁判で男女不平等の取り扱いになったけれど、銀行は「世帯主かどうかの区別で男女不平等ではない、女性も世帯主になればいつでも手当を支払います」などという詭弁としかいいようのないことを言っていました。

高安 私共の会社は、住居手当では無く家賃補助になります。しかし、それは女性から申請がないということです。持ち家率がかなり高いもので、いまのところ、特に問題になっておりません。

寒河江 男女間の賃金の格差について、平成4年度の平均月間給与額は、男性を100とした場合女性が60.6で226,560円となります。全国平均は51.5で243,067円ですから、山形の女性は勤続年数が長い割りに、賃金は安いといわれています。

佐藤(栃木) 山形の方は、妊娠などをしても、仕事をやめないで続けられるのは保育施設があったり、育児休業などがとれるからでしょうか。

高安 二世以上で同居して親が見てくれるという人が圧倒的に多いですね。保育所の問題以前に、同居の家族がいる、という安心感があって仕事に出られる方が一番多いようです。育児休職についても、職場の上司の抵抗もなく中には時々本人の家へ連絡してフォローしている人もおります。

島森 育児休業期間はどれくらい。山形の場合、保育所よりも三世同居でおじいちゃん、おばあちゃんが、その部分を負担してますね。

井上 育児休業について、昨年と一昨年を調べましたら、県内では約半分の導入率です。小さな企業では一年間の猶予期間内で制度すらないところが半数以上です。また、殆どが無給で、私たちの仲間からは100万円借金しないと食べられないと聞きます。とりやすい育児休業になって欲しい。もうすぐ経済的保障がなされるそうですが、そうなれば休む人もふえてくると思います。しかし、育児休業や介護休業が出来るのは良いのですが、それを全部女の人が負担していいのかと思っています。

高安 育児休業についてですが、夫婦が同じ会社にしまして1年の前半を奥さんが取り、後半を夫が取ったという例があります。だいぶ男性の意識も変わってきたようです。

福田(栃木) 働く女性にとって家事や育児を親に預けられることは恵まれている反面、社会的な保育制度や働く女性の連帯などが立ち遅れるのではないのでしょうか。個人の家庭の中で子供の問題や老人介護の問題を処理して、そこに責任をもっていくことがずっと続けば、社会や地域のなかに社会制度などの意識がついて行かないのではないのでしょうか。

高橋 三世同居ということですが、良い面と裏の面があり、それは反比例することがあります。裏の面については大変憂いがあると思います。先人の働いた記録を見ましたら、本当に私の知らないいろいろ

ろな面も知りました。なぜ、これほどやらなければならなかったのか、考えさせられました。社会的な流れの中で、物言うことのできなかつた、ひとつの女性のあり方なんだなあと考えております。

井上 私には、働くことはどうしてもやりたい事なんです。女の人にばかり「仕事か子育てか」と尋ねられるのは私にとっては耐えられないことなのです。男であれ女であれ自立の基礎としてだけの経済力というのは、半分欠けたような気がします。働き通したい、経済力を持ち自分で食べてゆきたいという気持ちは、男も女も持っていたと思います。そのため、核家族の方達には保育施設などの補いをもっともっと必要でしょう。そして、最後まで働き、自分の年金権を確保しながら自立してゆきたいと思っています。

福田 女性の自立は経済的な基盤を持つことが、大切な要因と思い働いております。収入を得ても、現実的には子供の教育費や家計の足しになってしまいます。更に子育ての問題や老人介護の問題などの処理を個人の家庭の中で続けていたら、自立はずっと先の話になると思います。山形県の女性は、そういう事を家庭の中だけで処理しないで、地域として、山形として社会的体系で何とかしていこうとしているのでしょうか。

藤田 日本は家制度の意識が強く、家計も家事分担も家庭の中でどうするかだけで、地域制や社会性にもっていけない。しかし、意識をもった女性のグループが出てきており、その人達が、どんどんそれを打開できればなあと思っています。

島森 農業を自分たちの手でデザインし直すということでしたが、いま時代はクロスして逆転して行くところで、そこに女性がいて、これをどう逆転できるかが課題だと思います。

戦後、家庭の機能を外に出していくのが流れだったと思う。しかし、今は、外化し過ぎた反省が起こり、理想的な形としての三世代同居が見なおされています。

後藤(山形) 中小企業のガソリンスタンドの経営者

です。従業員を採用するとき、独身の人よりも姑さんがいて子供の成長を助けてくれる家庭環境の人を採用しています。独身女性はわがままで感情の動きが激しく、すぐ仕事を投げ出すからです。女性全般には、自分で創造して仕事を得ることや責任感が劣っていると思います。

藤田 日本の女性は歴史的に醇風美俗と言われ、表に出ないで陰で支える女性が評価されてきました。それが意識の底にあるのではないか。また、意欲に燃えて入社しても養成や研修の機会すら与えられないので力を発揮しようがないという問題もあります。

寒河江 山形の女性の意識調査では、大家族での生活を望む人が過半数を越え、家長制度があっても良いと考える人もいます。しかし20~30代の人達の考えは違ってきており、50~70代の人達との間には非常に乖離があります。

山本(栃木) 今年は女性の就職難だといいますが、短大へ2年間行ってから社会に出て何ができるのか。その間、高校を卒業して働いたほうが、社会の仕組みなどの勉強ができると思います。一流企業だけを狙って就職したいというのは意識が低いと思っています。

藤田 たしかに短大生の意識は低いけれど、社会に出て色々な差別を受けて、その痛みを感じるようになる。けれども、差別をする側は痛みは感じない。女子大生の一時期を見て意識が低いとか、短大で習ったことがどんな役に立つのかという単視眼的な見方でなく、その人がいろんな差別を受けて物が言える、



そういう素質が養われていくんだろうと思っています。

井上 すぐ就職したほうが良いか、進学したほうが良いかは個人の自由に属します。男の子・女の子という育ち方をして常に先頭になって判断するというような訓練も小さいうちからされないで、若い女は……と言われるのは可哀相な気がします。男・女の結論をだす前に、どういう育ち方をしたか、が大きいです。

島森 山形のここにいらっしゃる上の方の世代の方達は自分で生きる力を貯えなければ、生きていけない環境でした。今は、それがなくなっていて、甘えた世代が沢山出て来ています。仕事を最初スタートする時は、女の子は成績が良く、レールを引いて「やりなさい」と言うとうまくやります。しかし2～3年経って判断力が必要になると男と逆転してしまふ。このような事から社会的な歴史的な時間が男の人には与えられているという感じをしています。

高安 論理的に物を考えて物を作るということは、訓練を重ねれば、男女差はないと思います。

古庄 山形は第一次産業の県だから、共通点があると思って参りましたが、あまりに違うんで茫然としています。私の所は過疎化が激しく、ひどいところでは60歳以上の人達が殆どという村もあり、三世代同居と言ったら、涙を流して喜ぶだろうと思います。なぜ三世代同居が可能なのか。

私の知り合いに夫婦で働いている人がいます。おばあちゃんは、子守をするのが任務になっています。おばあちゃんの役割を子守りと固定して良いのでしょうか。嫁が女という役割を拒否しているのなら、おばあちゃんは、子守りという固定観念から開放してやりたいと思っています。

浅野(山形) やはり女性が頑張っているからです。そうでないと山形も三世代同居は崩壊していくと思います。女性が一日中フル稼働だと多くの負担がかかってしまう。それに対する男性がどうするかが問題でしょう。

高橋 三世代同居ははっきり言って、忍の一字で何十年来たかです。開放されたいという気持ちは、みんな持っていますが、経済的に現在の生活を維持し、より以上の物を望むのであれば忍の一字です。しかし、今三世代同居が可能でも、将来はどうなるのかと思っています。

砂田(山形) 今20～30代の若者達は、一緒に生活しながら新しいものを見つけようとしている。その時、どう答えるかと悩んでいるのが、50～60代の女性や家族ではないだろうか。私は、時代が違くと働く環境も変わるという事を意識しています。そして女性の意識の向上の為に、地域の中でどう生きていくのか、と大きく捉えようと、女性フォーラムという会を作っています。

島森 私たちは現実に家族や仕事を持って、なかなか開放されない。しかし、一つの開放の方法として、友人を持つとかフォーラムなどの横のネットワークを作ってゆくとかが、今、女の人が成し得る大きな手だての一つだと思います。

高橋 三世代同居は、代々続いてきたごく当たり前の生活として、淡々たる気持ちで受け継がれていると思います。一緒に生活することによって育かれた家族の和と感謝の心が、大切なんだとつくづく感じております。

氏名不詳(大分) 私は、農村の破壊度が違うんじゃないか、という事に興味がありました。私は昭和4年生まれで、大分のおしんの子です。今農村が、崩壊してホッとしている面があります。あの人達の様



性は、無限の犠牲なんです。ああいうのを賛美するのが良い事か疑問に思います。ですから、今の横着なお嫁さん達が痛快です。そして大分県のように、過疎化が進んで人間関係が疎になってくる、これを新しく作り変えなければなりません。それには、今までの伝統だけでは駄目なんです。今私達は、老人達をあてにして、家庭や共働きを続けている。働く女性でも企業優先・職場優先になり誰かを犠牲にしています。それはただ働きのおじいちゃんやおばあちゃんなわけでしょう。経済力をつけることは、家庭内の民主化をどれだけやれるのか、ということにかかわらないと駄目なんです。かつての老人がいばるのも悲劇で、私達は昔は良かったと言いかけて良くなかったと思ひ、今は良いと言いかけてそうでもない……、新しく作るしかないと思います。

氏名不詳 都会にきている女性は、みんな1人でいると思うのですが、都会の問題に積極的にかかわっています。高橋さんが、デザインしてやっていこうとおっしゃった内容を聞かせてほしいと思います。

高橋 自分がデザインして描いた道を歩くということは、私の子供の攻めの年代の人達は、物を作る土地を持っているのですから、自分の才覚であたり振り回されず手さぐりでも、自分の構想に従ってやれるという事です。そして農業は、そのような意味でうれしい未来が開ける職業じゃないか、と申し上げたいのでした。

藤田 女性と労働という時に、外へ出て働く女性の労働条件も考えなければなりません、家事・育児も金銭的に評価される労働なんですね。そうでなければ外でお金をとって自分のお金を持っている、そういう女性が自立して、家にいる女性は経済的に自立できないのかということになります。家事・育児も金銭的に評価される労働なんだということも認識して欲しいと考えました。

寒河江 米沢に上杉鷹山という人がおりましたが、彼は三助の三位一体ということをおっしゃっていました。1つは自助、自分のことは自分の足で立てるように。2つめは互助、互いに助け合う隣人愛ですね。3番めは扶助です。育児休業法や男女雇用機会均等法など法制度の問題。もう少し、制度改革などに女性の立場から声を出して、そして政治参加をしていけば、社会ももっと良くなるのではないのでしょうか。

島森 今日の話し合いをまとめると、3つに整理されると思います。1つ目は女性の意識の問題です。このことを問題にして男と対等だという形で離れようというけれど、私達自身かなり縛られていると思う。2つ目は環境の問題です。夫の協力や家族の協力、更にネットワークなどについてですね。最後に制度の問題です。保育所や休暇の問題など身の回りの制度をどうつくっていくかということですね。

女の問題というのは、親と子の問題から始まって国の予算まですべてにわたってくると思います。それを通して、もう一回自立の問題や女が働く意味を考えてみるのも良いのではないかと感じました。

記録 阿部典子
竹田真知子



第 3 分科会

テーマ 「家族と地域」



コーディネーター 柴田 洋雄
パネリスト 星 寛治
齋藤 緑
庄司 明淑
庄司 伶子

大宮 登 本日の分科会は前半と後半に分けて企画しています。はじめに、柴田コーディネーターが、第3分科会のねらいとパネリストの方々の紹介をします。次に、4人のパネリストが、「家族と地域」というテーマに従って話題を提供し、その話を受けて、フロアーの方との質疑応答を行います。その後、大宮智江さんから、山形県を中心とした「家族と地域」に関するデータの提供があります。後半の話し合いの題材になればというねらいです。

後半は、グループディスカッションをテーブルごとに行います。パネリストの発言やデータを参考に、ご自分の体験から、家族・地域・男女共生などについて話し合いをしていただきます。その後、パネリストの方々から話し合いに参加した感想を中心にもう一度コメントをいただき、柴田コーディネーターがまとめます。

できるだけ参加度を高めるために、パネルディスカッションとグループ討議を組み合わせたので、皆さんの積極的なご意見をお願いします。

柴田 第3分科会のテーマは「家族と地域」です。このテーマを選んだ理由は、本大会のキーワード「おんなも創る、うつくしい街、ゆたかな暮らし」に関連します。「おんなも創る」というのは、今まで、都市とか産業構造づくりなどについては男がメインになっていた傾向があります。実際は女性も関わっていたのが見えにくかった。今度は女性も表にでて一緒に創ろうという考えです。「うつくしい街」というのは、一般的に「日本は個々人の暮らしは良くても、街としてはうつくしくない」と言われますが、そうでないうつくしい街を創って行こう

という考えが含まれています。「ゆたかな暮らし」というのは、経済的なモノの豊かさだけでなく、心の豊かさを創ろうという考えです。「おんなも創る、うつくしい街、ゆたかな暮らし」というキーワードを基に、「家族と地域」という視点から、私たちの役割や課題を考えて行くのが、この分科会のねらいになります。

今日、家族の形態やあり方が急速に変わってきています。地域も同じように変化し、また、変化が必要になっています。地域は従来、世間体などに象徴的なように個々人の生活や家族の生活を制限する役割を担っていた側面もあったと思われませんが、今後は、家族の延長としての地域づくりが大切になってくると思われます。しかし、家族や地域に対する考え方は、その人の仕事の種類、自然との関わり方、年齢などによって変わってきます。例えば、山形の山間部に住んでいる人と、都市部に住んでいる人では違った感覚を持っています。山間部に住んでいる人にとっては、地域抜きの生活は考えられません。屋根の雪を、自分が年老いた時誰が降ろしてくれるのか。町役場に頼んでも、道路の除雪はしてくれるが、雪下ろしはしてくれません。ですから、年に何回か、雪下ろし中に窒息してしまうという事故がおきます。こうした事態は、その地域が地域の課題として高齢者の家族をカバーする体制ができていれば、起こらなくてすむわけです。それに対して都市部の人は、このような話をしてもあまり納得しません。隣の人がどのような人か分からないまま住んでいる都市部の人は、地域関係はわずらわしいだけで、積極的な共同作業の意味がありません。家族や地域のあり方は、それぞれに生活する環境で違ってくるの

です。

家族と地域について考える場合、大切なことがあります。それは情報がどうしても都市から発信される量が多く、都市のあり方の方がより進んでいて、自分たちの地域が遅れているように感じてしまうことです。例えば、東京に代表される、マンションに住む核家族、共稼ぎで子供は鍵っ子、近所づきあいもほとんどない、自分の家の玄関までは掃除をするがその先は関係無し、という様子をテレビなどで見せられると自分たちの所が遅れているように感じてしまいます。そうではなくて、家族や地域の多様性を十分に認識する必要があると思われます。多様性は文化をはぐくむ基礎になっています。家族や地域の多様性があればあるほど、文化水準が高く、文化を育てる基盤があると思われます。

その意味で、本日全国からいろいろな地域の方々が集まって、地域や家族の問題を議論することは大変有意義だと思われます。最初に星寛治さんから農業を通して、問題提起をしていただきます。斎藤緑さんはボランティア活動を通して、庄司明淑さんは外国から日本に来られた経験から、庄司伶子さんは福祉活動の視点から、それぞれ問題提起をしていただきます。それぞれのお話には共通するものがあり、そしてまた、共通性の中に多様性があることが分かるはずです。そのようなことを踏まえて、グループ討議をしていただければと思っています。

星 今まで、40年ひたすら農業を営んで参りました。兼業にも出稼ぎにも出ず、貧乏暮らしに耐えながら、こたわって今日にいたっています。しかし、この40年間に農村はものすごく変わりました。都市も変わったのですが、一見自然の中でゆったりと動いているような農村社会でも、信じられないくらい変わってきています。暮らしもそうですが、それよりも意識が猛烈に変わりつつあります。特に、お母さん方の子どもに対する意識は大変な変貌を見せています。例えば、3年前の青森県農協中央会が婦人部を対象に行ったアンケートでは、「土地を切り売りしても自分の子供を上級学校に出し良い就職をさせたい」というお母さんが9割以上いたそうです。また、昨年暮れの天童市の農村婦人の調査でも7割近くが将来農業を辞めたい、自分達が働けるうちはしっかり働くが、子供達には継がせないと考えているようで

す。これはかなりショッキングな数字であります。

こうした意識を受けて、若い人はほとんど農業を継がなくなっています。後継者を育てるはずの農業高校で、200名を越える卒業者がすぐに就農するのは1~2名くらいです。昨年の山形県の新規就農者は34名だそうです。一つの市町村に0.7人くらいずつしか後継者が残りません。一方で都市から農村に移住する方が増え、新規学卒者を上回る勢いがあり、その辺に新しい流れを感じますが、農業の将来に対する展望を示さないと、若い人の不安は高まるばかりです。それに加えて、自分の一生をかけて土に生きてきた人々が、自分達の生き方を否定するような感じになっているのは、大変残念だと思っています。

しかし、いずれにしても、家族というものを基本的に暮らしが営まれることには変わりはないはずです。とりわけ農業では、家族経営というものがこれからも基本になっていくと思われます。政府の規模拡大をめざした方針、農政審議会の自由化促進の答申、など現在大きな転換期を迎え、地球規模で考えても、21世紀は空前の食料ショックの時代がやってきます。そのような時に、一番の基盤である土地を失ってしまったら国際社会の中で右往左往しなければなりません。土地を貸したりしながら、簡単に手放さず、高く売れば良いという考え方から農家自身が脱皮していく必要があります。

最近私の町に都会から若者が次々とやってきます。昨年だけでも300名を越える学生が、汗水たらしながら一緒に農作業をやりました。この中で、大変カルチャーショックを受け、自分の人生観や価値観が変わり、以下の例のように卒業後に移り住むケースもあります。

- 例1 大学の法学部卒業後入町。町役場の高級試験合格、教育委員会の文化課に所属し、自給自足の生活を実現。最初反対していた両親も認め、750坪くらいの古い屋敷を購入してくれた。現在独身女性3人で共同生活。
- 例2 大学卒業後、大学職員として勤務。辞めて専業農家の嫁に来る。結婚の理由は、相手の男性の魅力。相手は農業高校を出て、スキーのインストラクターやバンドのトランペット奏者などの様々な趣味をもつ。両親ははじめ猛反対、殴って娘の歯を折ったり、口を聞かなかったり。今年、来町し、娘の選択の間違いのなさを確信する。

●例3 岩手県東和町の例。東大法学部卒業後、農水省にトップ入省。制度上の1ヵ月間の研修が生き方の変革になる。研修期間が終わり、再度の出向を依頼、依頼が通らなければ辞めるという強い願いが実現し、2年間町役場に勤務。地域の女性と魅力的な村づくりを手がけ、出向が終わると同時に農水省を辞め東和町に根をおろす。地元の農家の人と結婚。農村の人間味、とりわけ家族の結びつきと分担の見事に魅力を感じている。

この東和町の女性は、女性が生き生きとしている地域は新しいことに挑戦していく地域であり、反対に、年功序列のような関係が支配しているような所ではそうはいかないと話しています。これからの地域社会を創り変えて行くためには、女性が自信を持って自分の担っていることを権利として主張していくことが必要です。私は、核家族がベストであるとは思いません。むしろ、東洋的な家族主義の中に、優れた常民の教育力が豊かに内包されていると思っています。一つ一つの家族が生き生きと元気になって、地域社会が元気になっていくのではないのでしょうか。

齋藤 私は東京出身ですが、酒田に移って15年になります。酒田で生活をはじめ「変だな」と思ったことをきっかけにボランティア活動を開始しました。仕事をしながら『あらた』というボランティアサークルをつくり、また、社会福祉協議会の職員の方と連絡を取りながら、31のボランティア団体でつくる酒田市ボランティア連絡協議会の事務局長をしております。ボランティア活動をはじめた本当の理由は、酒田に障害者が余り見かけないのは何故だろうという疑問からです。東京でも新潟でも多くの障害者に会いました。ところが酒田では余り見かけません。これはおかしい。いろいろな人が地域で暮らすのが地域づくりなはずです。そこで、いわゆるノーマライゼーションの発想から福祉マップをつくることにし、声をかけました。その中で、若い人たちの「ボランティア活動をやりたい」「やりたいが何をしたらいいのかわからない」という状況が見えてきました。そこで昭和62年に『あらた』をつくったのです。そこでの取り組みは以下のような内容でした。

●福祉マップ・相談ガイドブックづくり

福祉マップづくりを通して、障害者に対する偏見をなくし意識革命を行うことを考えた。障害のある人が誇りを持って人間らしく暮らしていないのが実情である。それを変える活動を展開した。『福祉マップ』という本を完成することよりもその過程を大切にしたい。いろいろな人や団体、若い人たちに声がけして行った。その結果、施設の職員などの福祉のプロや商工会議所の協力をいただいた。福祉のプロの人たちは活動の中心的な存在として、企業の方は本づくりの広告代としての協力があつた。

はじめは、車イスでどこまで買い物をやれるかという発想で調査したが、買い物だけではダメだということに気づくことになった。本当に楽しめる豊かな町になるためには、豊かなアメニティ(快適空間)づくりが必要になってくることが分かってきた。

何故、障害者が町に出ないのかを調査していく過程で、田舎に行けば行くほど家を出ないという事実が判明した。家族が人目を気にして出さない。本人も家族に迷惑や心配をかけてはいけないから出ないというような悪循環が生じている。そこで、無理に誘うことはしないで、楽しいイベントを企画して誘うようにした。例えば、県の身障者のスポーツ大会に、点字ブロックやトイレのある場所を書いたポスターを作成した。

相談ガイドブックというものもつくった。妊娠から死ぬまでのことを事例や行政サービス案内をいれてつくった。それから、中途障害者向けの様々なガイドを入れた。酒田市にある民間のものやボランティアのものすべてを入れた。この経費は、酒田市からは出ず、県の「べにばな基金」の援助と自分たちの積み立てたお金で作成した。

こうした活動の中で、私たち自身が心豊かになり、地域社会も潤ってきたことが実感できます。調査してもじろじろ見られることはなくなり、車イス障害者の人たちが町に出るようになってきました。行政の援助で物的な環境も少しずつ整ってきました。その中でも、驚くことは、ボランティア団体が多くなったことです。現在、31団体に70人の個人ボランティアがいるのですが、日頃はそれぞれ自主的に活動しています。全体としての研修会を年に3回実施しているのですが、参加者が多くて悩んでいるくらいです。また、自主事業としての施設へのボランティア

派遣も協力がたくさんあります。特に、この頃では中学生や高校生がすごく集まります。これからも心豊かな地域を一人一人がつくって行くんだという考えを大切に運動を進めて行きたいと考えております。

庄司 私は韓国のソウルに住んでいて、37歳の時に戸沢村に嫁に来ました。こちらに来てから6年目です。ソウルでは、韓国の国民が高度成長の中で一生懸命お金を儲けて、自分が生きるために頑張っていますが、その中で、人間関係がぎつかったり、ゆずりあいの心がなくなってきたりしています。そのような都会の生活が嫌になって、田舎の素朴な主人を選んで嫁にきました。しかし、嫁にくる前に考えていたことと違うことがたくさんありました。6年間ずっと悩んで来ました。外から見れば日本も経済大国なのですが、家庭の中は余りゆとりがないですね。それを知って、私はばかだなと思いました。自分の国を出て行く限りは、もっと良い生活をたくって決心するのに、実際は違っていました。良い主人をつかまえたことだけが成功しました。

韓国で見合いしたときは、農業をしなくても良いという約束だったのですが、することになりました。衛生面でも遅れていると思いました。私は最近よく取材を受けるんですが、「日本の印象はどうか」と聞かれます。一番難しい質問です。「優しい」とか「田舎だから気持ちがいい」という答えを待っているのは分かるんですが、そうは答えずに「日本だって汚いですよ」と言います。都会と田舎の生活水準の違いだと思うのですが、とにかく汚い。姑さんも70過ぎまでそのようにしてきたのですから簡単には変えられません。でも、「これは人間の生活じゃない、動物園の生活よ」といいました。日本人は曖昧な表現をしますが、韓国人はまっすぐに表現します。私自身の性格もあると思いますが、しかし、どのように自分の気持ちを伝えたらいいのか、日本の方にどのように表現して、自分の存在感を示すのか、それが一番難しいことです。

周りの人の噂にも苦勞しました。お母さんに「同じドラマを2回見るんだったら、ニュースを少し見てください」といったり、「ゴミをどこでも捨てないで下さい」といったら、周りからきつい嫁さんもらった、怖い嫁さんもらったなどと耳が痛くなるほ

ど言われました。でも、負けずに頑張ってきて、今はそのような噂はなくなりました。「人の噂も75日」という諺を一番最初に覚えました。海外からきている嫁をどうしていじめられるのでしょうか。自分のことは隠すのに、人のことを噂するのはどうしてでしょうか。自分達の嫁に行った娘が東京から逃げて帰ってきた場合、みんな隠す。ところが外国の嫁が一つ間違えれば悪く噂する。韓国の嫁をもらっちゃだめ、中国人の嫁が一人帰ると中国人だめ、と。外国の嫁の悪口だけじゃない、日本人の嫁の悪口も言っています。自分の嫁は大変だという理由で農家に嫁にやらないで東京に出します。自分の所に来た嫁にはつらくあたり優しくしません。自分勝手に思った狭い例でぼんぼん悪口を言います。もちろんみんながそうじゃなくて立派ないい人もたくさんいますが。



4年前から商工会の婦人部のイベントとして、キムチづくりが始まりました。最初は役場の協力はありませんでした。反対もされました。でも、今は、全国のマスコミにも取り上げられ、戸沢村の特産品にまでなりました。来年には、キムチ株式会社を立てるかもしれません。戸沢村役場と韓国のチェヨンという村が友好関係を結び、キムチの唐辛子を取り寄せています。また、平成7年7月には全国で2番目に「韓国館」を建てる予定があります。是非、一生懸命努力している花嫁たちと会って励まして下さい。

もう一つお話があります。永住権とか国籍の問題です。自分の国籍をそのままにして永住権をもらおうと思っても難しいのです。私のように子供がいない場合は難しいのですが、村から感謝状をもらって、それがプラスになりました。私たち外国人の嫁は日本人になっていません。国籍がない人は選挙権も住

民票もありません。戸籍謄本は、普通は結婚したら男性の隣に名前がありますが、私たちは上の方に書いてあります。出身地韓国ソウル、何年何月結婚と。それから、何年かたって申請し、許可された場合、日本人と同じように夫と並ぶことができます。こうした問題を考えようと、最上郡ではたくさんのシンポジウムが開かれています。それは本当に感謝しています。私たちが生んだ子供は日本人です。この子供達がこの国の中でちゃんと育つようにご協力をお願いします。

庄司 私は県社会福祉協議会で福祉に関わっています。ですから高齢化社会という言葉は毎日のように聞きます。平成4年、全国の高齢化率13.1%に対して山形県は17.7%で全国第4位です。更に、平成12年を予想した高齢化率では全国では17%、山形県が22.5%で、44市町村の中で山形市と天童市を除いた市町村が20%を越えるという予測がなされています。子どもの数が少なくなり、平均寿命が伸び、若年層が都市部に移動することなどが高齢化を進めています。この高齢化に対する対策について見てみましょう。国では平成元年に「高齢化保健推進10年戦略」(ゴールドプラン)を策定しました。

これからの高齢化の保健と福祉の分野における公共サービスの基盤整備を目指したプランです。そのゴールドプランを受けて、今年3月、全国約3300の市町村に法定計画をつくらせました。これが「老人保健福祉計画」です。ゴールドプランを具体的に進めて行くために、地域における基本的視点を出した訳です。この計画では当初のゴールドプランの計画よりもかなり大幅な追加が見られます。例えば、ホームヘルパーを10年間で10万人つくるという計画が16万6千人に、1万箇所の子サービスセンターの予定が、1万3千箇所に、5万床のショートステイが6万床にという結果になっています。新聞によるとこの計画の実現には4千億円かかるそうです。私たちはこの計画の実現に向けて努力し、また、この計画の中身が地域の実状にあったものなのかを見守って行かなければなりません。

しかし、こうした計画はあくまで行政レベルのものであります。私たち民間レベルの活動も重要だと思えます。私の勤める社会福祉協議会は民間の団体です。そこで活動を紹介します。行政には行政の限界が

あります。単に行政の補完ではなく、独自の事業を考えながら、福祉に対する風土づくりを進めています。

具体的な例として「介護者の集い」についてお話をします。これは在宅介護している方のリフレッシュ事業です。要介護者をショートステイするかホームヘルパーに来てもらって、介護者たちが一泊二日介護から自由になり語り合うという内容です。この事業は回を重ねる毎に内容が大きく変化してきました。はじめの年は「聞くも涙、語るも涙」でした。仕事を辞めて介護をしているが本当は辞めたくなかった、辞めて頑張っているのに家族の理解が得られない、昼夜、介護介護の連続で人間らしい生活ができない、など悲惨な介護の実態の語らいになりました。ところが2～3年するとアレという変化がありました。男性の介護者が参加するようになり、ショートステイやデイサービスセンター等を利用して介護を背負い込まないでうまくリフレッシュしながら介護に当たっている人が増えました。また仕事を辞めないで介護する方法を模索している人や若い人の参加も多くなりました。その中でも印象的だったことは、「介護のおかげで家族の心が一つになった」という発言でした。何となくばらばらだった家族の心が、介護を通して一つになり、感謝しているという発言でした。このように介護や介護問題はぜひぶん社会化されてきております。

最後に、これからの介護についての課題と展望を話してみます。介護に関しては、以下の三つの側面があると思います。①家族で頑張ってみること(自助)、②公的保障を充実すること(公助)、③地域の人間関係をつくること(救助)です。この自助と公助と救助がうまく働いた時に介護問題が解決するのではないのでしょうか。特に、公助に関してはいろいろな動きがあります。9月1日から国家公務員は介護休暇制度ができ、平成9年度から介護保険制度を取り入れる動きが出ています。また、社会福祉協議会でも福祉教育指定校として、毎年80箇所の小・中・高校を対象にボランティア活動を支援しています。小さいころから福祉体験をした子供達が新しい福祉観を育ててくれることを期待しています。私自身も発想の転換を心がけようと思っています。「世話はやくべし、進んで世話は受けるべし」これをこれからの生き方にしようと思っています。仕事を通して、

多くの関わりの中で新しい地域社会、福祉社会、新しい家族像をつくっていったらと感じております。

大宮智江 次のようなデータが紹介された。

- 山形は三世同居率が日本一で、共働き率も高い。世帯人数、三世同居率、高齢者との同居率、6歳未満の子供のいる世帯数などは関連性があり山形はいずれも高い。
- 共働き率が高いところは、子供を生む率も高い。つまり、女性が働くところは子供も多い。これは社会常識と逆の数字である。また、共働き率の高い地域では世帯当たりの実収入が多い。富山や山形は70万円を越えているが、低いところは40万円代である。
- 東京、北海道などの首都圏を中心にした都市型の地域は、一般に個人意識が高く、核家族化が進行し、離婚率も高く、刑法犯の検挙率は低い。
- 山形はおばあちゃんが孫の育児や介護を行ない、嫁が仕事についている。これは女性の世代間分業の状態と男女共生きとは異なる。また、福祉に関しては、ほとんど血族で解決しようとしているため、公的保障制度が発達したとしても利用しないため社会システムとして充実しないという問題がある。

◇グループ討議

この後参加者全員による1時間以上の活発なグループディスカッションが行われました。グループ討議で話し合われた内容を箇条書きにして以下にまとめます。

<農業問題・国際結婚について>

- * 農家離れが進んでいるが、農業はすばらしい職業であり、もう一度農業を見直してほしい。農家は仕事とレジャーのけじめをつけ、暗いイメージから脱皮する暮らしを実現することが必要である。
- * 親の姿を見て、自分の子どもは農業を拒んだ。有機農業の良さは分かるが、実際は難しい。現実の厳しさを実感せざるを得ない。
- * 農協に女性の部課長がいない。女性を差別的に扱っ

ているのではないか。

- * 農村の男性の結婚難は深刻だ。模範的だと思われる男性が40歳、50歳になっても独身のままの人が多い。
- * 中心部から少しそれると嫁不足、山形市の周辺部のある地区では、バス2台分の独身男性がいると噂されている。
- * 農村のどこかに「嫁をもらった」という意識がある。この意識を変える必要がある。
- * 息子や娘に甘く、嫁に厳しい。だから、農家の長男の嫁にはなりたがらない。娘に嫁がせない。それが農村の嫁不足の原因のひとつである。
- * 娘が実家に帰ると何もさせないのに、嫁には厳しい。特に、国際結婚の場合は適応するだけでも大変だ。地域も一緒になって生活のあり方を考えていくことが大切である。
- * 国際結婚をして山形に住んで3年になる。日本語の勉強をしているが、勉強しても働く場所がない。日本語の習得に応じて仕事に就けるとよいのだが。
- * 沖縄は国際結婚の先進県だ。いろいろな人々がいろいろな生き方を選択しながら、結婚するのが自然なのではないか。世代も環境も違う中で、結婚するのは大変だ。むしろ、一人で生きる方が幸せなくらいである。地域の受け入れ体制をしっかりと、外国人が生き生きと生きる環境をつくっていくことが大事ではないか。
- * 庄司さんの戸沢村のように地域によっては国際結婚による国際交流が盛んになっているところがある。金山町でも、チマチョゴリを着て、韓国の童謡を歌う会がある。

<三世同居・地域づくりについて>

- * 同居の工夫で、楽しく三世同居も可能なはずだ。また、夫婦2人で楽しく生きることをもっと考えてもいいのではないか。
- * 自分の家のやり方を相手に押しつけ、相手の生き方を認めないような考え方を改め、一人ひとりを大切にする地域社会をつくっていくことが重要だ。
- * 別居と同居のどちらが良いとは簡単に言えないのではないか。気まずくなる前に別居して、人間関係がうまくいったケースもある。同居するなら、立場や考え方の違いを前提に、お互いに歩み寄る心構えが大切になる。
- * 嫁も姑もいろいろな会に積極的に参加して、視野を



広げていける体制づくりが必要だと思われる。

- * 家族の中でそれぞれの役割を持つことが大切だ。年寄りにも家族の中で大切な役割を作り出す工夫がないと駄目だ。
- * 自分のつらい時代と比較して、「今の若い人は」という言葉がついでてしまう。これは反省する。しかし、若い人たちも年輩の女性を元気づけ、明るく励ますように頑張してほしい。
- * 若い人は地域との関係が浅い傾向がある。地域に根ざした生き方を積極的にしてほしい。
- * 週休2日制が導入され、大人も子供も地域活動を行える状況が整ってきている。これからは地域に根ざした生き方を育てていくことができるのではないだろうか。
- * 三世同居は都市の中心部には少ない。核家族の場合は老後の問題を真剣に検討していく必要がある。
- * 核家族だけが老後の問題を抱えているわけではない。在宅介護にもっと行政の手が伸びないと、三世同居の中での介護問題は大変になる。

<ボランティア・福祉について>

- * 在宅老人の中には、老人が老人を世話をしている場合がある。若い人のデイサービス参加が必要になっている。
- * 老人クラブなどに行くときは、きちんとした姿で行かないと周囲の目が気になってしまう。気軽に行けない分、自然に参加しなくなってしまう。
- * 病院が老人の寄り合い所になってしまっている。町の中に老人がくつろぐ場所がない。老人がいつでも気軽に行ける老人サロンのようなところが必要ではないだろうか。
- * ボランティアが重荷になっては長続きしない。ボラ

ンティアをしないと悪いような雰囲気もある。「あれしなさい」「これしなさい」とボランティアにつぶされそうになる。

- * 身障者＝特別の人という意識があるが、私たちと同じだというごく当たり前の認識が大切だ。以前は、家に閉じ込めているケースが多かったが、今は行政的にも街に出れるような整備が行なわれている。問題は街に住む人々の意識なのではないか。
- * ボランティアの窓口、施設利用の仕方などが分かりにくい。参加したくともどこに申し込んだらいいのか分からない。行政が援助しないとなかなか見えてこない。市町村の窓口、人材福祉センターのような窓口があればいいのではないか。工夫をして参加者や利用者を増やしたい。
- * ボランティア活動はいろいろな展開が可能である。例えば、帯広では、昭和37年から、女性の離婚者に職業を斡旋し生活を助ける活動を行なっている。あるいは、身障者の編み物教室を開き、送り迎えをし、子供を預かりながら、編み物を指導している。小さなことでも、ボランティア活動が必要になってくる。
- * 精神薄弱者が近所にいることが、最近になって分かった。その親は、息子のために「一日でも仲良く長生きしなければ」と言っていた。受け入れ施設の充実の必要性を感じた。

<テーマ全体について>

- * 若い人もお年寄りも、男も女も、共に生きるために、お互いを尊重し合って家族・地域社会を支えていくことが大切ではないか。
- * 自分の生き方をしっかりと考え、一人では生きられないことを自覚し、地域のネットワークや人と人とのネットワークをつくっていくことが必要だろう。
- * 子育て中も学び続けることが大切だ。子育てを母親やおばあちゃんにまかせっきりになるのは危険だ。父親も協力し、家族と地域が協力し合って子供を育てるのが良い。

◇ 最後に4人の問題提起者とコーディネーターからのまとめの話があり、今回の「女性史」のついでに「家族と地域」というテーマを設定した意味を再確認して分科会を閉じました。

記録 大 宮 登

第4分科会

テーマ 「暮らしと環境」

コーディネーター 長谷川 公一
助言者 岸 宏一
阿部 康子
問題提起者 能登 淳一
東浦 永子
尾形 なつ

長谷川 みなさんこんにちは。きょうは60名ほどの参加者を予定していたのですが、大変幸いなことに100名を越える参加があり、環境を考える分科会としては会場の環境悪化、皆さんの吐き出すCO₂による温暖化が心配されます。窮屈な会場ですがご容赦をお願いします。

「暮らしと環境」は山形で独自に設けたテーマです。女性が積極的に地域作りの中心になるという動きが山形でもいくつか起きているのではないかと、それがこの分科会のテーマになると思うのですが、上野講師の言葉を借りれば、経済成長、都市化という日本の近代120年、保守本流を見直すもう一つの目が、女性ということです。また、環境にやさしい暮らし方、地域のあり方とはどういうことなのかを考えることが世界の最前線の課題となっています。こうした点に着目し、地域に根差した視点でこの分科会を進めたいと思います。能登さんから順に、スライドを使いながら問題提起をしていただきます。



能登 農業は、特に女性の力を借りなければできない仕事で、女性が非常にながらんで地域の農村社会を変えている様子なども紹介したいと思います。

私はスイカ中心の農業を営み、一女三男の子どもがおります。山形県は高品位多品目の野菜と果樹の産地です。特に、私の住む内陸部は果樹地帯で、春はモモに始まり、サクランボ、リンゴ、ラ・フランスと次々に花が咲きます。蔵王、月山、朝日の山々を遠景にした内陸の春は、まさに桃源郷です。

こうした農村風景は農業者のみならず、すべての人が共有できる財産だと思います。日本の水田面積は約300万ヘクタールあり、その貯水量は全国のダムの約4倍の76億トンです。安全かつ安定した食料の供給が農業者の当然の責務ですが、今こうした農村景観や水田のダム機能も農業の価値と認識したいと思っています。

農業従事者の高齢化と後継者不足、農地の減少、土地集約型で換金性の高い農業形態への移行が今の農業の姿です。わたしの地域は550戸の5パーセント弱が専業農家で、500戸以上が兼業農家も含めたサラリーマン家庭です。そこで、家で農業をやっている多種多様な職業の青年達20名程で、地域の農業を皆で共有しようと、平成元年に「兼業農家塾」をつくりました。お母さん方の活動も大変活発で、同じ年に専業農家の14人のお母さんが「ひまわりの会」をつくりました。県の農政課長にまで交渉してついに今年の2月、栽培したソバなどの加工施設を完成させ、改めて女性の力を思い知らされました。農村に嫁いだ有利性は、安全で豊かな食生活にあると、ソバづくり、肉の燻製、無添加の菓子作りに生き生きと取り組んでいます。

いろいろな組織の中で、地域の農業を大事にしながらか生活環境をより快適にしようという一貫したテーマが出来上がってきました。地域に混住する人々が、それぞれのライフスタイルの中で農業を取り入れる「地域営農集落形態」を今模索しています。私は農業という一つの職業を通して、家族が一つの目標に向かって努力できることを大切な喜びと感じ、この心安らぐ美しい農村風景を、女性の慈愛に満ちた力と共に未来へ引き継いで行けるよう、ひたむきに農業に打ち込んでみたいと思います。

長谷川 農業、農村の価値がどこにあるのか、消費者の立場で、能登さんの問題提起をどう受け止めるかが、重要なポイントだと思います。次は東浦さんです。

東浦 新庄市の職員としてリサイクル推進の仕事をして、また、“新庄・護美の会”と職員組合環境部に所属して、同じテーマで三足のわらじをはき、環境問題をライフテーマにしております。環境をテーマにしようと思ったのは、15年位前、子育ても一段落し、自分の生き方を振り返ったとき、職場での生活をもっと充実させたい、環境の問題はどこでも勉強できるし、今のような使い捨ての生活は必ず破綻をきたすという漠然とした危機感があったからです。

環境行政に携わる中で、男社会は縦割りの組織にガッチリと組み込まれ、たてまえ論が優先すると感じてきました。環境問題を解決するには、生活にしっかりと根ざした女性の行動が大きき力になると思います。子どもを産み育てる女性たちは、子どもに安全な食べ物を与え、良い環境を残して行こうという思いを、男性よりも一層強くダイレクトに行動に移していけると思うからです。日用品を買う役割は女性が多いのが現状ですが、トイレットペーパーひとつでもバージンパルプを買わないという行動で、世界の森林資源の指標が破壊から保護へと変わるはず。そうした女性の行動が子どもの環境教育にもなっていくと思います。

“新庄・護美の会”では男性も混じり、ごみとせっけんの問題、制服のリサイクルに取り組んでいます。

仕事では、意識啓発と具体的な施策の推進の二面があります。意識啓発として、「笑えないマンガ展」、

再生紙展やリサイクル展の実施、地元の高校生が作った環境絵本教材化、「ごみ収集車を追っかけろ！」をテーマにした親子施設見学会などをやりました。具体的な施策では、ビンとカンの排出源分別による資源化収集です。ゴミではなく、資源、原料を出荷する気持ちで家庭から出してもらおうと考えました。行政と市民が一体となって、地球規模の考えで足元から行動しようを合言葉に進んで行きたいと思っております。

長谷川 市民活動では、行政はしばしば壁としてたちはだかることがあります。やはり、人という要素がいかに大事かを感じました。助言者も含めて地域活動の仕掛け人のような方々にお話をいただいています。最後は尾形さんです。

尾形 遊佐町は、人口2万人弱で日本海に面した県の北端の町です。標高2300メートルの鳥海山の清流が恵みの水を農業に与え、鮭がのぼる自然環境は日本一と自負しています。山形市から25年前に嫁ぎ、米を作り、牛を育て、鮭の人工孵化に携わってきました。鳥海山の冷たい水で育った、おいしい米を東京の生活クラブ生協に提供するようになって、私たちのせっけん運動が始まりました。6年かかってAコープのスーパーから合成洗剤をなくし、アルミ再処理工場を移転させ、この時「月光川の清流を守る条例」ができました。

平成元年から鮭の人工孵化に取り組み、“レディースゆーわ”を結成して加工販売を手掛け、清流をまもる必要を強く感じるようになりました。生活排水を汚さないため食用廃油を回収し、リサイクル粉せっ



けんを作り、せっけん運動をもう一步進めようと、「シャボン玉ボックス」が動き出しました。夜遅くまで作業している時、夫の母が弁当作りを受け持って、和気あいあいと作業をしています。他県の人たちとのせっけんを通じた交流やブナの植林、微生物によるごみ処理なども取り入れました。問題を見つけたら解決に向けて取り組んで行く。気負わずに楽しみながらやる。何より、人間同士仲良く暮らして行くことが大切で、「良い環境作りは、仲良き暮らしから」ということです。

長谷川 列車の上り、下りの概念などに表れているように、私たちは東京中心の発想の中にいます。同様に、「進んだ男性、遅れた女性」という枠組みが抜き難いものとしてあります。従来の枠組みは全く無意味ではないのか。小さな地域でこそ、いろいろな活動が根を張り、そうした地域のネットワークが、中央とか地方とかいう枠組みを超えて広がっているという大変すばらしい問題提起だったと思います。

ここで助言者のお二人にお話を伺います。

岸 能登さんの場合、農業に夢を持っておられることに共感しました。東浦さんの場合は、行政と市民のつながりということで、市の幹部や、地域住民のかなり共感がないところといった仕事は進まないと思うんですが、その辺のご苦勞を聞かせてください。尾形さんのお話で、感心する点は、行政が一つも出てこなかった点です。非常な驚きであり、感動です。

皆さんのお話には、「人間関係」、「人間のネットワーク」、「人間同士の協力」、という意味の言葉が出て来ました。非常に大切なことだと感じましたし、行政として、理解だけではなく共感を得られるようにしなければと思いました。

阿部 山形で「女性史研究交流のつどい」が開かれ、初めて環境をテーマとした分科会が持たれました。命を育む女性の歴史を紡ぐ女性史の中で、環境は当然入らなければならないテーマだと常日頃考えていましたので、非常に嬉しく、この分科会を受けとめて参りました。

私たちは誰でも、自分が生きた証しを探しているんですね。今、三人のお話を伺って、ああ、この山形で共に生きている、そして女も男も家族も歴史を

書いているんだなあ、改めて思いました。午前中の、上野さんの講演の中に、人間の領域でジェンダーの歴史で扱えないものはないという発言があった訳ですね。まさに、女性史における「環境」というのは、上野さんのおっしゃったことと結び付くと思います。能登さんの場合、男が変われば、女も変わるという意気込みすら感じられます。さらに、男が変わって、女が変わって、また女が変わって、男が変わって……という、みんなが変わって、地域が変わっていくという、循環ですね。

東浦さんは、常に市民の目の高さでということを中心掛けていらっしゃる様子がよく分かりました。私たちは、行政の中に、いろいろなことを決定できる女性を増やさなければならないと改めて思ったところですよ。

それから、尾形さんの活動をお姑さんがお弁当を作って応援してくれているというお話がありました。私たちは、次の世代の女性たちの応援団にそろそろなる年齢なので、その応援団になる女性をネットワークとして増やしていかななくてはと感じたところです。私たちの会では、女性たちが水とどのようにかわって暮らして来たのだろうかという調査を致しました。どんなふうに水を使ったか、生活排水をどんなふうに処理したか、を聞き取って小冊子にしたんです。昨年、琵琶湖周辺地域の家庭排水処理の歴史を研究している方に、伺いましたら、東の山形と西の琵琶湖周辺で同じような排水の歴史を聞き取っている、まさに、共通する女の歴史がこの中にあるんですね。女性史と言わなくても、切り口としてはどんなことでもいい、記録に残していくことで私たちの歴史になるんだなと感じました。

長谷川 女性を中心にして、環境問題や地域作り積極的に取り組みをするという場合、女だけの活動、言い分に終わってしまいがちです。男性をどう巻き込んで行くか、家族のなかの男女関係、地域や職場など、自分のまわりの環境をどう変えていくのかが問われます。女であるがゆえの抵抗もずいぶんあったでしょう。でも、小さい町ほど、環境問題は小回りがきいてやり易いと言うことがあるかもしれません。

能登 自分自身のライフスタイルの中に農業を位置



付けることによって、より豊かな人生が開けるのであれば、それを提案をしていこうと思っています。先程の兼業農家塾でも、盆栽感覚で田んぼを作ってみる、田園風景を見てホッとすると、そういった自分の精神的な浄化という意味でも地域の人々に農業を使ってもらえるのではないかと考えています。定年は60歳になっていますが、皆さんお元気で、多くの時間をお持ちのようです。農業には大変な作業もありますが、スイカ作りの小さな芽をかく、さくらんぼの葉を摘むなどの軽作業を手伝ってもらうことによって、生産に携わる喜び、生きがいを持っていたく、という形で、地域作りが出来ないかをテーマに、地域全体が前向きに取り組んでいるところです。農業というのはカミさんに尻をたたかれ、朝起こされ、田畑に出るということで、私たちの地域では、女性上位と言うか、女性たちが気持ちの上でも男性を引っ張っています。

東浦 私が住民レベルの分別収集ということを提案しました時には、実は周りの男性から大変な反対があったわけです。住民がそんな面倒臭いことをやってくれるわけがないと。私はキチッと話しすれば、住民はわかってくれるはずだという期待感を持っているわけです。なぜこういうことをしなくてはいけないのか、それはどういう意味を持つのかということ、情報公開といいますか、データを公にしながらお話ししていけば皆さんはわかってくれませんか

待っています。なぜ、リサイクルすることが大事なのかということ、皆さんが、知らないでただけで、そこに私が情報を提供して、皆さんが考えるきっかけ作りをする、それが私の仕事ではないかと考えております。皆さんの手首の運動ですね。ゴミにするか、リサイクルするか。その方向の違いが、原子力発電所を一つ造らなくてもよくなるというふうな、大きな働きになっていくはずだというお話しをして来るんです。

なぜ、この分別回収ができたかということ、リサイクル推進という業務を行政の中に設けるといことがありまして、たぶん、私がゴミ気遣いであるということ、市長が聞いていたのではないかと思います。市長室に呼ばれまして、リサイクルのことを計画しなさいということでした。「できるか、できないか、やらせてもらいますけど、もしできない時はおろしてください」というふうに言いましたら、「できない時は、やめなくちゃいけないんだよ、君」と言われたんですね。もしうちの課長が「きみ、だめだよ。そんなことできないよ」と言った時には、「市長が、できない時にはやめなさいと言われました。私をやめさせるんでしょうか」というふうに、迫ってまいりつもりで仕事をしております。

尾形 鮭の加工販売を始める下準備の段階で、特産品作りとしてがんばるんだから、包装紙は遊佐町独特のものと思って、町に働きかけたのですがだめ

でした。包装にはお金を使わず、ゴミが出ないようにということを頭に置いていますので、箱は質素に、中に入れる笹の葉っぱは山に採りに行ったものを入れたり、経費をかけないで、安全な物を欲しいお客様を対象にしようというところまで来ていますので、行政には頼らないでおります。

農協の組合長として素晴らしいリーダーシップを発揮した舅は本当に厳しい人で、姑はじっと我慢してくらしてきました。そのおじいさんが3年前に亡くなって、8歳も年の違うおばあさんは、元気で、おじいさんから解放されて……でも、一面寂しいと思うんです。それでせっけん作りを応援してくれて、自分の話相手も出来て、とても楽しんでいます。

私が遊佐に嫁いだ頃は、農家の嫁の立場は今みたいに自由ではありませんでした。外に出たいけど出られない、じゃあ来た人から刺激を受けようと、生活クラブや、外国人のホームステイも受け入れて、20年来の親しい友達ができ、子ども達が海外で快く面倒を見てもらえるような状況になっています。旦那も嫁に慣らされたと言いつつ、人を迎えるのを楽しむようになり、徐々に花咲いていく体験をしています。行政の力をあてにしないでいい、私があの人立場だったらと相手の立場を考える、それが人と人とが仲良くして輪を広げてきた源になっているような気がします。

長谷川 小回りのきく行政の良さ、難しさについて、また、環境について岸さんから一言お願いします。

岸 都市の大きさにかかわらず皆さんが頑張っていることは、環境を守る、良くするという事に対する努力と運動が多いですね。これは非常に大事なことですが、なかなか難しいことです。環境を良くすれば楽しく暮らせるというサイドからの運動や活動をぜひ展開してほしいと思います。特に小さな地域では、やりやすいと思います。ここで私は小さな町や村に住んでいる人に提案したいのは、環境を守ったあと、こんなにいいことがあるんだということを知りたい。

たとえば、農村集落排水、いわゆる簡易下水道というのは、つい10年前の農村では受け入れてくれなかったわけです。やっぱり水をきれいにすると川がきれいになる。川がきれいになると、魚がたくさん

住む。そうすると、アユ釣りも、イワナ釣りもできる。町でイワナを放してやるからどうだと……。よそからも釣りに来るんじゃないかと。皆が楽しめるんじゃないかと。こういう形で環境を良くしていく作業は結構効果的だと思います。

それから地域集落営農形態について、今までの農家生活をみると、正に経済成長指向だったように思います。市場経済の知識は大変高くなったわけですが、いざ農家自体の暮らしはどうかというと、農業を楽しんでいないというところがありました。自分できれいな花を作って売る、もうかる、じゃあこの集落で花を楽しんでいるかということ、決してそうでなかったと思うんです。地域全体で、農業をやっている人しかできない楽しみや豊かさをどこかで実現してもらいたいと思うんですね。そういう地方のいい暮らしを作ることが都市に対して優位に立つことだと思うんですね。その優位さを、都市に向けて発信できることが地方に住むものの幸せになると思います。我々の暮らしにとって、環境が大事だということの意味はそこにあります。子孫に伝えると同時に、地方を強くするためには、環境というものを守り、育て、しかも楽しむということ、地方の人々にお知らせいただきたいと思います。

長谷川 地方の価値として、環境こそ地方から東京、全国にむかって発信する価値じゃないかという大変貴重なメッセージでした。

☕ コーヒーブレイク ☕

BGMとして「山形の音風景」を聞きながら♪

「金山町の紹介ビデオ」視聴

長谷川 個性を感じさせるまちが少なくなった中で、金山杉を生かした景観条例を作り、地域作りに取り組んでいることに感銘しました。豪雪地帯なのに太陽エネルギーを暖房に使って全国的な表彰を受けた金山中学校、全国初の情報公開条例の条例化など、金山町には世界一や日本一がいろいろあると思います。その辺を含めて、どう環境行政に取り組んでおられるかを、ビデオの補足をかねて岸さんからお話

いただきます。

岸 私は日頃、東京中心の考え方、経済成長型の考え方を横目で見ながら、まちづくりをしてきました。「ふるさと創生事業」の一億円に経済成長型の思考がよく出ていたと思いますが、高く売って儲ければいいという考えが普通で、環境などはここにいる方だけが心配していたわけです。まちづくりもそのような形で行われてきました。

それが破綻して、本当に大事なものは何かということ、みんな考え始めました。地球の生態系と人間がいかに仲良く暮らしていくかを考える流れに、一気に変わって来たわけです。たまたま私の町は、5年かそこの範囲で、それを先取りしたということです。

農水省の農村整備モデル事業で、自然石張りの水路にしたいとお願いに行ったところ、高くつくからコンクリートのU字溝で作らなさいと言われました。まさに経済成長型思考で、景観や環境は一向に関係ないという行政だったわけです。農水省の偉い人にかかけあい、やっと許しが出ました。石張りの水路2000メートルをつくり、鯉を放したところ、それが環境にやさしい水路のモデルとして、農水省の水辺の環境整備事業のパフレットの写真に堂々と出ています。

山形県の最上地方は、集中豪雨で例年水害に襲われたものです。私が町長になったのが昭和46年で、49年、50年と水害が起きました。災害復旧事業の河

川修理では、設計はすべてコンクリートやブロックで囲っているわけです。その時もう少し強く言えばよかったと今では思います。地域住民は「この設計では川に降りていけない」と言うんですが、私はそれでいいと言ってしまったんですね。今、全国の川が皆そうになっているんです。

日本は、世界一きれいな水質なのに、ふるさとの山村をみな価値のないものにしてきているんですね。誇れるものがいつの間にか無くなり、悪いところばかり残った。だから皆いなくなったんですよ。バブルの時代から皆さんの運動が中央の省庁に影響を与え、変わってきた。「地方に学べ」と言い始めたんです。がんばっている市町村の意見に耳を傾け、自然に優しいとか美しい町づくりがどんどん出来るようになってきました。

本当に価値あるものは何なのかを、町づくりを通して国民的にアピールしていきたいと思います。住民の知的レベルが上がるほど、理解と行動は高まるでしょう。私の町もそういう町を目指してがんばっています。

長谷川 それでは、会場からご質問やご意見をいただきたいと思います。

原(東京) 作ればよいという企業論理、これまでの男性優位の経済論理に疑問を持っています。緑豊かな、花のきれいなスライドを見て、カルチャーショックを受けましたが、リサイクルの問題も東京と違う



のでしょうか。

東浦 女性たちが、今までの経済最優先の論理で、「いっぱい給料をもらってくる人がいい人」と夫たちに求めて来なかったかという反省も必要ではないのでしょうか。自ら変わっていく中で、また、家庭でより環境を守る暮らしをしていく中で、男性たちを企業人間ではなく生活者の感覚を持った人間に引き戻す役割を女性が持っていると思います。「暮らしと環境」の視点から、女性の力で、社会のしくみを変えて行くきっかけ作りを共にしていきたいものです。

長谷川 一台の自販機の消費電力は平均的な4世帯分になります。日本ほど自販機が氾濫している国はありません。田舎はこんなに元気だというのが話の主流ですが、反面、都市の便利な生活のツケを、日本の中で最も田舎的な場所に回しているという構造もあることを考えなければなりません。

佐藤(宮城) 環境問題で非常に不安を感じますが、一人一人がどう受け止めて、対処したらいいのでしょうか。

長谷川 今の私たちの生活のあり方がある限界を超えてしまいつつあるのではないかと、という点が、地球温暖化問題の非常にショッキングなところだと思います。私たちの暮らしの一切合切が環境問題に関わっているということです。環境を抜きにして、私たちの生活はあり得ず、暮らしと環境をどう両立させていくかという問題を誰もがつきつけられています。このことに一番敏感なのが、生命を生み育てる、相対的な社会的弱者でもある女性だったのではないかと思います。

この意味で、三人の問題提起の中で特に印象的だったのは、環境教育です。地球環境のすばらしさや、それが抱える問題をいわば目に見えるようにするのが環境教育だと思います。生活のすべてと環境との関わりを実感できるためには、目に見えるようにするのが大事です。ところが、地球温暖化問題の難しさはその因果関係が見えにくいことにあります。行政に資料をどんどん出させて、行政を巻き込んで、この見えにくい問題を見えるようにする仕掛けを作っていくことが、私たちの仕事だと思います。

1989年は世界的に節目の年でしたが、それ以降の大きな変化とは環境であり、女性ではないかと思えます。女性が主役になって、環境を中心とする元気の地域づくりに取り組み、地方の価値を再評価しつつよい環境を実現し、大都市圏を見返すような時代になってきています。

氏名不詳(北海道) 最近女性が子どもを生まなくなったことに関連して、女性の生き方や教育の問題について、学生を相手にしている先生にご意見をお伺いしたいと思います。

長谷川 子どもを生まなくなったという問題もあるでしょうが、これまで日本の社会はあまりに家族という狭い血縁の枠に閉じこもってきたと思います。岸さんが三人の報告を聞いて、「共通するのは人間のネットワークだ」と名言を吐かれましたが、より広い人間関係のネットワークをどう作るかが課題の時代が変わろうとしています。そのネットワークの中で、「我が子」の意味を問う議論がまた新しく始まっていくのではないかと思います。

記録：佐藤 玲子



◎ 第1分科会

米田 佐代子

女性史とは何か。上野さんは女達の視点で歴史を書き直すパラダイムであり、枠組みをつくり直していくと世の中の見方が変わり、暮らしも変わると言われました。そのとおりですが、わたしは、歴史の中で、被害を受けて抑圧されてきた女たちの痛みを、自分たちのバネとして掘り起こし、今の現状をどう切り拓いていくのか、なぜそうなのかと問い返す学問が女性史であろうと思います。

地域女性史の編纂と行政のかかわりについていろんな意見が出ました。女たちの暮らしの重みがあればあるほど地域には矛盾が渦巻いています。そこを苦く見つめ直し、切り拓いていく連帯の輪は何なのかなど、いろいろな思いを次のつどい開催のためのエネルギーにしたいと思います。

◎ 第2分科会

寒河江 志郎

働く女性の問題は、家事・育児に迫られる家庭と仕事の両立をどうしていくのか、地域との関わりをどうもっていくのか、など、いろいろなことがあります。これらは、いろいろな知恵を出し合って解決していかなければならない課題だと思います。

また、法的整備の問題ですが、例えば育児休業法です。形は出来たけれども、中身は固まっていない。それを作っていくのは女性の力ではないかと思えます。もっと女性は発言すべきでしょう。女性の経験は未来を写す鏡だといつか読んだ本に書いてありました。これからも一步一步、歩んでもらいたいと思えます。

◎ 第3分科会

柴田 洋雄

いろいろなところで話を聞きますと、地域を形成する時に行政が関わるといような活動を規制するという、昔の国家主義みたいな感じをもっている人が、今もってたくさんいるということにびっくりしています。

行政とは、住民がつくるものだという基本をどうして忘れていたのかなという感じがします。

地域を形成する中で行政の役割について規制する立場じゃなくて、共につくるんだという行政に対する認識をもう一度考え直してほしい。行政をコントロールしているのは、国民であり、県民であり、市民であるということが基本だと思っています。

◎ 第4分科会

阿部 康子

環境問題は今、被害者と加害者という単純な図式では考えられなくなっています。自分もその中の一人だという認識が必要です。今回、「暮らしと環境」という分科会が入ったことは非常に意味があります。

女がどう生きてきたか、どう生きていくべきか、その掘り起こしに関して、それぞれが、それぞれのやり方でやるべきでしょう。「これしかない」とか、「このやり方が一番正しい」という思い込みの陰には、必ず大きな落とし穴があると思います。アプローチは、みんなそれぞれのやり方があっていいし、その形がこの山形大会だったのではないのでしょうか。



「現実を深くとらえた女性史を求めて」

中京女子大学教授 伊藤 康子

第6回女性史のつどいも終ろうとしています。ふりかえってみますと、沖縄の第5回つどいに、山形からたった一人の参加がありました。第6回つどいを開いてくれる地域、グループを探している時、この人は「明日にでもやりたい」とおっしゃった。でも、山形に帰れば、女性史の研究者はいない、グループは小さい、「できないわよ」と言われても道をさがして、ニールフォーラムがその熱意を受けとめてくださることになりました。国連婦人の十年以後の、女性行政進展の結実である、男女平等、男女共生を追求する組織です。

おそらく山形では、女性は能力と実績があっても評価されない、評価される人はごく少数、県民のなかに根強く残る女性差別を、永く公務員した方も無念に思っていられるのでしょうか。全国でも4人しかいない女性教育委員長さんが実行委員長をひきうけ、多くの男性のご理解も得て、有名無名の女性が力を出しあって、女性史のつどいを実現してくださいました。心からお礼申し上げます。

かつて平塚らいてうは、『青鞥』創刊宣言「元始、女性は太陽であった」を、「烈しく欲求することは事実を産む最も確実な真原因である」と結びました。

山形の、たった一人の火の玉のような願いが協力をひきだし、全国の女性に、けなげで向上心にあふれ、けれど自分なりにたくない新旧のおしんの生活と想いを共有させたのは、今が1990年代だからでもあります。過去に比べればよくなった。でも、働く女性、家族と地域、暮らしと環境のどこにでも、解決されきっていない課題があることが話しあわれました。女性史の分科会は一つでしたので、もっと女性史を話したかったとの声があちこちからきかれましたが、第6回つどいの討論をバネにして、幅広い女性の願いを包みこんで、明日の女性史をつくる努力をしていきましょう。

ここであらためて申し上げたいことは、女性史の学習・研究は、女性解放の立場ですすめてこそ意味があるということです。女性学の方が何とおっしゃ

ろうと、私は、女性解放の女性史を強調したいと考えます。

なぜ女性解放史なのでしょう。

私はきんさんぎんさんの里愛知から、おしんの里山形へ来ました。きんさんぎんさんは、テレビで見ると、ここにこ元気で102歳を楽しんでいるように見えます。しかしその102年は、1892年明治25年に生まれ、5、6歳から草とり、家事や弟妹の世話で入学も3年遅れ、2人が一日交替でしか学校へ行けないほど働きぬいた一生です。糸紡ぎ、機織り、縫い物を習い、親の決めた結婚に従い、きんさんは19年間に11人の子を産み、5人は早死にしました。上の5人の子は女、姑は跡継ぎの男の子をうまない、子どもが死んで泣いている暇があったら田んぼへ出て働け、と文句をいいます。結婚の自由、離婚の自由がある今は幸せと2人は言い、お金を無駄使いして人が死ぬ戦争は絶対反対だそうです。でもその時は、親、姑、国に言われるままでした。1年遅れてやはり愛知の農家に生まれた市川房枝は、夫の暴力に泣く母を見て、女であることが辛い悲しい運命を強制する社会を変えようと、婦人運動に一生をささげます。

日本国憲法に男女平等がうたわれて半世紀近く、随分女性は暮らしやすくなりました。それでも女性の賃金は平均すると男性の半分、女性議員も女性管理職も少ない。お金で人間の値うちをはかるよう教えこまれて、女性は男性より劣ると思ひこんでいる人も少なくありません。女性も主権者なのだから、行政は女性である故の辛さ悲しさをとり除く義務があるのだから、私たちは人間らしく自分らしい生き方を選択し、社会の側に問題があれば行政と共に変えていって、子どもや孫によりよい日本をひき渡したいのです。

過去の女性の生きる支えになったのは、子どもと地域といわれます。家族も地域も、働く場での人間関係も環境も、私たちが支えもすれば殺しもあります。その歴史を問い直し、書き継ぎ、書けない人、書か

ない人の分も書き重ねていきたいと思います。

愛知女性史研究会で、今『写真でつづるあいちの歴史』出版に努力しています。近代の女性の写真は少なく、資産家、学校、軍事援護活動と、国と金の都合で写真がのこされているのです。高山の女性史学習会『飛驒の女性史』は、「おっ母さんが陽の目を見らば」と、ご家族が喜んで提供された写真集ですが、埋もれている女性に、女性史こそが陽の目

を見させることができたのです。女性の働き、女性の力を女性史がきちんと評価し、記録し、日本社会が女性を正當に位置づけるよう働きかけていきたいと思ひます。

このような女性の生き方、女性史学習・研究がひろがることを願ひ、何年後になるかわかりませんが、第7回全国女性史研究交流のつどいでお目にかかることを期待します。どうもありがとうございました。

女性史と女性学とは……

Q：伊藤(栃木) 私は、女性史に非常に興味があり、歴史という立場からしっかり勉強したいと思ひていますが、その女性史と女性学について、とりわけ女性学というのは何か、いま社会で定義されていることについてお伺ひします。

A：工水戸 女性学と女性史関係はどうかということだと思ひますが、女性学について「日本女性学会」は「既成の諸学問を女性の視点で洗い直すものである」といっています。

又、女性史とは何か。私は、「女性が自由・平等・民主主義をわがものにしていく、その成長の過程を課題とするものであり、歴史を動かす主体としての成長が問題である」と思ひています。

(9月4日 全体会の質疑応答から)

全国女性史研究交流のつどい'94やまがた 速報

〈9月4日発行〉

＜上野さんの記念講演「女性史とフェミニズム」をまとめてみました＞

1. 日本女性史と女性学の不幸な関係が何故生まれたのか？

日本女性史の研究と女性学はある種の対立関係を生み出してきた。日本女性史は「解放史」の立場にたつて「弱者である」女性の解放を唱えてきた。その意義は大きい。しかし、女性をとらえる視点を必要が生じてきた。パラダイム転換が求められた。婦人に関する問題（問題婦人）、底辺女性問題等の視点でなく、普通の生活を送っている女性の生き方の問題、自分自身の生き方を問う研究（女性常民の研究）を行う必要性が生じてきた。それが女性学の誕生の意味である。

2. 女性史・女性学の現在…女性史研究は「つけた史」か？

1970年以降の女性学（フェミニズム）の動きは、大きなうねりを産み、多くの成果を残した。しかし、女性史や女性学に関する研究が進めば進むほど、それは補充的研究としての評価しか与えられない現実が明らかになった。男性がやらなかった部分の「つけた史」的な仕事という評価である。また、大学などでも女性史や女性学研究者は、男女平等という大義名分のために1名だけ採用される傾向が多い。1名をショーケースの中の女として採用しそれ以上は採用しない、というゲットー化（囲い込み化）が現実化した。男社会の問題を指摘し、批判してきたにもかかわらず、男がやらなかった部分の補充の仕事として、あるいは、ある種の男女平等のポーズとして女性学が受けとめられている。なかなか中心的な問題として扱われない現実があった。

3. 新しい女性史の動き…「書きなおし」、現代社会のあり方を問う。

こうした現実を踏まえ、新しい女性史研究の動きが見られる。これまでの歴史が男性によって書かれてきた事実を踏まえ、男が書いた文書資料を絶対的に尊重するやり方を批判して、記録や資料として残されなかった歴史を掘り起こし、聞き取りなどによって、書きなおし（書きなおし）作業が行われ出した。また、「女を被害者としてだけ位置づけるのではなく、加害者としての歴史を問う研究も出てきた。そうした視点の転換は男性にも向けられるべきである。例えば、従軍慰安婦の問題も、男らしくという名目で、人を殺し、女性の性を踏みにじる日本軍、国家、兵士の加害者側の研究が行われるべきなのである。そうした動きの中で明らかになってきた事実は、「男らしさ」とは何か、「男中心社会」の現代社会のあり方に関する問題であった。女性史や女性学は、女性の私的な領域の問題ではなく、現在の社会のあり方を問い直し、変革しようとする志向性を常に持っている。日本経済のあり方、男社会のあり方を再検討しようとする、きわめて公的な領域の動きなのである。



…………… 分科会参加者の声を拾ってみました ……………

★「講演会は、大変、興味ある内容でした。第1分科会では、新潟の倉元さんの問題提起に興味を持ちました。慰安婦問題は、幾人かの人々から問題提起されたが、私たちの母の世代、現代の私たち、娘たちの世代が、どのように扱われてきたか、扱われているかの結果である。願わくば、この地でも、様々な交流が企画されることを期待したい。「つどい」全体のテーマをもう少し伝えてはしかった。」（第1分科会、山形市）

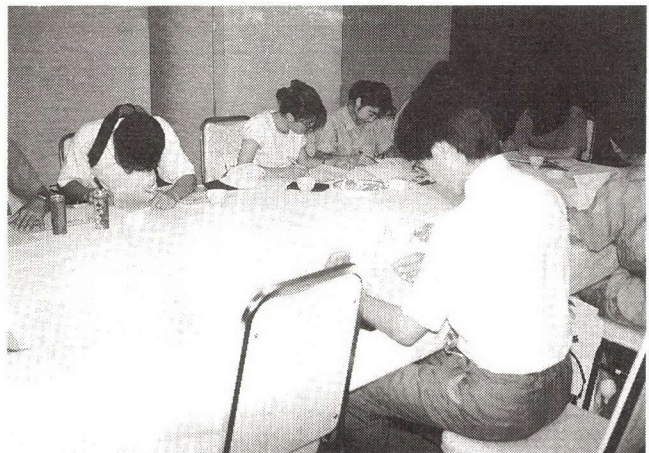
★「第2分科会の話し合いは、家族と地域と一緒に良い内容でした。働く人々の意識から言えば、やはり都会の方が自立に向かっていると感じました。ただし、都会の人間の方が生活に疲れている感じがするので、心の方で問題が起こってくると思われます。三世帯同居はもう刃の剣です。山形の広い空、背い山脈が、なんといってももうらやましいですね。」（第2分科会、東京都）

★「家にばかりいる専業主婦なので、今日色々聞かせて戴いたことを参考に、これからは頑張りたいと思います。すばらしい1日でした。ありがとうございました。」（第2分科会、山形県新庄市）

★「外国人花嫁の問題に興味があった。嫁不足の原因は、農業後継者問題であり、農家だけではなく国も考えなければならぬ問題である。外国人花嫁のパネリスト（庄司さん）が言ったように姑の意識を変えることによって、お互いに理解を深めることができると思う。国際交流の流れが、山形の地域から始まっているように思えた。山形の外国人花嫁の子供たちが成人した時、山形の地域・文化が発展していることと思う。」（第3分科会、沖繩県）

★「大変なお骨折りをありがとうございました。記念講演は、私にとって、少し難しかったような気がしました。分科会はパネリストも参加者も皆、すばらしい考えや意見を話されて、とても勉強になりました。山形の方とずっと話をしたかった。山形は空気がきれいで、空が高く見えます。今度ゆっくり観光を兼ねてお訪ねしたいですね。」（第3分科会、栃木市）

★「パネリストの方々の生き生きとしたお話とその内容に大変感動しました。以前から、山形は大変個性的な生き方をする人々、町々があると思っていましたが、具体的に環境への取り組みを伺って余計にその感を深くしました。話し合いの進行過程で、「遅れているからかえって良いことが出る」「小さい町だから思ったことが実行できる」という発言がありましたが、私はそう思いません。「はじめに人ありき」、都市規模は余り関係ありません。もう一つ感じたのは、個人の活動がすばらしいと、市民の手で何でもできると勘違いをすることです。個人の力には限界があります。私たちの市民運動の最終目標は、公を動かし、良い制度、市民が幸せになる血の通った制度を作ることだと思えます。そして、それらを次代に引き継ぐことだと思えます。そのことを念頭においてこれからも活動して行こうと思えました。とても良い出会いを本当にありがとうございました。」（第4分科会、県外？）



年の初め、山形開催のニュースは届いてた。「女性史の会」ってやまがたにあつたのかな？の危惧は暑い夏、参加して吹っ飛んだ。初日、あんなに多数参加していた地元の声の声を夜の交流会でもっと聞きたかったとか、男性のパネラーや助言者がドウモ……とか、思いは残るけれど、会を成功させた山形の女性のパワーに敬意を表したい。ありがとう！いい勉強になりました。

今、山形では風が吹いていることと思います。函館の私たちも山形のつどいがきっかけになって交流が始まっています。

北海道函館市 酒井 嘉子

名札と共に桜桃の実を受付でいただいた時、山形の女性たちのおもてなしの心が胸一杯に拡がりました。いま山形の女性たちの多方面に活動する姿が展望できたのはうれしかったです。でも、私が参加した一番の理由、「この聞き取りはこの姿勢で書き残して良いのか、歴史の全体状況の中でこのとらえ方で良かったのかを全国の仲間とぶつけ合い、自信を持ってまた明日からの取り組みにかかりたい」は、時間と場の少なさで満たされませんでした。次回に期待という気持ちです。

長崎市 葛西 よう子

山形へ入ってジェット機の下に拡がる広大な、波打つ黄金の稲田（それがまるで羊羹を切ったかのように見事に一定区画に仕切られていたのに思わず歓声を上げたのでしたが——）を見て、これは同じ農業県といっても、我が大分とはずいぶん違うなと嘆息しました。

私は第二分科会に参加しましたが、そこで山形県が共働率、三世代同居率、六十五歳以上の親族のいる世帯率、それぞれに全国一位だと知りました。ここでも農業、農家の崩壊度ははるかに進んでいる大分の場合との違いを考えさせられました。しかし、三世代同居を背景に、農村の女性たちが進出企業などで優れた働き手になっている問題など共通点もみることができました。これをどうみるかぜひ話し合いたかったのですが、時間が足りなくてとても残念でした。

しかし、あれだけの大勢に出逢いと考える機会を作って下さった山形の皆様に感謝いたします。

別府市 古庄 ゆき子

退場する参加者たちが「目からうろこが落ちた」と語っていた。女性の解放、解放史に加え、現代の一般女性や、男社会の中の女性などが幅広く問題を提起した今回の「つどい」。地域で行動を起こすエネルギーを与えられた。

山形県新庄市 沼野 慈

もの言わぬことに馴れてきた女たちの、抑えきれない思い。そこに共感しながら、流されない濡標であろうとする目と心を本大会に学んできました。橋田寿賀子が「おしん」に結晶させたかったテーマもそこにあつたのではないのでしょうか。書き残すことの意味、書き残さなければならぬ真実を、女が担った生きざまの苛酷さに見据え、それを跳ね返す意志の強さを行動化してゆく力を自分たちのものにした。い。「おしんの里」は、女の生きざまに、絶えず新しい風を送り続ける女たちの連帯の里でありたいと思います。実行委員の皆様、おもしろしナッス。

山形県鶴岡市 東山 昭子

酷暑の東京を逃れて山形の涼しい夏を期待したのですが、山形もやっぱり酷暑でした。私は、かねてから生産と消費を女性問題の視点から問い直す理論を求めていたのですが、上野千鶴子氏の「男中心社会・現代社会のあり方の再検討をしよう」という問いかけに目を開かれる思いでした。

東京都目黒区 原 輝恵

全国各地から参加された皆さん方の、女性の生き方に関するあふれる思いを聞いて、早速、尾花沢の友人数人と話し合いを持ちました。尾花沢に住んだ女の暮らしを問い直し、自分自身の、そして社会のありように対する取り組みなど、「つどい」の参加は、今後の私達の女性史研究のみちしるべになったと自負しています。これを契機に未知の分野に挑戦しながら、みんなと力を合わせ地域に「つむじ風」を吹かせていこうと決意しております。

山形県尾花沢市 宮嶋 サツキ

娘は農家には嫁にやらぬ。迎えた嫁には大変な労働を強いる。しかも外国の花嫁が増えている——分科会報告に、現代の女性像が集約されよう。沖繩大会に参加された一人の声が全国の集いを実らせたという感動的なやまがた。女性史の学びの姿勢を考えさせられた。私は、歴史の確かな学びに立脚した地道な掘り起こしにこだわり、在野の学びに徹したいと考える。凜とした学びの中からこそ人間らしく生きる真の語らいが、とも考えている。

千葉県八千代市 宇野 勝子

男性が歴史を取りしきってきた裏で、その体制に取り込まれ、利用され、差別され続けた女性の歴史に光をあてようとしていることは、フェミニズム運動として当然なことと思う。

東北の歴史として貴重な風俗習慣である、恐山の巫女イタコ(青森県)や越後の誓女(新潟県)のような生き方も忘れないでほしい。

どちらも生まれながらに盲目だったが故に、師匠とか親方のもとで厳しい修行に耐えて、福祉などという恩恵のない時代に、自立して生きた女の生き方なのだから。

山形県南陽市 嶋津 ゆき

全国各地の女性史研究の現状の確認をしたい、今まで積み重ねてきた課題がどのようにさらに検討され、極められるのか、などの方法論の確認をしたい、各地の女性史研究の仲間たちと励ましあったり、情報交換をしたい、などの目的で参加しました。このようなことの出来るのはこの「つどい」が唯一の場だと思ってきましたが、どうも私には期待外れで、消化不良の感がありました。

東京都足立区 赤塚 朋子

第一分科会に出席しました。「女性の現在、過去、未来」のテーマにつながるもので、感銘深く敬意を表したものは、資料として配られた「山形女性史年表」です。この中からは戦後女性の向上をめざしていきいきと行動し、発言する山形の女性の姿がまるで映画を見るように感じとれました。それは驚きでもありません。この女性たちの過去ということだけでなく、今の新鮮な思いを未来につなげるよう小さな地域の中で努力したいと思います。

山形県東根市 田中 信子

◇初日のオープニングのスライドについてですが、山形の観光のPRとしてだけではなく、最上川と女のくらしとか、もっと山形の女性の姿があれば良かったと思います。

◇分科会は人数が多すぎたためか、会話のみ合いが少なかったのが残念でした。

◇全体会場は後ろの人がよく聞き取れなかったので、もう少し配慮してほしいです。

山形市 栗原 千代

会場風景



◇ 2日目
分科会報告



◇ またお会いしましょう

◇ 活発な意見が出る



◇ 展示コーナー 力作がたくさんありました

女性史のつどい、その歴史と期待

中京女子大学教授 伊藤 康子

1977(昭和52)年から1994(平成6)年へ、全国女性史研究交流のつどい(以下「つどい」と略称)も高校2年生にあたる年輪を重ねた。歴史学という親からうけつがなければならぬものはまだ大きい、未来へかける若々しい希望は大きく、さまざまな方法を試みながら質を高めようとしている。

女性史のつどいを提案したのは、地域女性史最初の拠点である女性史サークル・松山、初開催の勇気と実務を担ったのは、私の所属する愛知女性史研究会である。1970年代は女性史ブームといわれていたが、1977年のつどいに参加したのは、女性史の本の書き手ではなく、それまでは読み手、できれば読むだけでなく学びたい、方向や方法がわかれば調べてみたい、心の底には自分の身にひきつけての女性史を書いてみたい、過去、現在、未来に根をはる生活圏の女性像を確かなものにしたい、と願う女性とごく少数の男性であった。したがって、最初のつどいのテーマは、「私達はどういう女性史をめざすか」と素朴であった。なぜ女性史するのかの動機、女性史の名でどういう本が出され、聞き書きがされ、史料はどういうものがあり、年表はなぜつくる、と、女性史の門のくぐり方、歩き方をたしかめるような集会であった。

1981(昭和56)年旭川市の第2回つどいは、農山漁村、ウタリ(アイヌ)、都市労働という地域生活史と女性史学をかかわらせつつ深めることを志していた。広い緑ゆたかな北海道というイメージは、観光宣伝色の強い一面であって、直前の台風禍で申し込みながら参加できなかった人は道内農村女性が多く、100万、1,000万単位の借金と農業切りすて政策に対決する厳しい現実を立てて女性の歴史を探るといふ、緊張感ある集会であった。

1983(昭和58)年首都圏でおこなわれた第3回つどいは、歴史学内外の研究者が多数参加し、講座や分科会が数多く持たれた。外国、前近代、家族、戦争、学校教育、社会教育、労働権確立と切り口も多様になり、経験の総括と文献史料にもとづく研究報告が



重ねあわされた。民衆生活史が掘りおこした“つらさに耐えて生きてけなげな女たち”の生き方は、歴史過程のなかの何であったかを問おう、という方向を示した集会であった。

1986(昭和61)年、松山市での第4回つどいは、愛媛県下に女性史グループを育て、四国女性史のつどいを開いて全国集会に結ぶ活動として開かれた。女性史サークル会員が集団で「えひめ報告」や遊廓、女子教育史の現地見学を支援、愛媛が持つ地域社会史の蓄積を全国に伝えようとしていた。「ここに生き、住み、働き、学び、たたかい、ここを変える女性史」がよびかけられ、生活圏を変える主体形成が重視された。

1993(平成5)年沖縄で開催された第5回つどいは、沖縄の歴史と現実を女性の目でとらえ直し、現代日本の問題点を指摘しようとした。戦争、基地、祭祀、出稼ぎは、その時と現在の女性にとって何だったのかを、「沖縄から未来を拓く女性史を」という大胆な訴えのもとに展開した。「女性の性による兵隊の管理、これが軍隊の構造」を実証する「慰安所マップ」が関心をよび、行政とのかかわりが討論の焦点となり、女性も、女性史集団も自分たちのための教育・情報の上に自立を強めなければ危ういことを明らかにした集会であった。

沖縄には26都道府県から500人余が参加し、そのなかの一人の感動が、1994年第6回つどい開催の原動力となった。これまで日本海側、東北の県からは

つどい参加者が少なく、女性史の成果の影も薄い。その分、おそらく女性がかかえる矛盾は深く、社会でも家庭でも働き抜いているのは沖縄と同じだが、女性への評価が高い沖縄に比べ、山形ではもっと黙ってがんばれというような、伝統的であいまいな社会的雰囲気を感じる。日本国憲法のもとで、女性も主権者、男女平等がうたわれて半世紀近く、日本の女性も選択しつつ自立した生き方を確立しようとしてきたのに、山形では、三世同居や現代おしん像が今も無条件に女性を縛りかねないように思われる。1990年代の日常生活から問いかけて、農村女性も共働き女性も、外国からきた妻も、働きもので向上心ある普通の女性が、男性と共に充実した生を自分のものにするのはどういう道があるのか、見通そうとしたのが山形のつどいだったのではなかろうか。

沖縄では行政とのかかわりで、女性史研究や集団の自立が討論の焦点になったが、山形では、女性公務員、女性行政に蓄積された力がつどいを支えていた。

1992年戦後山形女性史の記録『樹氷の郷の女たち』を出したのは山形市役所職員研修グループ「こすも

す WHY」だったし、昼は公務員、夜はボランティアでつどいの事務局を支えた人も相当数いた。男女平等がたてまえの役所で、女性であることの辛さ口惜しさを自身、市民、県民の生活で見聞体験しているから、女性の現実をよりよくしたいの一点で男性とも主婦とも協力体制を組んだのではないかと、それは山形女性の複雑な位置の反映ではないかと、私は考えている。1993年山形で開催された第39回日本母親大会の「女性史にまなぶ」特別講座が盛況だったことと、根は一つではなかろうか。

女性史を語れる分科会は一つ、他では女性問題を歴史的に扱わなかったので、全国から参加した人びとからは、心ゆくまで女性史学習、研究について討論したかった、という声がかかれた。だからまたつどいをどこかで、と他人まかせにしない積極性があった。それはつどいの原点である。

山形が第6回つどいを実現してくださったから、各地の女性史集団は新しい刺戟をうけ、地域女性史の展開に自立的に努力する機会を持てた。あらためて山形のみなさまに感謝し、全国の女性史学習・研究の発展を期待したい。





山形の熱い二日間

山梨県立女子短期大学教授 米田 佐代子

日本列島が猛暑におおわれた1994年の夏も過ぎようとしていた9月、山形は女性史のつどいの熱気のなかにあった。

それは、これまでのつどいに参加し、今回の山形のつどいにもいささかのかかわりを持ってきたわたしにとっては、期待と不安のないまぜになった熱さだったと言えるだろう。なによりも1992年沖縄の第5回のつどいから、たった2年の間に第6回がひらかれるという思いもよらない盛り上りと、それを可能にした山形の実行委員会の方々の目を見はるような取り組みが、わたしの心を熱くさせていた。

山形のつどい実現にいささかかかっていると書いたのには理由がある。前の年、山形で日本母親大会がひらかれた時、わたしは特別講座として新しく設けられた女性史講座の講師に招かれた。どれだけ集まるだろうかと山形大学のわりあい小さな教室が会場にあてられたのだったが、定刻前に会場はいっぱいになり、コンクリの床に新聞紙を敷いても足りず、廊下にまであふれだす盛況であった。女性史講座の新設そのものが、地元山形の母親連絡会の方々からの強い要望によるものだったことも、後から聞いた。

わたしは感動し、その席で思わず「山形で女性史のつどいをしませんか」とよびかけてしまったのである。

その時、会場におられた方が、沖縄のつどいにも来られ、次の開催地が未定と聞いて、山形でやれないか、と思ったという。わたしの発言は、もちろんひとつのきっかけをつくったにすぎないけれど、それでも何百分の一のきっかけになったとすれば、やはりかかわりを持ったと言えるだろう、と今でも考えている。

わたしが山形でつどいを、とよびかけたのは、他にも理由があった、というのは山形には遠い戦前からの生活つづりかた運動の伝統をふくめて、庶民が

自らの生活のあゆみを書きつづってきた歴史がある。もう十数年も前に山形の青年団の学習会に招かれた時、青年団の若者たちは「母の歴史」を書く運動をしていた。山形には、こうして自分史であれ聞きがきであれ、女性がものを書き、歴史をふり返るといふ伝統もまたつみかさねられている、と思ったことが、山形でつどいを、と考えさせた理由の一つであった。

けれども、正直に言って山形での開催にこれまたいささかの不安がなかったわけではない。わたし自身何べんも書いてきたが、このつどいは、どんな全国組織も規約もなく、ある地域の女性史研究グループが名のりをあげて開催をよびかけると、全国の女性史研究者や女性史サークルなどが自発的に手弁当で参加し、つどいを支えるという、“世にも不思議な”草の根方式で第5回までつづけられてきた。それだけにつどいの持ちかたはすべて現地の実行委員会に任せられる。その手づくりスタイルをひそかに誇りにさえ思ってきたわたしたちであったが、山形のぼあい現地には女性史のサークルがあまりないことから女性の関心を集めているテーマ、「労働」「家族」「環境」などをとりあげることになったという。それぞれのテーマが女性史としてもとりあげるべき課題であることにはまちがいないのだけど、女性史研究交流のつどいとして成立するのだろうかという声がわたしの耳にも入ってきていた。

わたしはこうした声にたいし、二つの面から考えてみたいと思っていた。一つは女性史研究そのものがアカデミックな歴史の専門研究をしているものだけによって担われているのではないという意味でひろく参加者を求めたいという立場と、もう一つはそれにもかかわらず今庶民女性の歴史をふり返る時、そこには庶民のけなげな生きざまだけではなく戦争や性差別、民族抑圧などさまざまな矛盾がうずまいていることを鋭くえぐり出す視点が必要なのであつ

て、そこがぼやけたのでは女性史のつどいの意義がうすれてしまうという立場とであった。

山形のつどいが、「風よ吹けノおしんの里から」というメインテーマに決められるとおり、そしてわたしが期待したとおり、女性たちの貧しく苦しい暮らしの中でつちかってきたエネルギーの掘り起こしに大きな力となったことは、だれもが認めるだろう。ただ、女性の歴史と切り離すことのできない戦争の加害責任の問題や民族・性による抑圧の問題を深めるという点は、やはり十分であったとはいいたいように思われる。第1分科会で議論された行政と女性史研究のかかわりかたをはじめ、他の分科会でも出された農業と女性の問題、「国際結婚」をめぐる問題等々が、女性史の問題としてどうとらえなおされるのか、戦後50年を控えて、戦後日本の歴史を女性史の立場からどう評価するのか、といった議論を

もったしかなかったという声は、会の終了後も聞かれたことであった。

とまれ、それは山形のつどいの問題ではなく、まさしく女性史研究を課題とするわたしたちすべてが負うべき責任であるはずである。沖縄から山形へと、つどいが受け継がれたことによって、わたしたちはその課題をいっそうはっきりと見すえることができるようになったのだと思う。その課題をさらに発展させるのは、次にどういつどいがひらかれるにかかっているだろう。

わたしたち有志は、あと何年かのちに東京でつどいを開こうと話合っている。条件はないけれど開くべきだ、と。それが今回全力あげてつどいを開いてくださった山形の方たちへの、一ばん大きな感謝の表わしかたになるのではないかと思うからである。



編集委員会

「第6回全国女性史研究交流のつどい'94やまがた」は、盛会のうちに幕を閉じた。

つどいそのものはもちろんのこと、準備からこの報告書の作成までの2年間、終わってみれば、一つの仕事を成し終えた大きな喜びと、全国の方々と新たな出会いの感激、そして幾つかの反省点など、学ぶことの多いつどいであった。

何はともあれ、女性問題に関心をもち、その推進を図ろうと多くの女性や男性たちのネットワークで始められ、スタートからエンディングまで休日も取らずに“フル稼働”したのであった。

しかし、山形で開催するにあたっては多くの迷いと戸惑いもあった。山形県内には「女性史研究」のグループは数少ない。そのような状況で全国規模のつどいを開くことが本当にできるのだろうか、これまでの女性史研究交流の流れに沿うことができるのだろうか、など多くの疑問も生じ、メンバー間で話し合いが重ねられた。その話し合いの中で、次のような声が高まっていった。

1. 女性研究はそもそも、女性が理由のない差別を受けることなく、より主体的に生きていくことを求めて始められているのではないだろうか。その基本理念に戻って、女性のより良い生き方を模索し考えることをテーマにすれば、女性史研究グループの少ない山形でも、積極的に意欲的な話し合いが可能なのではないだろうか。

2. 「つどい」を開くことにより、この山形にも女性史研究の意欲が芽生えるのではないだろうか。女性と社会との関わりをテーマとし、関心と理解を深め、より良く生きる為の啓発の機会にできるのではないだろうか。

こうした想いを背景に、私たちは“おんなも創る、うつくしい街、ゆたかな暮らし”をメインテーマとし、「女性の過去・現在・未来」「働く女性」「家族と地域」「暮らしと環境」の四つの分科会を設置して実施する“山形方式”を考えだした。この方式で開催が可能なかどうか、これまで、つどいを開いて来られた方々に問い合わせた結果、いずれの方々からも開催地の皆さんの考えでよいという回答があり、更に検討を重ねて開くことにしたのである。

さて、第6回のつどいは、山形の女性や男性たちに多くの成果を残してくれた。開催までの連絡、手

配、依頼、打ち合わせなどを通して、実行委員会のメンバーはお互いに良く知り合えたし、女性史研究とは何かを考えるきっかけともなった。つどいでは考え方や生活パターンの異なるたくさんの人々と交流し、真剣に討議することができた。それらの経験は、つどい終了後も参加者たちに多様な形で影響を与え、さまざまな形で引き継がれている。

しかし、報告書にもあるように、山形のつどいに対するいろいろな評価の声もあった。特に第1分科会の女性史の参加者から、「話し合いが拡散していて研究交流に不満足」との声や、「山形のつどいのテーマの広げ方」に対する不満の声、「行政から補助と支援を受けたこと」に対して疑問視する声、なども聞かれた。これは私たち主催者側の運営の仕方の不手際もあったと思われるが、反省点として、できれば、女性史研究交流の主旨やある程度の内容の枠組み等が、最初に決められ、受け継がれていたら、有効に運営ができたろうにとと思われる。

また、女性史研究に一石を投げられた上野さんの講演に対して異論や不満の声もささやかれていたので、この報告書に意見や反論をしていただきたいと思ったが、依頼した先生からお断りを受けた。誠に残念である。実は、そうした意見や反論の積み重ねが女性史研究を充実させていくのではないかと思われるのだが。

ともあれ、私たちは、この“つどい”を通して多くのことを経験した。楽しかったこと、学んだこと、考えさせられたこと、たくさん経験が私たちに前向きに進んでいくことの大切さを改めて教えてくれた。

山形のつどいの実行委員は2～3の公務員退職者を除き、そのほとんどが専業主婦や自営・民間に働く女性たちで、文字どおり草の根活動であった。また、行政の支援を受ける中で、行政との望ましい関わり方の必要性も実感できた。事務局の場となった「ニールフォーラム」は女性問題ひいては男女共同参加をすすめる運動団体であるが、今回のつどいを共にすすめる、その土台を支えている。

終わりに、「女性史研究交流のつどい」のますますの発展と充実を期待し、関係各位のご協力に心から感謝しながら、山形のつどいのまとめとしたい。

編集後記

「殺人的スケジュール年末年始休みなし、しゃべる時間の5倍は、時間がかかってしまった。文献の出典は、きちんとつける。相手は歴史家の先生方、ゲラを組んだ段階でもう一度見る。」

上野千鶴子氏の“女性史とフェミニズム”の講演記録を担当して講演記録に朱を入れて頂く段階での、上野さんとの何度かのファックス通信に寄せられたメッセージの一部である。当代随一の社会学者としての責任ある言動等に深く感銘を受け、学ばせられた。(松本 陽)

“つどい”の二日間は、裏方として会場を出たり入ったり、講演や分科会報告を進める中で、落ち着いてその記録を読んで、改めて確認しているところです。簡潔にすることによって、内容がより鮮明に浮き上がってきます。本来の女性史の研究を縦糸とするなら、暮らしや環境などの面からのとらえ方は横糸となって、つややかに新しい女性史が織りあがっていくことなのでしょう。自分をも振り返るよい機会となりました。(櫻田 裕子)

いつの頃からか、私は「歴史が大好き」と言っておりました。しかし、その事をよくよく考えてみると男とか女とかは関係なく歴史の表舞台に登場してくる人々の物語で、物を言うことの出来なかった民衆の声や姿ではなかったような気がします。このたびのつどいや報告書作成に関わり、歴史の底に埋もれてしまいそうな事実を丹念に掘り起こし、そこに息吹を与えておられる姿を拝見して、改めて今という時代を考え、私自身を見つめ直すことが出来ました。これからは、過去の事実をしっかりと捉えて再確認し、それを未来へどうつなげて行けば良いのかを考えながら、私が、今成し得る事の一つ一つを大切にしていって進んでいきたいと考えています。(須藤 路子)

“つどい”の感動と余韻を心に、報告書の作成に取り組んで半年余り。報告書が次第に形を成すころには“つどい”全体を再体験したような懐かしさを覚えた。未来へ向かって、のびやかに、そしてたくましく力強く生きる女性の姿を思いながら、“女性史のつどい”の果たす役割の大切さを改めて考えた。常に時代と共にあって明るく未来を映す“女性史のつどい”であることを願い魅力あふれる素敵な方々との出会いを何よりも喜び、感謝している。(靄 陽子)

貴重なご意見やご発言の一言一句は、山形のつどいの宝もの。けれど編集にあたって字数が限られ意のあるところと心がけましたが、はたして、納得いただけますか心配しています。

毎週(月)に集まった編集スタッフから「私変わったわ、この1年で」「私もよ」と作業をすすめる中でのことばに、感動したり、意見を交わしたりも、良い思い出です。

また、執筆お願いした方々へ心からお礼申し上げます。

山形のどこかで、女性史の研究会等が生まれたいかなあと心から願う日々です。(結城富二子)

編集委員長 三宅高子

編集委員 植木きよあ 寒河江勝子 玉津菊子 松本陽

大宮登 櫻田裕子 靄陽子 結城富二子

菊地トシ子 佐藤玲子 沼野慈

今野和子 須藤路子 増川静子 文責編集委員会

第6回 全国女性史研究交流のつどい'94, やまがた報告書

頒価 1,500円 1995年3月30日 発行

編集 第6回全国女性史研究交流のつどい'94 やまがた「報告書」編集委員会

発行 第6回全国女性史研究交流のつどい'94 やまがた実行委員会

事務局 新やまがたひゅーまんらいふフォーラム

印刷所 坂部印刷株式会社 TEL 0236-31-2056

